

た。第一市次郎が負傷のため一寸ものまない。留蔵も心臓がわるいと醫者にいはれたとかで、これもかなり節してゐる。そんな事で開成山の夜も淋しくなつた。これも時代の推移といへばいへるだらう。

明日は小學校で初めての唱歌會があるといふので、わざ／＼小使が手紙をもつた來た。——これではたとへ雨がふつても約に背く事も出來まい。朝早い事だし早くねて、頭をしつかりさせなければなるまい——かう思つてゐる。明朝の用意を命じたり、不足のものを買ふやうにかきつけたりして早くねる。

市次郎を校長の宅へやつて、菓子料金五圓をおくり手紙をそへた。

七月卅日 驟雨 80

今日は小學校行の日だ。歩くのに馴れない私には、先づ天候が氣づかわれる。自働車で行くほどの道のりではなし、さりとてこのまゝ泥濘の道をごろびでもしては——と、われながら氣遣はれる。「それでは有江さんの頼む車屋は——」と私が氣がついて聞くと、それならありますと關さんがいふ。それならはじめからそれがよかつたのに——といった頃には雨はドシヤ降り、行つてもらふには氣の毒だし、何のかのいつても中々事が運ばない。農村にゐるものゝ氣永さをしみ／＼感じる。

私はもう早くから起きて前日に結つた髪、昨夜はいつた風呂の中で洗つたきりの顔を更に洗はうともしないで、そのまゝ私は壽江子と學校へ行つた。隣りのあるじがそれでも道路を心配して、ぬかるみの處へむしろをしいておいてくれた事は有難い志だつた。それでも着物も何も泥だらけのありさま。とう／＼足袋もぬぎ、草の葉の生ひしげる中を此間なをつたばかりの拇指の先をいためまいと心づかひしながら、やつと校門をくゞつた。すぐ校長さん

が出て来て先導され、われ／＼はその講堂かとも思はれる處へ着席した。佐藤氏や住職その他二三の人の顔が見へた。來賓の一番上席についたわれ／＼の卓上には花などが生けられてあつた。船形の瀬戸ものゝ鉢に桔梗やわれもかう野の花の可憐なのが一寸花の心得ある人の生けられたらしい形に活かつてゐる。

兒童は皆板の間に座つてゐる。中にははだしのまゝ細い紐をしたものもあるし、さうかと思ふと又東京通りの洋服を着た男女子もかなりあつた。やがてオルガンが若い女教師の手で弾ぜられ、代る／＼歌ひ出した兒童の唱歌はかなりに聞かれた。就中一人の娘は一番の唄手らしく、一人で壇上に立つたが中々聲もよしおちついてゐた。○○さんも其間々に御得意の歌をうたつた。しかし私はこの○○さんがひどく利口すぎ、常識家すぎるほど常識家である如く、歌ひやうもいやみがあつて、口の中でころがすやうな俗調で私には感服出來なかつた。最後に○○さんが私の前に来て「どうか何か一つ」といふ事だつた。この氣の利いた○○さんは、最初私の顔を見るとすぐこの注文を出したので、この短い時間の間にも一寸腹案が出來たので、私は臆さず腰かけたまゝの面を皆の方へふりむけた。そして簡単に、明晰にこの地に縁故の深いためこの地を愛する事の深い事、そのため毎年夏にはこちらへ來てゐるそれでこの多くの方の中には私はお目にかゝつてゐる方もあるかもしれないが、目が近く特に眼病にもかゝつてゐるので記憶し得ないのは残念だ。私も昨年皆につれられて一寸歐洲の地をふんだ。しかし親を大切にし、その他種々の點で日本道徳の忽せにすべからざる事をも確實にしり得た——私はこの周囲のひろ／＼した、涼しいこの校舎で勉學してゐる皆さんの幸福を思ひ、まして今日この情操教育さへ施されんとする——唱歌會の開會を心から喜びます。そして此會の益々盛大ならん事を希望する旨をのべた。

かうして間もなく此會を終つた。校長の先導で又私たちは關係者全部に見送られて、折から小降りになつた雨の

中を歸宅したのだつた。行あふ小學校の生徒の數名は恭しくわれ／＼にあいさつした。
別府、北野氏へ弔電。

八月二日 驟雨

早朝より大工來る。上段の戸車とりかへ

八月四日 快晴

今日は早朝から起きたが案外元氣だ。

東京の宅から手紙で郡山武徳殿の工事寄附の爲三人ばかりの當務者が上京するといふ事なので、その金額につき相談があつた。早速留藏をよんでそのふりあひを聞かせる事にした。

兼て松平伯から御依頼の向島父上の追憶を書かうと思ひながら、中々そのひまが得られなかつた。今日一寸ひまがあるのでそれを遂行しやうとする。かなりいろ／＼の事がかけたのでうれしかつた。

夜に入り例の通り留藏の一族が來た。腹をいためぬ息子夫婦、孫さへ貰ひ娘の腹に出來たもの、——しかしかうして今見た所では誠に幸福らしい姑に見へる。おけさの目も鼻もない孫に對する愛情——田舎ものにしては色白くかしこさうな初孫——私も思はずその無邪氣なかわゆさに目を放し得なかつた。しかも私は思はずかういつた。「あんまり利口に育つなよ、こんな處にお百姓をしてはゐられなくなるから——」

八月五日 晴 あつし

留藏に頼んで武徳殿寄附の人名金額を調べてもらつた。その事につき東京へしらせた。つまり建築する時何等交渉もなかつたのだから、さう多額には及ぶまい。一〇〇位でいゝだらう。

割田氏より暑中見まひが來た。

弘道誌上に三井、三菱——岩崎小彌太さんから各三千圓づゝの寄附が記載されてゐた。

よし！これからだ——五十五年をへて初めて父上のいはれた思想混亂の時代が來たのだ。これを救はんがため死力をつくされた父上の——日本弘道會は社會の不況時代、緊縮時代にかへつてその勢力をまさんとしてゐる——喜ばしい事だ。私も是非精力を貯へ、三井、三菱に關係ある總てを網羅して一大教化團體を作り得る機運に遭遇せんとしてゐる——特に今日の弘道誌上に泊翁訓言といへるのを見ると誠に渥故知新の實を明らかにし、古きに泥まらず、新しきを逐はず正しさに立脚して新らしく進まんとする訓言——今にして少しも古きを感じない。弘道會は決して古い萬能ではないのだ——難有い——私も歸京まで十分精力を貯へて邁進したい——

八月八日 立秋 冷風よく

秋きぬと目にはさやかに見へねども——と古人のいつた通り、全くこの東北の風は急に冷氣を覺へて肌寒いやうだ。

宮川植木屋が早朝から來て庭の手入れにかゝる。中々ものである彼は三人もつれて來た。手下をよく使ひこなし

て、無駄口も利かさずズン／＼仕事を運ぶ。鯉を二尾持つて来た。

八月十日 晴

朝の中留蔵、久一、正かづ、三人で栗の木の残木——細いところを運んで来た。又臺所は御飯さわぎ、まるで田舎はたべるせわが女の役目のやう——又たべる事のみが楽しみをやうだ。容易く楽しめるものは幸福だ？
咲枝から壽江子へはがきが来た。

八月十四日 晴 むしあつし

どうも市長さんが會つてくれる日をはつきり覺へないやうな気が、例の如くする——聞ちがつては大變と思ふので、朝市次郎をよぶ。間もなく歸つた市次郎は「今日の午前九時から十時の間に」といふ御約束だつたといふのでそこは早く起きてゐた有がたさ、すぐそのまゝ髪も結はず、顔も朝洗つたまゝの、衣類をきかへたゞけ、自動車を待つ間もどかしい氣がする。

やがて来た自動車——それは東京のハイヤーでも一寸綺麗な部に屬する程度の箱型で、クツションなど田舎に不似合なフク／＼したものであつた。運転手はまた若い——青年といふ位、チャンとした洋服を着てゐる。あまり急がないやうにと命じて車にのる。市長さんの出られる役所へ——市廳舎といふのだらうね——かういひつゝ車にのつた。市次郎が後からお供をするといふ意味で、自轉車で来る事にした。何だかバラツク式の家で止つた。公會堂を持つてゐる此の市には、あまりに貧弱な市廳舎だつた。私が下りるとすぐ、女給とでもいふやうな袴をはき

相當の容姿をした婦人が出て来た。來意をつけるとそのまゝは入つてゆき、しばらくして、こちらへ——といふ。何だか博覽會の事務所とでもいふ様に、ひどく粗雑な建物を行く、所々にかなり多勢の人がたまつて事務をとつてゐるらしい。私は横顔をむけたまゝその幾室かをぬけると、一寸一廊になつた二三室があり、その最奥が市長室——會議室——總てをこの一室にあつめた——のがあつた。一寸見るところかれこれあれでも疊數なら二十疊位は敷けるだらう。長方形に見ゆる卓子を中央に、市長さんのらしい大きな膝掛椅子がおかれ、煽風機もすぐ後ろに据へられてあつた。

こゝまで案内した女給は、更にこの煽風機を私の方にむけ、丁寧に請じ入れた。まだ市長さんは來られないので折々人がのぞいては通りすぎる。

役所の空氣になれない私は、特に市長が時日をとつておいてくれた事にある好意と、ゆつくりした氣分を感じてこの中央の卓子がすぐさま市議員たちの會合の——重要な——場所になるとは思はなかつた。すると間もなく二人の人がはいつて来た。一人は洋服——白ツボン、黒い上衣の——一人は白い洋服の恰好のいゝ人——これが市長だといふ事は一目してわかる——あから顔の白髪の多い人、ズングリしてかなり頑固さうに見ゆる——約束時間よりウンと待たせた婦人にも日本風にごく威張つてゐる。それでも中々如才なくお愛想がいゝ。いろ／＼と先代の事業について賞揚し、又その事蹟について研究中だといふはなしがあつた。

「あなたの御家には何か書いたものでもありませんか」

「はあ、何か先代が自らかきましたものが残つてゐるやうに存じます、それから宅に北海道に赴任された事や、中條博士——としきりにいはれるのが誠に氣になる——博士はたしか沖繩に縣廳舎を造られた——その事も私はしつ

てゐる。——北海道にも私は行つてゐた。中條博士はいつ頃行かれたか、あゝ成程、三十年も前の事か、それではいくら私の方があとかな——かゝつた風になか／＼話は愉快につゞいた。

ところへ又意外な事が勃發した。
ズツと一人の壯漢がはいつて來た。浴衣のあらひ廣袖に三尺帯をしめたまゝ、素足に草履をひっかけたまゝ——市長の前にグツと腰を下して何かはなしてゐる様だつた。私は、おかしな風をした男だ。しかし周囲の人にもあまり怪しむ風もなく、市長も相當にはなしてゐる。これが所謂政治ゴロとでもいふのだらう——位に思つてゐると、段々その男は聲高にはなし出し、丁度そこへ來た下役人らしい若い男に向つて悪口罵詈雑言した。事態騒かならずと見て私は席を立ち暇乞ひをした。すると此時もう集まつた五六人の市議の中に、特に私に向つていろ／＼同情もし又先代の骨折りを誇つて盛んに味方顔をしてゐた一人、甲斐山とかいふ人と共々、もうちき市長があらはれるから——と止めるので私は又思ひ直して席に復した——

さて、かの壯士問題だ——その男はとう／＼市長に喰つてかゝつた。

「何だ、何だのかだのといつたつて、先の市長がぬすつとうをしてやめたばかりの人間を、又すぐ使つてどうするんだ。——とかいふ變やなど朝から晩まで電氣をつけて、その隣りには食ふや食はずの夫婦がある——その電燈と同じ料金だなんて、何處にそんな事があるもんだ、何でも客のふりをして行つて、いゝかげん電燈のメートルを胡魔化すんだ——人身攻撃的の怒號はつゞいた。

かうしてほとんど一時間半も待ちくたびれた私は、又もや歸り仕度をした。氣の毒に思つた市議の一人は、たまりかねてその闖入者にいづた。

「ネー君、お客が市長にあふといつてさつきから待つてゐるんだから」

「何だところだつていふ事があるからかうしてゐるんだ。すみさへすればサツサと歸るんだ——何だ——」

くつてかゝる權幕を見かねて私は更にいつた。
「私は兼てから市長さんの御つがふを伺つて既に面會の御承諾を得ておつたのでございますが、おさまたげになりますから歸ります」

又もや私はかういはざるを得なかつた。

その中又二三の市議がはいつて來、それがこの男と少し知己のものと見へ、大分調子をやらはらげて二三問答をしてゐた。そして結局何か願ひ下げるといふ事で、市長は部下に命じてその順序をふました。それから一寸その壯漢が出て行つたあと、市長は私を傍の椅子に導き用向を聞いた。やつと間を得た私は、日本弘道會の事につき話した。こゝで私の馴れない手落ちがあつた。昨日市長宅で夫人にあひ、印刷物については是非見ていたゞきたいといひおいた事はもう、弘道會の事については熟知せらるゝもののみ思ひこんでゐた。處が先方は此頃盛んに評判されてゐる建碑の問題とのみ思つてゐたらしかつた。こゝに思ひちがひがあつて、市長の心中には「ナンダソナ事をこんな處でいふ必要はないだらう。おれにはもつと忙しい事があるのだ」——恐らくかう思つたであらう。彼はほとんど形式的に私の話を聞き、「以前支會があつたならきつと調べたならわかりませうから、その上で——」とうまく逃げをうつた。しまつた、と思つたがしかたがない、又その中個人としてゞも入會を頼まうと思つて辭去した。

八月廿日 小雨

今日は兼てみどり座で松本幸四郎が芝居をやるといふので、どんなかと思つて切符をとつておいた。東京とちがひたとへ切符はあつても座席を取つておく事は出来ないとの事で、今日更に市次郎をやつてフトン二枚をかりさせ席をとつておくとの事だつた。

午後一時に自動車が来たのですぐのつて、「ここです」といつて運轉手の下した處は何だか芝居小屋とは受とれない處だつた。しかし前から申込んでおいたからと思つて、出てその木戸口に立つて聞いたが誰も取次いだ人はいないといふ——きつとさうだらうと思つた通り、果して皆知らん顔——生憎な事にもう芝居は初まつてゐたので、グズグズいふのも大人氣ないと思つて、不取敢土間の花道に成る所へ腰をかけて見てゐた。

舞臺は丁度渡海屋内の場で、女房がいろ／＼な事をしやべつて夫を義？の船へ乗せやうと苦心してゐるところだつた。何しろ手ぜまな舞臺なので奥行のない感じはするが、流石本場をふんだ連中だけにかなりおちつきがあり貫目があつた。廻り舞臺のない此小屋にはいろ／＼不便な事も多からうが、特にこの川を渡る處などは殊に不便なところであつた。観客の見てゐる所で居所かわりの舞臺、最後の馬につてハヨーとかけ聲をあげながら日の丸の軍配をサツと頭上にかざして馬上のま／＼かけ込むその颯爽たる勇姿が花道でつかへてしまつて、無據窮策として黒いさを高く竹竿の上につけて、見物から見へないやうに馬から下りての樂屋入りは全く氣の毒な様だつた。まあしかしこれも一晩なればこそ——と思つた。

八月廿六日 驟雨 朝75 午後84

今朝は手紙が来ない。

昨夜八時一寸すぎ宅へ電報で「三五〇〇アリエノタクチカヒタシ」といふ電報を出した十時過その返事が今朝ついで「タカイモノニツクコトワレ」といつて来たが、私はちつとも高いとは思はれない。それで丁度今朝のこの新聞に、いよ／＼二番池をつぶして大運動場が建つといふ事を市會でも異議なく決議したといふので、その場所を切りぬいて送つた。

ひる一寸すぎ勝忠さんが見へて三人して自轉車で何處かへいつた。壽江子の腕も一寸の間に眞赤にやけた。今日は度々ふっかけがある。

皆でよせがきして東京へ送る——ハガキ。

國男へよこした喉枝の手紙に、おとうさまが頭痛がして云々とあるので、手紙でその事を注意した。

八月廿九日 曇

——感ずる事ありて。——

こわれもの手にもちたる心地して我足はなへ手はしびれんとす。

手も足もつかるゝやがて我胸はしめらるゝ如く冷あせしとゝなり。

身も心もさいなまるゝ日なりこの他に忍苦のいとなみ更に求めんか(むべき)

八月卅日 曇 涼

今日は吉原飛行士が我國空前の壯舉、日獨親善飛行を敢行し、とう／＼無事その使命を果して歸京するといふ日

であつた。何でも午前十一時頃だといふので、ラヂオをかけて聞いてゐるが、折々アナウンサーが代々木に集まつてゐる見物の様子や——唯今非常な風でマイクロフォンがたをれやうとして居ります——いかにひどい風で難航をつゞけてゐられるでせう、然し程なく何等かの報知がありませう——といふ。

やがてアナウンサーは一段聲を高めて——あゝ今せん風が起りました。みんなさわいで居ります——こんな風でいつ来られるか氣づかはれる。

それからかなり時が立つた。——唯今報知新聞社上に姿を現しましたから、程なく着きませう——と云ふ。

群集のこうふんした様子や、さわがしい周囲を想像して私の心も踊る。何しろこれだけはなれた所で聞くのだから、じれつたい事おびたゞしい。まあそれでもあきらめやうだ。これが四五年前ならいくらあせつてもあせつても聞かれやうか。私はかう観念する外なかつた。

——アツとう／＼参りました——といふアナウンサーの聲がした。それと同時にケン／＼／＼とした騒音があつた。やがてアナウンサーのプログラムを放送する聲がかすかに聞へる。百合子が改造社に原稿を人に託してよこしたさうだ。

九月一日 小雨 70

今日は英男の命日にあたる。先月はお祥月命日であつたが生憎此方へついてから暴風雨で、何も買ひとゝのへる事が出来なかつたので、少しは田舎相應なお供へものもしたいと思つて、いろ／＼牡丹餅やおすしなどの用意をする。

有江未亡人が来た。昨日黒い花手桶にさつぱりしたコスモスや何かを生けてくれた。流石に少し心得あるものゝ手ぎわはちがふ。折から何よりの手向けとすぐ靈前に供へた。

九月二日 晴

東京からいよ／＼今日那須へ行き、それから一泊の上開成山行といふ手紙が来た。

よし子さんからはがきが来たが、大分悲觀してあつた。何とかいつて慰めたい、かうは思ふが、しかし私の健康は——氣持ちは——中々そこまで回復出来ない。

咲枝からいろ／＼いつてよこした。三浦君は中々しつかりした事をいつてよこした。頼もしい氣がする。まあこれで留守中幾分安心だ。

〇〇さんが見へた此人も中々無邪氣があり、流石名門の出だけに禮儀正しい點もあるが、又すれたところもある。小學校から小使がピアノ採納願を聞き届けた旨の書類を持つて来た。この文面を見ると何だか無闇に時代錯誤のやうな氣がして、寄附するのがいやになりさうだ。何とか少し改善しなくてはなるまいと思はれる。

御飯前にきつとあるじは到着するだらうと、壽江子と共に夕飯の箸をとらずに待つてゐた。いよ／＼もう七時過ぎ——お膳に向ふと自動車の音がする。それらしいと思ふ中、關さんがお見へになりましたといふ。もうすぐ坂道のガタ／＼する音がして、白服の胸をあけて例の通り頭をふき／＼、久しぶりであるじは門に立つた。トランクとバスケットがお供してゐた。おみやげの甲州葡萄を籠ごと神前に供へるやら、にわかには家内はどよめいた。一風呂あびてすぐ御飯になる。酷暑の東京に働いてゐる——その健康を氣遣つたが、中々活氣のある様子に安心する。

しかし御飯がすむとすぐめづらしく那須を見分の爲歩いたので腰が痛むといひ出して、皆が代る／＼叩くやらもむやらするが中々きかない。としが上手だからといふので試みさせる。思ひの外の隠し藝で中々玄人はだしな手つきで巧者にもみほぐす。一時間もむ中すつかり機嫌もよくなり、いたみもとれたといふので皆もホツとした。何しろ按摩を市次郎によばせたが、生憎遠方へ行つて留守の間の事で困つてしまつたのだつた。

九月八日 晴 冷

今日は大分用のあつた日だ。まづ第一に朝早く壽江子が歸京する事であつた。前夜ふと氣がついて、ピアノ搬出の時、この風景と生徒一同を寫眞にとつて記念にしようとして、その交渉をしておいたのでその寫眞やが三人ばかり来てゐた。やがて佐藤氏も見へ、つゞいて職員及生徒がむれて来た。兼て用意しておいたおせんべいや麥湯を出す。あゝだの、かうだの寫眞のポーズが大分手間がかかる。あゝだのかうだの寫眞屋さんも慣れないらしい。やつと位置がきまり、上段の間の中も見へ、又かなりいゝ風景もとり入れるやうに成つた。

こんなにしてやつとポーズが出来る——パチンといふ一聲でもうすんだ。誠にあつけない。やがて「ヤ／＼と歸る一團を見おくつて門外に出て見ると、綱をつけて彼等及彼女たちはたるんだ姿勢でピアノを曳いて行く。どうして君が代も奏さず、一言感謝の辭もなくて曳いて行つたのだらう！ 私はかう思はずにゐられない。たゞ騒然、たゞ黙々——かうしてわれらに長い親しみと追憶の痕の多くをもつたこの老ひたるピアノは、遂にわれらの門を出で、この由緒深い桑野の小學校に向つた。無情のこの樂器をおくるのでさへ無限の感慨が私の胸に湧く。としまでが涙ぐんだ目で「何だか淋しいございますね」といふ。あゝほんとうにこんな無情な一器具さへ我家の門を出る時か

く惜別の情が胸中に湧くの——

しかし校長のはなしでは此ピアノは記念物として長く校舎に置かるゝといふ——これだけはせめてもの事とおもはれた。

今日は庭の一隅にある不動尊の祭典を執行すべく、午後二時に宮本氏が来る筈になつてゐた。しかしとう／＼三時すぎに来た。それでも流石に職掌がら土間にむしろを敷き端座した様子は、平常の彼とは思はれない。

折しも時は秋、空高く、氣清く、一眸十里にわたる眺望の中に、小さく古い右の祠の前に簾を敷き、烏帽子に淡青色の直垂姿の祭官が赤地錦の包める笏を持つて朗らかによみあける祭詞——自ら襟を正さずにおられない——ふしぎなものだとしみ／＼おもふ。

九月十五日 朝大雨 後晴

夜來の大雨で起きると馬鹿に寒い。ドテラ姿でも人にあつて平氣でゐられるのが田舎の特色で呑氣だ。

壽江子から手紙が来た。流石にいろ／＼と私の事を案じて藥の調合まで畫をかいておしへて来た。あつてはなすより情のあつたのは西村家でもさうだが、この家でもその通りだ。しかしはなれて心を運ぶのはこの便りのみだ。實情が見へるのはうれしい。

水野夫人へ當市長夫妻が舊交を温めたい意志ある事、且郡山愛國婦人會は少數故、是非夫人御出での機會に宣傳したいといふ希望ある旨を報じ、且弘道會についての御口ぞへあらん事をたのむ。

九月十八日 曇

兼てから中二階の物置がメチャ／＼になつてゐるので整理したいと思つてゐたが、中々出来なかつた。あるしが来たのを幸ひ、肝要書類の整理をしなくてはと思ひついで、幸ひ正一、市次郎が来たので手傳はせる。山積した書類を表へ出し塵を拂ふ。開墾當時の書類全部といつてもいゝほどに出て来た。昔しでいふ御用金——とでもいふ様に町の者共から集めた——開墾の爲——事がよく窺はれる。

スエ子、咲枝から手紙が来た。すぐ返事をかき、月曜日歸宅の旨を報じた。次手に咲枝にも返事を同封した。

辻村、西野さわ子夫人、下島俊一、白井、氏家へじやがいの發達の通知と、時候見まひのハガキを出した。北野力雄氏へあて香奠がへしの禮狀をかく。西野さわ子夫人には時候みまひのはがきをかけた。

夜國分貞次、留藏、おけさが来た。國分貞次はとう／＼墓地に税を課する事は止めになつたといつた。ずみ分おかしな話だ。かりそめにも市として一たん税金徴収の命令を發し、又何の告知なく是をやめにする——私にはどうしてもわけがわからない——

今日は又妙に目まひがする。糖分が出るのではないかと思ふ。——やはり砂糖は悪いかしら。此頃葡萄があるのので大分私はそれをとつたから——

九月廿一日 晴 冷

早朝有江未亡人が来て、けふは木の子飯を焚いてあげるといふ事で鯉をもつて來訪。いつ見てもシヤキ／＼のお婆さんだ。家の方のゴタ／＼も不相變つゝいてゐるが、しかし分割をのぞむ人と、全部といふ買手がついたとの事

夕方きのこ飯がお約束通り届いた。おばあさん御秘蔵の雪もやんが持つて來た。丁度あり合せの文房具の一包をもたせた。お婆さんのお手ざわだらう、中々上出来で一寸この田舎には味へない。しやれた出来ばへだつた。

O氏夫人が見へた。例のキヤア／＼とさわがしいには閉口した。お菓子二いろ、羊かんとドロップ一かん貰ふ。明日いよく出立としてそれ／＼用意にかゝる。時間は大てい十二時のにきまる。

九月廿二日 曇 小雨

今日はいま／＼出立の日になつた。正午立つといふのでかなりいそがなければならぬ。かう思つたのでやはり早く目が覚める。まだ四時だつた。窓を明けて外を見ると、昨日も見た通り朝早い庭には水露がたいて、小雨上りの様にしめつてゐた。不思議の硝子をしめる位寒い。髪をゆひ、顔を洗ふのがもう冷たい位だ。山村の秋はもうこんなにも早く霜を見、従つて落葉もはげしい。此二三日もう持つて來た着物の中であた／＼かさうなものは皆重ねて着込んでしまつた。あるじなどは寒い／＼でだん／＼着込んで、昨日からゆかたを上へ着てさへゐる。

いつか昔しの事、西村の家へ少し愚鈍な、しかし歌が好きだといふ變な男が来て、信濃路を父上のお供で旅をした。「夏冬が一度に來たか信濃者上にかたびら、下に袷かな」といふ歌をよんで大自慢に父上に見せた。

あまりのおかしさと、又その素朴を愛された父上は、歸宅早々この事を母上に話されて「おもしろいところがある、いたはつてやれ」と、いはれたといつて、母上も又その當時の思ひ出に、此男の正直に、しかもおろかな例をいろ／＼はなされた。瓶のぞきの裏地の事、とう／＼しまひに自分がものをこわして怒つて出て行つた事、或は、「おらが旦那は立派だなあ」といつていつも感嘆してゐた事等——

扱、われ／＼の出立の處にかへる。

かうして用意する中もうどん／＼おけさや留蔵、婿夫婦、孫、久一、錠前屋までがおしかけて来た。朝飯前だからかういつてかまはず朝飯をたべる。

何だか空がだん／＼くもつて来た人と人々がいふ。しかし私は眩しいのがいやなので、かへつてい／＼だらうとよろこばしいやうにも思ふ。

呑むやらたべるやら、全くこの連中のあつまりは主意が何處にあるかと思ふ位だ。飲食にのみ費される——食はんが爲に生きてゐる——この文字通りにさへ思はれる。

留蔵おけさに十一圓、市次郎には二月ばかり走り使ひや何かの駄賃に二十圓やつた。其他久一にも一圓、忠一、女房とそれ／＼少しづつでもおちなくやる。

九月廿四日 曇 又晴

大瀧基さんが久しぶりに来た。何しろ夏休み中百二十度もある高熱の處で勉強してゐたので、どんな健康かと心配したので——會つて見ると幾分疲勞のとれない——目のくぼんだやうな面影が、此青年にもいろ／＼煩はしさの多くに心を痛めてゐる事をさへ察せられて、私の心は暗くなる程であつた。それからい／＼對世間的の交渉をもつようになる——就職の事について、もうこの若い心の中にある痛みを考へてゐる——いたましい氣がする。いろ／＼慰めて漸く少康を得やうとする處へ、思ひがけず廣子さんがヒョッコリ入つて来た。「まあ——」といつて、はからすこゝに二人まで會合し得たよろこびをよろこびながら私は立つてむかへた。今日見る廣子さんはひどく色も

わるく、又やせて見へた。二言三言話してゐる中彼女の目の中にはうるほひが見へ、つゞいていろ／＼姑のむづかしい事や、極度のヒステリックの苦しさを話し出した。私は同情にたへず泣き／＼した。スルトいつもの腹痛に伴つて腦貧血を起した。

九月廿七日 晴

今日は土曜日で、あるじは是非國府津へ久しぶりに行くといふので、そのつもりで別府としづを先へやる。

今日は弘道會女子部に例の辻村さん講演のある日なのだ。久しぶりに出席して、此間から郡山方面で盛んに活動した報告もしたし、かた／＼出席しやうと少しむりではあつたが、皆さんにもあひたしと、午前中別府に命じておいていつもの最中と、外に金五圓を久しぶりなのでたとへおそばの一ぱいでも思つてもたせてやる。そしてすぐ講義のある中と思つたが、あの狭い卓子、椅子に長く正座する事が、又腦貧血を誘致する事になつては——と思つたので、すんだ頃にゆく。

九月二十八日 晴 後雨

今日は昨夜からしづを泊らせてあるのでどうしても早く行かうと國男を伴ひ、めづらしく午前十一時過の汽車にと仕度をいそいだ。壽江子は學校の方がいそがしいし、それに折角一番になつたのに下るのはいやだといふ——これも彼女を發奮せしめるには必要だと思ふので、おくるのもやめさせて出かける。驛まであると同車する。かうして久しぶりに一しよに行くととなると、〇〇の舉動が著しく熱を失ひ、且無精そのもの、やうなだるさを感じず

にみられない。困つた事だ——私はやはり安眠をさまたげられさうだ。急いで臭那刺を呑んだ。

己れのしらざる天質及肉體の缺陷——一時は憎悪をさへ感ずる私の激情も、大なる親の愛を思ふ時、叱責する氣にもならずしかもその將來を思ふ時——煩悶しないであられやうか。信仰——これのみが彼も我も救はるべき道だしかもこれにさへ熱意なき彼をいかに指導すべきか。

母たるべき天質なき己れなのか？ 嘆又嘆——。

十月一日 晴後驟雨

水野さんから三橋氏の處に催さるべき千歳會には非出席するやうにとの勧誘がある。もう断らうと決心した私もあまりすゝめられるので、かの遊志動くともいふ様にとり行く事に決め。

今日は英男さんの御命日だ。花を代へ、香を薫じ墓参の用意をする。

今日は長い間修繕した車が出来上つて、いかにも活々と江井がふるまつてゐた。私たちが又久しぶりになれきつた江井の操縦に心を足らしつゝ好晴の街路を青山へ向つた。

例の墓地の花や(植竹)によつてお花を買ふため車をとめる。フト見るとガソリンの處から黒い煙が上がつてゐる。ハツと思ふと「奥様、車をお下り下さい」江井の聲だ。

私は騒がないやうに無言のまゝ靜かに車外に出た。咲枝、壽江子も共に 瞬間バツと燃え上る炎が見へた。江井は自分の帽子を持ち、遂には上衣をぬいで火を叩いた。中々消へない 前の交番の巡査で丁度二人ゐた。一人がすぐ前の石屋にかけこんで、モートルルにつかふ小砂利をバケツに一杯はこんでもえさかる火炎の中に投げこん

だ。すぐ火は消へた。

「どうも相すみません——」かういひつゝ江井は蒼ざめた顔色に唇をわなゝかせつゝいつた。指は火傷をしたらしい。私はしみゝゝ職を勧むるものゝ心勞を思ひ、平日は高給をとつて折々自分の不攝生などから休みがちな折々の彼に對する不満をさへ忘れてしまつた。

車はすぐ電話で店のものをよびよせ、その不注意を責めてすぐ修繕に廻つた。

十月五日 晴 冷

丁度大瀧丈夫さんが昨夜から泊つてゐるのでいろ／＼の話しが出る。此人もいよ／＼判任官になつて生活の危きを脱し、又民間の事業よりひまの多い生活である事を聞いて、私はしみゝゝ國男にもかういふ事が適當ではないかと考へざるを得なくなつた。それであるじにこの事をはなし、よく研究してはしいと願つた。しかし例の通り中々運びがつくまいと悲觀せざるを得ない——

竹内が来る。何でも國男が横濱に用事が出来、そのためよんだのださうだ。久しぶりに手製のズイキをもらひ、ひどくうまく思つた。私は向島にやはり澤山つくられた當時の事がまぎ／＼と私の心に蘇へる——

今日は兼てあるじの骨を折つてゐた新宿の三越支店が落成したとの事で鳥の子しやばんをもらつた。おめでたなので皆にわけた。

郡山の伊勢屋の銀行が取付けにあつた事が報導された。たゞさへ不況な郡山市も大分預金してゐるさうな。困つたものだと思ふ。

××のお父さんからはがきで、ひろ子を見舞を謝絶するといふ文面だ。何處の國にこんな通知を出すものがあらう。呆れ果てた非人道者だ。私の娘ならすぐとり戻してしまふ。いよく私は黙過出来ない。鷹ちゃんの靈に對して——私は彼女を救はなければならない——

おみやさんがお父さんの七年忌だといつて來た。此人の將來についても憫然だと思ふ。ほんとうに誰も彼も避けるといふ態度のみで、眞に彼女の將來に善處すべき道を考へてやらない。

十月十日 曇後晴 65

今日は私の誕生日だ。幸ひどうやら輕快になつたので、起きて見たいと奮發する。

昨夜ぬ入り花にラヂオを聞いて目が覺め、かなり興味を感じた。め却つてねつかれなくなつた。さあかうなると動悸は打つ、錯覺のやうなものは起る、しかたがない。おまけに枕元では鼠がさわぐ。蚊は耳元でうなる。傍にねてゐるおみやさん、年に似合はず何もかも白河夜船で高野。これだからよくしたものだ。

どうしても動悸がおさまらない。お氣の毒だが、といつておみやさんに胸を冷す手拭を頼む。やつと起きたがぼんやりしてゐて一向目が覺めてゐない様子だ。やつとどうやらぬれ手拭をもつては來たが、どうなつたのとき、もしない。氣の毒な、すつかりほけたらしい。

皮革の通知が來たがやはり不景氣の影響を受けてめづらしく八分の配當だ。

十月十四日 晴

お米がなくなつたとの事で、市次郎へあて二依送付の電報を出す。

櫻楓會から兼て頼んでおいた、私のために本もよめ、少しは料理も出来るのをとの注文に應じて二人の婦人が來た。初めあつたのは四十恰好の奥様風、黒ちりめんの羽織を着流して、

「何か御家庭上の事なら——私もう散々さういふ事では苦しみましたから——」

よく聞くとやはり此頃流行の三角關係、主人が不身持ちで誰でも彼でも相手にする底の男子、それでもやはり離縁もせず、一人の男子をかへて——今はその子供は自分の實家の田舎へやり——苦しんでゐるとの事。

次に來たのを見るとなか／＼活潑で、ハキ／＼してゐてこれならあまりクヨ／＼せずに事を處して行けさうなので此人にきめた。

夜あるじは齒科醫專の招待會に行かれた。新築落成記念のため銀製の花瓶をもらふ。なか／＼いゝ出來だつた。不取敢神前にバラをさして明朝供へる事にする。

十月十六日 晴 冷

午後帝展の招待日なのでせめては一寸でものぞかうかと思ひ立つて、咲枝、壽江子と同乗して出かけた。

やつとのぞいた位であまりの人ごみで氣分が悪くなりさうなのでサツ／＼と通りすぎた。山本さんの裸像の彫型はなる程御自慢だけあつて、その何等小細工をしない自然の力強さ——そのまゝをよく表現し得たものだと思ひし。いろ／＼技巧を弄したどの力作よりも此荒削りの感じのする此裸像は、高さも高いがそれ以上の群を壓する力があつた。私は感心した——

十月廿三日 晴 冷

今日は壽江子が遠足だといふので朝早くから起きて皆して用意を手傳ふ。此頃は壽江子も朝起きるのに誠に世話
がやけなくなつた。なるほど年は争へないものだと思ふ。

行先は長瀬だ。サンドウキツチや何のかのお辨當が一番の高張りものだ。元氣よく出かけた。歸りがあまりおそ
いので石井さんに電話で聞くと、六時頃になるでせうとの事で安心して待つて見た。時計はまだ五時すぎなのだ。
やがて驛から電話で「今歸りました」との事。壽江子も中々氣が利いた事をするやうになつたと思ふ。間もなく歸
つて来てのはなしで、行きには先生が時間をまらへ、のりかへに手間がとれ、あちらへついても誰一人活潑にさ
わぐものもなく、皆いゝ氣持ちで晝寝に時を費したとの事、する分呑氣な學校だと感心する。――

十月卅一日 雨 冷

夜來の風雨尙やまない。殊に冷かさを加へた。ラヂオの報ずる處では方々に暴風雨の被害が多いとの事だつた。
臺灣の土匪いよゝゝ暴威を逞しくする爲、交戦状態のやうな有様のようなだ。困つたものだ、何でも内地人の虐待
に因つたものだとの事、おそろくかういふ事も否定しがたい事實かもしれない。

十一月二日 晴後雨

今日は壽江子がどうもいつもの通り何だかものうく、氣分がさえない。私は彼女を激勵すべく自ら進んでペラン
ダへ出て、折から生憎にも降り出した雨で少し冷つくのをこらへて徒手體操やまり投げなど試みて見る。しまひに

は徒手體操を――小學校時代に學んだ、そのわづかな記憶にのこるものゝみを――やつた。何だかからだ中がほの
あたゝかくなり、氣分がよくなつた。それからいろゝ私の學校時代のはなしに移つて、流石に彼女もほゝ笑まざ
るを得なくなり、従つて少しづつ快活になつたやうだ。どうもこの體操は案外効果がありさうだ。これからは日に
一二回づつとめて是をやらうと思ふ。

十一月三日 快晴

あかゝと日かげ輝よふベランダに栗をむきて食むのどかなる朝

今日この陽、昨日にせまほししみゝと雨をかこちて壽江子はかへりし

何事も思ふ事なく栗を食むこのしばしをば長かれと願ふ

君になほ憂き事すといふかり問ふ顔しみゝと眺めてありし

いふかりてかくいふ人を羨やむとしらざる人にとはに幸あれ

今朝はめづらしい快晴だ。昨日であつたならと、雨の中を一人歸つて行つたスエ子の事が心に浮ぶ。ベランダの
暖かな陽ざしに心をひかれた。もう日向ぼつこがいゝ時になつた。

十一月四日 快晴 風つよし

今夕飯後ユリ子から電報で「アマクサマルにのり直行して東京着」といふ意味を報じた。サア、イヨゝゝ歸るんだ
ぞ、と皆は總立ちでさわいだ。前後したが、私も此午後四時すぎの汽車で歸京し、皆と夕飯を共にしたのだつた。

十一月八日 朝雨 後晴

今日はいよ／＼百合子の着く日だ——かう思ふとやはり何といつても胸がときめく。今度は是非何といつても致賀まで出むかへよう——かう思つてゐた私も又例の××にはまいつてしまふ。しかしこれも不可抗力であり、又一面には體力いまだ衰へないし、と思へばむしろ喜ばなければならぬのかもしれない——かうあきらめて心静かに家に待たうとは思つたが、やはり何のかのと用事は不相變つゞく——花をとりかへる——お菓子をいひつけるそら何のかのとよくかう引つきりなしに仕事はあるものだその中をぬつてお祝ひの電話、問合せの電話——。チリ／＼とベルの音はけた／＼ましい。その中時間が追々近づく。はなれの方へ注意して出むかへの花束の用意などをする——

若奥様がおむかへの御用意中だといふはなしに驚いてとめにやる。どうしても聞かない——もし御不安心なら横田さんに聞いて——といふのですぐ電話をかける。ナニニ大丈夫ですといふ。かれこれする中もうほどなく百合子がつく頃になる。い／＼かげん電話を打きつて玄關までもむかへに出やうとはきものを揃へてゐるところへ表の方から女中が「お歸りで御座います——」といふ。あはて／＼出るとそれはあるじばかりで、今に着くといふ。しかし玄關はまだ午前中の日ざしもあはく寒さが身にしみる。是はいけないと又食堂へ歸らうとするところへあるじの聲で歸つて来た、歸つて来たといふ。——又玄關にかけ出すとはんとうにそこにはまがひない彼女が花束をもつて車をおりる處だつた。丁度来てゐた石井孫一氏に何か相當のあいさつを交してゐる。中々如才なくなつたな——といふ感じがする。

やがてはいつて来たのを見ると一寸巴里であつた時より瘦せたなと思ふ。同時にあの電波のやうなつよい閃きは感じなくなつた。何といつても年をとつておちつきが出たのだらう。それとも又疲れすぎてるのではあるまいか——親心は又しても氣にかゝらざるを得ない——

讀賣の平林氏が眞先に来る。つゞいて——ともう應接室はあくひまがない。折々開閉するその部屋の中は濛々とした煙草の煙で一ぱいだ。これちや毒々しい——かう思つて私の心は又安らかでない。

今夜は湯淺さんが早く歸るから御飯を早目に——かういつて急がせた夕食も大抵は湯淺氏の氣に入るやうに、おまけにそれは彼女の好きなものを自身さしづして命するのだ。従弟だといふ北村といふ若い人——この人も又至極い／＼氣になつて親類氣どりで好きな事をいふ。トロの刺身だとか、湯豆腐だとか、いろ／＼お好みのものが誂へられる。北村さんお好みとあつて日本酒——とかいふのが出る。やつとこれから御飯だといふところへ長谷川時雨さんがお目にかゝりたいといつて來られたと、取次の別府がいふ。困つたなと思つたがすぐ百合子は應接間へといふ——私は兼てから名のみ聞き、又雑誌の口繪などで見た事のある人、どんな人かあひたいと思つてゐたのでその事を通じさせる。すぐ百合子が、さあいらつしやい、といふので出て見る——何だか頭髪だけがモチャ／＼の新式でからだつきから着もの着やう、それは／＼丸で下町の江戸ツ子タイプ——向ひあつてゐる中にもしみ／＼頭が氣になる——スツキリとした髪かたちであつたら——と又しても思はれる。しかし聲音も清澄なところがあり、利澄さも窺はれる——

大瀧さんも見へた。ひさしちやんと夫婦づれだ。

十一月九日 曇 暖

百合子が壽江子と三越へかひものに行つて壽江子だけ夕食前歸つて來た。久しぶりで河合春江さんが赤ちやんと來た。ほんとうに久しぶりだ。おすしをもつて——赤ちやん久しく見ない中につつかりおとなになつて中々巧者に歩いたりおしやべりをする。いかにもかわゆらしい——

十一月十日 曇 暖

今日は自分のからだ工合がかなり直つてゐるので病院にひろ子さんを見舞はふとあるじと一しよに出かけた。何しろ昨夜は百合子とはなしがつゞいてとう／＼午前一時頃床にはいつたので少し疲れたやうな氣持ちがする。しかしもう少しで廣子さんも退院する様子なので一應見舞つてと思つて奮發したのだつた。病室へ行くと誰も見へない聞いて見ると今日は初めての御入浴だとの事。それはまあいゝあんばい、いよ／＼病氣も御全快と見へる——かう心の中に思ひながらも尙全く安心しきれないあるものを感じる。やがて出て來たその人を見ると誠に白々としたかほの色、亂れた髪をかきあげながら、思ひなしかどこやら力のないやうな容子だ。今日は折々咳がかなり出る。枕元にあみかけの男ものメチヨツキ——それは誰の？——聞くまでもない文雄さんのものらしい——痛まじさに私は目をそらした。

歸宅して見ると湯淺さんが電話室にゐてトランクをしきりにあけてものをを出してゐた。何でも百合子がロシアから買つてかへつたカットグラスをぞんざいに荷送りした、め皆こわれてしまつたなど、いつてゐた。小樽に建築中の銀行の上棟式に參列すべくあるじは不相變仕度もいそがしげに午後二時半の汽車で出かけた。

十一月十五日 晴

昨夜は百合子がホテルへ泊るといつたのでそのつもりであると、今朝何心なく起きた自分がいつもの部屋へ髪結ひのため行くと、驚いた事には百合子がいつばいに床をしいてねこんでゐた。夜具や何かと壽江子のもので錯覺を感じるやうに私は「オヤ」といつたなり立ちすくんだ。しかしよく見るとまぎれもない丸い／＼顔が夜具を深々とかぶつた中からあらはれてゐた。

「ナンダ百合ちやんなの——どうしてこゝへ泊つたの？」

「ゆうべ野上さんへ行つてあまりおそくなつたのでとう／＼忍び込んだの——」

大笑ひをしつゝ、彼女は答へたのだつた。それからかなりおそくなつてゐたのであはてて仕度をして彼女は又ホテルへ行つた。

十一月二十二日 晴 暖

今曉の地震は中々つよかつた。丁度二階に床を並べて壽江子もねてゐたのでまだ／＼よかつた。おき上つて一番大丈夫な處だとかねてあるじに聞いてゐた——あの二階の押入の前に、壽江子にしっかりとみつけれながら——

「もうかうなつちや逃げたつてしかたがない、しつかりおし、つぶれるなら皆一しよだ——」
かう激動しつゝ、私は自らも又心をおちつけた。——私の胸は案外平靜に例の動悸さへおこらず——かなり長い微震を終りに靜まつた。

號外を見るとそれは伊豆、葦山——震源地は——の方面だとある——その後の詳報は追々報導される事と思ふ。

十一月二十六日 晴 稍暖

ひろ子のため渋谷の××邸へ行き、母親にあつて此間中から約束の件につき返事をしたいと思ひ、丁度到来の御所柿とありのみを持つて行く。

おかあさん例の如くかげんがわるいが大した事はないとの事で面會する。いろ／＼話の中に「文雄は何しろ今までのほんとうの獨身生活とちがひ、一たん夫婦生活をした以上長くあのまゝおく事は出来ない。それで早く離婚をしてみらひたい」といふ口上だつた。私は燃えるような憤怒を押へて歸つた。

十二月六日 雨後晴 寒

めづらしくあるじは夜來下痢ぎみだつたのがどうしても朝になつてもなほらない。何でもどこか工事の受わたしのため、あまり長くベープメントの上に立つてゐたためらしい。休む事にきめて静養する。コンニャクの濕布を下腹部にあてる。

早起きして仕度にかゝり大瀧に行つた。めづらしい寒さで吐く息も白く寒氣が耳朶を赤くした。

彼女は新しい二階に寝てゐた。幸ひあたりに人氣のない中に——かう思つて私は廣子に總てをいふべく促した。彼女ももう覺悟してその心組みではあつたらしい。しかしあまり事柄がひどくていひにくい——かういつて中々口を切らなかつた。しかし私はもうそんな前提を聞いてこの貴重な時を費す時でない事をいひ聞かせた。しく／＼泣き出した彼女の心中を考へて私は彼女が赤ん坊時代大切に／＼して私にさへ抱かせないほど熱愛した彼女の母を想

起した。思はず私はほろ／＼と涙を流した。——促されたやうに彼女はとう／＼總てを告白した。可驚事實——人道上的問題——私は慄然として此稀有の事實を聞いた。結婚當夜から産兒制限のいひ渡し、二十五歳までは妊娠せぬやうその器具をさへ渡した事、

「もし赤ちやんでもうんだらすぐ子付きで實家へかへす——」この事はN夫人に直接姑からしやべつた事。とうとうかういふ事までいつた。痛ましい彼女を前にして、私は彼女等のためあくまで彼悪婆の前に隠忍した自己を憤ろしく思つた。

十二月十日 晴

俄商相に百合子歸朝につきいろ／＼御手敷をかけたので、その御禮心に羽二重一反を届けた。

今日は常盤會で貧民に施すための衣類を別府に届けさせた。

岡男が咲枝の病院へ宿泊した。私の若い時病氣のため將門山へ轉地して、あるじがたまの土曜日曜を利用して尋ねて来る——それさへ姑舅は不承知で、老祖母をすゝめて電報を夜半すぎかけて、病氣でもないのに急病だといつて呼びかへした——かういふわれ／＼の時代だつた——

左右田さんから淺草海苔一箱五帖入を到來した。

十二月十四日 晴

午後になつて百合子が来た。何でも約束した人が来ないので急に来る事にしたといふ。丁度私が下痢のためねてゐた寢臺のそばへ、以前彼女に見た通りの親しげなそばよりでよりそつた。そしてやさしげに私の手をとつて撫でながら、

「かあいさうにお母さま、こんなになびてしまつて——」

などといふ。——やつと我子が歸つて来た——私の心の中に歸つて来たやうなつかしさと快さを感じる。それちや今日は國男さんも来たし何か取らうといふ事で、私のねてゐるそばへまめ／＼しく百合子は卓子や椅子をよせておそばを待つ事にした。一つ茶碗に汁をついで代る／＼たべるのも面白いなどいひ／＼にぎやかに皆して食べた。

かういふ気持ちは幾年ぶりだらう。つかれた私の頭も軽くなるやうだつた。しかし泊りもせずそれでも、お父さまのおつむを撫でやう、など／＼にぎやかにふるまいながら國男と一よに歸つて行つた。

十二月十八日 晴 寒冷

夜あるじはめづらしく腹痛、下痢した。不相變鬼の霍亂でさわざが大きい。こんなにやくしつぷをやる等いろ／＼手當てをする——

横田利邦氏へ竹内を遣して見舞のため菓子一折と禮金を送つた。

あじの話に、昨日門田敏止氏がわざ／＼事務所へ來訪百合子の加盟せるプロレタリア作家同盟につきいろ／＼心配してゐるとの事で問合せに見へたとの事、友情有りがたい事だと思ふ。

松平伯よりお歳暮としてボンカン一箱到來した。

十二月廿二日 曇後雨

今日は昨日と打つて變つてむやみに寒い。

本田道之夫人が重態で又入院してゐるとの事、電話で聞くと中々かゝるくないやうだ。それで到來のくだもの籠をもつて見舞ひに行く。神田の簡野病院だ。中年の麻疹は中々油断ならないと聞いてゐたが、この夫人のはこの中年の麻疹で隔離室にうつされてゐた。今日は生憎どなたもお留守で、且那樣は何か營養食をいつて買ひに行かれました、此方でお待ちになりましたは——かういつて看護婦は私を案内した。そこは誠にパーレンな部屋で十二學位もあるだらう。中央に火鉢が一つ、ラジエターもあつてわりあい暖かい。

「本當におかわいさうで輸血のため私も二百グラムとつてさし上げました」

目に涙を浮べつ／＼かう語る看護婦は三十近い年配に見へた——他人のため輸血する——これさへ尋常の心がけでは出来ないのに、心から回復をいのるこの婦人の眞情は涙ぐんだ目の色にもあらはれて、そゞろに襟をたゞさすにゐられなかつた。「こんな熱情ある人に看護されてそれでも回復出来ないならよく／＼壽命なのだ」かう思はれる程熱心な看護婦の言葉だつた。

今夜は弘道會の晚餐會が華族會館で催される筈だ。あるじは生憎上杉伯の御相談會があり、それが又年末で特に重要なのでぬけられないため缺席する事になつた。それで私一人になつたので辻村、山岡二女史を誘ふ事にした。

出かけ前本田道之さんから電話できよ子さんがとう／＼永眠の報を得た。あんなに苦悶してゐた事も今考へるとあれは血液を輸入する位であつたものと思はれる。此人の生涯も憔悴なものであつた。御實家の父君は大臣にまで陞進されたが、家には夫人病んでしとねを離れず長男次女は病んで遂にこの報を得るに至つた。病弱の母に宿

つた子等——それにつながる者共の苦痛——私はしみ／＼病弱なものゝ結婚生活——因襲的にいかなるのでも結婚せしめやうとする——事について深く考慮すべきものだとしみ／＼考へずにはゐられない——
けふはそれでも壽江子がおけさと市次郎をつれて三越見物をさせた。何といつても年をとつたと思つた。そしておけさにみやげものを買つてやつた。池田氏へ十圓のチョコをおくらせた。彼らは夜汽車で立つた。

十二月廿四日 晴

壽江子がおねえさまのお留守中菊富士へ行つて、お部屋をクリスマス気分飾つてあげたいといつて出かけた。流石女らしいところがある——かういふ事はつとめて獎勵したいと思つた。

十二月廿六日 快晴

今日は意外の好晴で大分暖氣を感じる。

午後二時から本田さんの告別式があるので客の來ない中にと用意をいそぐ。

白河夫人やその親戚関係の人々が奥にゐた道之さんの長女——白河家で養はれてゐた——が赤い鐘紡絹の新しい着ものを着てゐるのが、いかにもよく母親に似てゐるのもいたましい氣がする。私は丁度持つて來たおもちやのさまく／＼を渡した。喜んで無邪氣にはゝ笑むのもいぢらしい。白河夫人は口を利くと三叉神經痛がおこるといふ事であつて、しらない事とはいひながらいろ／＼話しかけた事がお氣の毒に思はれた。

十二月廿七日 晴

夜俄國一氏令息の結婚披露があつた。あの令息もいよ／＼吳の造兵中尉とかになられたとの事で、軍服姿で例の通り廊下に立並んで客を迎へられてゐた。何しろ伯父さんが商工大臣だといふので中々多勢のお客様だつた。あるじがボーイに聞くと四百名位との事だつた。倭商相夫人がいち早く私たちを見つけて案内をされたのはうれしかつた。いかにも平民的にへだてない態度で——

久しぶりで近藤夫人、古河夫人や御親戚の方たちにお目にかゝつた。御媒酌の——大將夫人がなれ／＼しく案内されたり、話しかけられる。聞いて見るとあの華族女學校時代校門に面して住んでゐられた宮島誠一郎氏のお嬢さんである事がしれた。

「アラマア」といつたきり、丸髻姿の、あまりなるまでに下町風なこの夫人の容姿を今更又眺めるのみであつた。

十二月廿八日 晴 稍暖

あるじがいつの間にか買ったか食堂のストロブの前へおく紫檀の小卓子を買つた。大變立派で勿體ない位だ——
咲枝が退院後初めて母屋を訪づれたが、暫時で又歸つた。

高松政雄氏が久しぶりに見へた。

「百合子さんも時代の先端を行かれるやうです——」かういふ詞があつた——

十二月三十日 曇寒

今朝六時過地震があつた。初め上下動で一寸驚ろかされたが、長い餘震を残して過ぎた。

富樫から北海道のバタをよこした。大分都合がいゝと見へる。これまでこんな事はなかつたから――

この不況な世間にあるじの事務所は永年の信用によりボーナス分配する事の出来たのは感謝すべき事だと思ふしかしそれは大分減額されてはゐるが――

開成山のおけさへ頼んでとらせた藤の瘡が、かねてがん腫に特效があるといふ事を聞いたので電話でよし子さんに聞いて、試みたいといふので速達でおくつた。

昭和六年

正月一日 雪

國府津の元旦は私たちがこちらへ家を作つてから初めて位の寒さだつた。朝は寒暖計ベランダで三十六七度位で國府津へ行けば足袋はいらないといふ確信を裏切られた。

壽江子が今日は友だちの家へ集まるのだといつて、止めるのも聞かず昨夜歸京したが、この寒さではどうかと氣になる。それでしまに東京へ電話をかけさせる。その他いろ／＼忘れものなどを注意する。明後日は是非國男と壽江子と一しよに来るやう、ラヂオの道具をもつて――ともいひおくつた。

東京からの通信であちらは昨夜から雪が降りつゞけて中々積つたとの事だつた。

正月二日 雪晴 曇

今朝はさすがに陽のかけが輝かしくベランダに満ちてゐた。しかし喜んだのは一寸の間で又曇つてしまつた。

深山庸さんから蛤一籠に小刀一個そへておくつて来た。蛤をむくためのだ。いかにも暮末の御家人であつた人のあつらしい氣の利いた感じがした。

あるじが露國大使からの招待の斷りの書留をこゝから出した。そのためと、一つには百合子のところへ電話をかけ、もしゐるなら會つて来たい希望らしく國府津の町へ出かけた。

久しぶりで入浴した。ゆつくりあたゝまつて夜まで湯がめもしない。しかしふしぎな事には佐藤さんのはなしで百合子がいよくプロレタリア文藝家として旗幟鮮明になつた事は左傾した事の表徴であるかのやうに話されるので、私の心は又深い／＼憂慮否々々々そんな常套的な詞で説明出来ないやうな煩悶がとう／＼又腦貧血にまで陥らせてしまつた。齒の根があはないやうな寒さとふるへ、つゞいて胸先がこわばつて来る。あゝ。

正月四日

久しぶりに富士屋へ行つて書餐を取らうといふ事になつた。

好晴の空は實に五六日前の寒さが嘘かと思ふばかり、壽江子が早く来るといゝが――と思ひながら自働車を命ずる――富士屋の車は生憎今日のは小さく古く、バネがわるかつた。運轉手が上手だから――と國男がいふのでやゝ安心したが、いやに今日はあぶなつかしい。あの急カーブにかゝる前の道路は大分この間の地震にくづれてゐる。途中富士屋の自働車のチェーンの店がある。そこへ運轉手は立ちよつて「チェーンがなくても大丈夫か」と聞いて

ある。なしでも大丈夫といったらしく、サツサと出て来て運轉手臺にかへつて来た。所はもう急坂にかゝるところだ。あゝクサリをつければ大丈夫なのに——かう思つて口走ると、皆が大丈夫々々といふ。何のために安全第一の策をとらないかと思ふ。登るにつれ雪は多く、道は凍つてゐた。めづらしく私は氣をもんですつかりのぼせて眞赤になつてしまつた。やつと店先について、かの勾欄が見へた時ホツとした。

正月六日 雨 冷

夜來の冷氣いよ／＼加はつて今日は朝から雨だ。昨夜六時頃から眠くなつてすぐ寝についた。めか、四時過ぎる頃から目が覺めた。不相變里の子が叩き立てる太鼓の音が耳につく。

今朝はあるじが事務所の事務はじめに出るといふので、しまもそろ／＼おき出した。五時頃だらう。眞暗な中を電氣をつけて食堂を掃除する音がする。少しまだねむいやうだつたが起きてしまふ。

晝飯が極簡單にすむと間もなく關さんがおとづれた。大分しつかりして元氣さうに見へた。プロ文學同盟についていろ／＼はなした。私は彼が研究する事乏しくして徒らにマルキシズムを高唱する事を苦々しく思つた。かのトルストイの一日一想の第一正月元旦の感想に、死刑囚といへ共尙人が人を殺し得るか——もしこの囚人に命を與へて改善の途をとらしめたならば、いかなる善人となり得るかもしれない。刑法によつて人を死に致す事——果してそれは妥當な事か否か——かう喝破した彼によつて大なる愛をしり得たれば、墳墓の前に自己を捨て、一の生靈をさへ救ひ得なば、それは最も尊い行爲でなければならぬ——徒らに己れの主義のため萬民を死地に陥れて恬たる彼等の心情を怪しみ、且卑しめぬではゐられないのだ。私は尙敢てかういひたい——パンを得んがため惡を取て

し得るもの、といふならば私は、斷乎として善の前に餓死せよとまでいひたい。生きんがために惡行を肯定し得るものといふならば、それは獸類の世界であつて、人として共に論ずるを恥づるものなのだ。私はあくまでこの信念によつて一指のおかすをも許さない——ゆるすまい、さうだ——私はかう信ずる——しかし尙私は研究すべく歸京の上、各方面の知識階級、有識階級の知名の人たちについて教へを乞ひ。又研究したいと思ふ——

正月十一日 晴 寒

非常の寒氣は全國的にいろ／＼の悲惨事を聞く。漁船のテンブクするもの——東京市中でさへ凍死したものがあるといふ。おそろしい事だ——しかし有難い事に私は此頃著しく健康が増進したのか、此間の生理的貧血はおこしたが、その後すつかり體温がまし、かうして今炬燵部屋でものをかく事も苦痛を感じなくなつた——

午前のラヂオ修養講演として今泉定介氏の東西を通じての宗教に對する講演——それは實に近來にないきゝものであつた。涙傍佗として、私はこの話を聞くほど感激に満ちた時間であつた。信仰のない生活がいかに無意味であり、無價値である事、ひいて國體の尊崇すべきものである事を明快に説明し去るに及んで、私は實に痛快さを感じた。しかし私のもつ、例の健忘さは今それをかゝんとするにあたり、頗る臆縮たる感あるのを残念におもふ。是非この人に面接してより多く聞く處あらんとするのだ——

今日は久しぶりの夕飯を百合子と共にすべく、やつと時間をさめる事が出来た。しかし近來著しく活動的ではあるが冷淡至極な彼女は、ある利那的の愛情はあつても、中々温情を感じ得ない態度——ブルジョア反抗と、親に對してある壓迫を感じ、又親として優越權をもつてゐる——といふ様な心持ちから、非人道的に親に對する憎惡をさ

へ感ずる彼女だ——噫、労働問題、プロ禮讚——還曆をとくにこした父——貧苦をなめつくして漸く最後の醫療に乏しからぬ蓄財をかち得た母——その勞苦のいかに甚だかしりかは彼女が幼より知り過ぎるほどしりつくしてゐる——それをさへ一蹴し去つて何事だ。プロ禮讚——プロ同盟——汝の爲親乏しくプロなりしならば、米國行、研究費、彼女が今度のロシア行——故後藤伯によつて總ての安定を得せしめた事等々、誰かよく成し了し得たか、——プロを高唱しつゝ、しかもブルジョアによつてのみ得たる彼女の今の聲名——これすら私には虚名とも感ずる——噫福なるかな彼女の心情！透徹せる哲人の前にも尙自己の優秀を高唱し得るか——嘆又嘆——

正月十二日 晴 寒

今日はいよ／＼かの弘道會へ寄稿する旅日記の整理にかゝらう——かう思つて朝から來客を斷る様にそれ／＼へ命じた。しかし又もや裏切られて午前から來客だ。

よしの實父だといふ藤澤の法華寺の住職辨榮といふ人が尋ねて來た。辨榮、かういふ名を聞くといかにも俗僧らしい感じがする——あの芝居に出さうな名前だ——あつて見るといよ／＼さういふ感じが濃くなる。例の通り面貌の微細なところがよくわからないが、

「此頃は自分の所信を貫徹させようとする小さい寺などは立ちゆきがないので、いゝかげんなどところでおさめておきます」

いかにも當世流の詞で、やはりかういふ世外人とすべき人にさへ尙この妥協的な詞を聞く——末世なる哉と思はすにゐられない、あゝ——。おみやげに三越ののりをもらふ。これも又俗人らしいおつかひものだ。田舎の玉子と

か、豆とかいふものゝ方が僧侶らしい氣分がして面白いのに——と思ふ。

正月十六日 晴

今日はいよ／＼を實家へやる事にはなしておいたのもう彼女の魂はとうにその家に飛んで行つたであらう——もうソワ／＼と朝からおちつかない様子をしてゐた。午後一時頃にとろ／＼出かけた。

どうも此頃の臺所の連中の怠け方はいかにもひどいので今日はどう／＼私自身臺所へ出て見た。出入口には大きな火鉢が持ち出され、二人の若いものがあたりながら女中としやべつてゐる。私は眞正面からこの二人の若者——特に一人に向つてこのいそがしい世の中にそんな事をして怠つてゐる事の不正である事をいつた。流石に私のこの詞はかなりこの者たちにこたへたらしい。彼等が去つたあと、更に私は女中たちにも警告し、そこいら中の取り片付けを勵行させた。

正月廿日 晴 風つよし

今度は國府津へ来て以來まだ一尾の魚さへ見ない。漁村の不漁——慘憺たる氣がする——どうして暮すだらう見下ろす砂濱には大きな／＼ブリアミが徒らに日にさらされてゐる——

早朝からの大風は遂に暴風とさへなりかけて、波頭が白く翻つて見える——

正月廿三日 晴 稍暖

御飯たきのきみか下るといひ出した。何だかわけは云はず「つとまりません」といふ。まあよく考へて御覽と宥めた。

久しぶりで百合子が来た。さんく電話で頼むやうにして——案じたほどでなく弱つてゐない——数時間後京阪へ講演のため行くのだといつて非常にせわしい。しかしどう考へたか彼女の今日の言動はいつもの私に對するそれとはちがつて、やさしみと愛情を感じた——何でも京都に膽嚢についてのオーソリチーともいふべきお醫者があるので、その人に見てもらつて手術すべきや否をきめるとの事だつた。私はくれぐれも手術の不賛成をのべて熱慮すべき事をいつた。割田氏から原稿が来て校正する——

正月廿七日

國男はとうく十二時になつてもおきない——なるほどこんなにねぼろされるといやになつてしまふものだ——しみく往年我たちも亦かうして早く起きられなかつた時、姑たちの憤慨した事を想起せずにはゐられなかつた——何事もその身にならなければ分らないといふ世俗の詞も馬鹿に出来ない——眞の親でさへかうねぼろされるといふ氣持ちはしないものだとしみく考へる——かう思ふと、私たち二人が北海道へ赴任のためしばらく向島に泊つてゐた事がある。丁度百合子が生れて百日たつたかたゝない時だつた——あのやかましい向島の母がよくあんなに朝寝坊をさせたものだ——私はあの母上に比して尙且つ我子に對しての愛情が薄いのだらうか？——冷やかなのだらうか——かう考へずにはゐられない。ほんとうにどうなのか——又私は自らを責めないではゐられないのか——

正月廿八日 晴 寒

昨日國男に託してスエ子への手紙をわたす事にした。しかしよく考へて見ると、文面があまり六づかしくてわかるかどうかと氣づかされた。同時に私は此間のある一夜、ひどくヒステリックになつて夜中に藤江子が二階へねる——下へ寝る——といつてわがまをいふのに立腹して、彼女をとうく下へ逐ひやつた、その事について、とうく彼女にこまやかな詞をさへかけなかつた、理性に遠ざかつた責——それは彼女にとつて決して慈悲ぶかい母としての詞ではあり得なかつたのだ。こまやかにやさしく、母ながらも謝すべきは謝して和らぎをあたへなくてはならないのだ。徒らに理屈をいつても、これでは徹し得ないだらう。早く歸京してこの事をはつきりしなくては——かう氣がついて今朝はどうしても歸宅の事に決心した。

七月廿八日 晴

此一日此一時もあたらしと思ひしる時われ病得つ。

軒端掩ふ青桐の葉に音はしてふるともわかぬ五月雨の頃、

長い大患から漸く救はれた私は、いろくしたい事や書きたい事が山と積んでゐる。しかし案外疲れる事の早い私には書かうと思ふだけでももう冷汗に似たものが背筋を走るのを感じるのだ。

病中にさへ筆を捨てなかつたすぐれた故人の偉業を思ふ時、私の心は鞭撻され、又自らの不甲斐なさを齒を喰ひしめる様な時さへある。しかし十人が十人見てもほとんど助かる見込みのない大患——難症から救はれた——奇蹟的の再生を思ふ時、尋常でないこの己れの生命に對し、たとへそれが己れの生命であつても輕々しい事は勿體ない

といふ感じさへするのだ。この気持ちがある時は私を焦燥にし或時はしづかに時を待たうといふおちつきを與へるのだ。

あるじは野本氏等と同行、大阪に野本氏發明にかゝる鍵の會社が成立したその招待によつて大阪に行かれ、客も稀なこの静寂な時にこそと、かねて心にかゝつてゐた日記を更につゞけたいと思つて、今夜の思ひ立ちだ。しかし例の通りもうそろ／＼冷やかな流れが背筋を走つて來た。

この短かい幾行かで單に満足して筆をおかなければなるまい——

七月廿九日 驟雨

昨夜はどうかして短時間だけの睡眠で目がさめてしまつた。臭那を吞まうがどうしやうがはつきりさへきつた目ぶたと共に、夜にはおしい位明晰にいろ／＼の事象が念頭に浮ぶ。尖端的に己れの才能を發揮せんがためには何ものをも省みない彼女——

しかも尙私は單なる母子の愛に感溺して、理智的であるべき聰明さ——判斷力を失ひ得ない——理智の閃光をさへ恨めしく思ふ時さへあるのだ——噫、かの娘と共に赤化して獄に下つて悔ひない——女、恐らくそれはその主義に共鳴し、理解しての事ではなく單に盲目的の母性愛による——それさへむしろ羨やましくさへ感ずるのだ。炳として是非曲直の前に輝く理性の閃き——それは邪道より愛するものを救はんとする獻身的の力であり、又己れを苦しめる縮木であり火焰であるのだ。幼より舊道德の嚴格な家庭に培はれた私の魂——それはいかに我子の愛に溺れんとしつゝも尙私をして正しさに殉ぜんがためには生命をさへおしまない——殉教的な気持ちにさへならしめるの

だ。今や私の眼前には彼女の弟にして又私の神である彼の端正にして犯すべからざる面貌がある。噫、さうだ——

九月一日 快晴

丁度一昨日の事だつた。あるじがわざ／＼ハムのボイルドしたのをきらせて半斤もつて來てくれた。久しぶりに此肉に箸をつけ得たよろこばしさに、私は二日つゞけて最初はこわ／＼に一切れを、二日目の昨日は、それでも何ともなかつた。

昨日午後のラヂオで高島米峰氏の赤い思想に對する攻撃演説があつた。「死んでしまへばそれつきり——何にも残らない」かう考へてゐたならこれほどつまらない一生はあるまい。靈魂不滅——かう考へればこそこの短かい一生も、否死後にまで努力のあとを残さんと思へばこそ生きるのだ。ある赤い一人が、自黨の者の葬儀に列席して××の靈につぐ——といふ弔文をよんだ。これが問題となつて唯物主義の趣旨に反するものとして同志打の醜さを演じたといふはなし、曰く——曰く——私がかねて考へてゐた通り言行離反して反省しない彼等の弱點を遺憾なく指弾して痛快を極めた——噫、痛快！ 私がかういひ得やうか。我最愛のもの又この迷路に入つて天賦の才能、天賦の勢力をも注ぎつくして健康をさへ省みないではないか——

九月四日 晴 風つよし

壽江子について私の最もふしぎに感ずる事は、彼女の気持ちが非常に移動し易い事だ。まづ彼女の服装の上に着しい相違を見る事だ。丁度百合子と信州路の旅に出る前、彼女が自分で選んで自分でぬつた洋服は、いかにも子供

らしく稚氣にとんで、あの太い／＼手や足がいくら出てゐても肉づきの柔らかい——白い——可愛氣に富んだものだつた。それが歸つてからはまるであつてしまつて、何だか馬鹿に荒つほく粗野に見へる服装に變つた。環境の影響が、偶然の變化か、願はくば後者たらしめよ。しかも單に外面的の服装に止まらしめよ——

九月六日 曇

今夜は澁澤老子爵が九十二歳の高齡、加ふるに病餘の身を驅つて、隣邦の災厄を救済のためマイクロフオンの前に立つといふ事だ。何といふ生甲斐ある人であらう、徒らに長壽するものはいくらもある。しかもかく人道のためにする事の出来るのは羨望否々尊重すべき事だ。

これだけに生甲斐ありといふべきや此年にしてこのをたけびの聲、

人のため世のためにとて九十二の翁は叫びぬマイクロフオンの前に

富も壽も我は羨まじされどこの世のため立ちしさいさまよ、あはれ

九月九日 強風

ゼネーブの石井萬龜子さんからゑはがき二枚封入の手紙が來た。何でも日光浴を醫者にすゝめられて勵行したいと思つても、曇りがちな天候で日光浴が出来ないのでスイスまで來たが、やはり曇つてゐて思ふまゝに療養が出来ないとの事。やはり私が一昨年西遊して考へた通り、暑熱の高い夏——光線の直射する國土——これこそやはり人類の棲息する上に於て何よりの必要條件であつて、四季變りなき國土——それは單に衣服等に變化なきのみに祝福し

てはおられない。春夏秋冬——變遷する國土こそ眞に人類保健の上に必要な要素なのだ。徒らに泰西文明に陶醉して、自國の優越せる諸種の點を非難せんとするものゝ考へざるもの甚だしきものだといはざるを得ない——
明日の二百二十日をひかへて夕方からの波の音はすさまじい——

九月十一日 あつし

夕方になり咲枝、スエ子から二枚のはがきがついた。それにはスエ子がどうしても土曜日には行くとかいてあるしかし今朝の電話では都合があるく行かれなくなつた——といふ事で、ほんとうに親の心は子はしらす——何といふ事だらうこんなにしたのしみにしてゐるのに——などゝ女中たちとぐちをこぼしてゐるとノツクの音がする。御歸りらしいねといひながら立ち上ると、玄關の方の入口からヌツと入つて來たのは洋装の姿。

「アラ壽江子ちゃんとう／＼來たの——」

かういひつゝ立ちむかへる。眞向に立つたのをよく／＼見ると、思ひがけずそれは百合子なのだつた。

「マア——」

驚喜した私は涙ぐましいまでよろこびの聲をあげた。彼女はめづらしく柔らかかものゝ色のごくいゝ絹服に大きい夏帽をかぶつて、見ちがへるほど上品な服装だつた。やつぱりかういふしつとりしたなりはいゝものだ。一寸も不恰好に見へない——たゞ頭髮がひどく／＼のびて襟首にたれ下つてゐる。

「まあよく來たのね」

(二字不明)ものゝ嬉しさで彼女が幼い時の様に前に廻り、後に立ちしてむかへた。

九月廿四日 曇

昨夜あるじが歸つてのはなしに、谷口辭三郎さんが古田中のおたかさんと一しよに來るといふ事を聞いた。

九時頃どうやら玄關におとなふ人聲がある。と思ふと聞きなれたお孝さんの聲を先に辭三さんの聲もする。丁度私も髪も結び上げ身じまひもすんでゐた處。急いで玄關に出る——そこにはもう不相變元氣に太つたお孝さんがゐた。あとからリュックサツクのやうなズツクのダン袋をかついで辭三さんも上る——

「マア、ヨク——」

近よつて見るとお孝さんはいつもより蒼白く見へる顔に汗をふきく——あいつもそこくすぐペランダへ出る。

「聞いたよりもつといつところだ——あゝ箱根もぼんやり見へる——」
嬉しさうな辭三さんの聲音だ。

お茶よりも水が——といふ事で、ほんとうに二人ともよくのむ事く。

「獨居に馴れる——かういふ修業をしやうと此頃思ひついた私は、やつと此頃あるじがゐない夜でも淋しくなくやすめる様になりました——人生は遂に獨りなんですもの——」

流石に過去は文筆に親しんだ辭三さんは「ほんとうにそれが出来れば何よりつよいんだ、うちのおばあさんなんぞも氣は強さうに見へるけど、ほんとうは氣に入つた人間を始終そばにおかないでは淋しくてゐられない人なんだ」
「さうだらう——」と私はうなづいた。しかしかう考へる私自身もよく老境に入つて悠々自適し得るだらうか……
噫。しかしそれはおそろく私にはゆるされない心境なのだらう——噫。

我一人満ち足りぬとて何かせん我は母なり子等の母なり

天にあり地にある子らの母として正しく清く生きぬかんわれは

九月廿五日 曇

咲枝からはがきで昨日青山へお墓参りをすませたといふ事だつた。お彼岸ではあり、誰か是非やりたいと思つたが、今度は何ともいつてやらなかつたぞけうれしい氣がする——

今夕のラチオ放送から岡倉氏の英語放送を聞かうと試みた。有難いものだ、かうやつてテキストを聞いて聞いていると、もうそこには己れの年老ひたのも又周囲のわづらはしさも全く忘れて、ありし學校時代そのまゝの——好學の私の天質が總てを占領し去つて、たとへそれがいかに短時間でも限りない愉悅にひたる事が出来る——丁度極短かい英詩の和譯なのだ。字句の一つ／＼について丁寧におしへた後更に五七の調子で細やかにおしへる調子は何ともいへない、氣持だ實に私が學校時代おしへられた津田女史とは雲泥の差がある。これも時代の進運に伴ふ教授法の進歩で、決して津田女史の罪ではないのだ——

九月廿七日 曇後晴

今朝電話までかけてその違約をせめた——壽江子に——あんなにはつきり來るといつておいて——と。ところが丁度スエ子が出て、

「おとうさまに手紙をたのんでくれ／＼断つたのに——」との事だ。驚いてあるじにいふとポケットにしまひこんだまゝだといふ。

「まあいやだ事、御自分が忘れておいて一しよになつて、どうしたんだらう壽江子は——しつかりいつてきかせなければいけない——なんて、さあ早くその手紙を出してちやうだい」
かういらだしくいふ私に對して、光つた頭をつるりと一べん撫で、首をすくめたあるじは、流石に一言のまけおしみも今日はない——

十月九日 曇 小雨

昨日は風氣をぬいてしまはふとむりに厚着して汗をとつた。風呂に入ったあとの汗などいふものは、丸で土用中のやうだつた。今日になつて考へると、それはあんまり馬鹿げた辛抱だつた。

百合子に電話をかけて、せめて聲だけでも聞きたいと思つた。——例の通り此頃の私は彼女に對し特殊な憐憫の情を感じて安らかになり得ないので——どうかと案じてゐると、めづらしく彼女の聲が電話口に聞へた。それはまことにおだやかに、やさしみのある聲音だつた。先づ私はこの聲に安らかさを覺へながら、「おとうさまがお留守で、自働車があいてゐるので、もしか來られるなら迎へを上げやうかと思つてかけたの、どうせ百合ちゃんのいそがしいのは分つてゐるけど、せめて聲だけ——話だけでもしたいと思つて——電話を買つてあげてもいいけれど、ない方もうるさくなくていいんでしよう——」

めづらしくなごやかな感じで、彼女がほく笑んでゐるのさへ感じた。あゝ、總てを超越して、この母であり、子である感情、それを一蹴し去る事が人として果して出來得るだらうか——

十月十二日 雨 60

所々からの到來ものが來る度、私は彼女の上を考へずにはゐられない。昨日電話でその事をはなしたが、丸で木で鼻をかんだやうなあいさつ——おまけに「おとうさまがお留守だから早く江井を家へ歸しておやんなさい」といふ何といふ——越権ないひ草だらう。親よりも大切な労働者——それは一體何のためだ——？ あゝ、

かう思ひつゝも一方には又かゝるものを胚胎し、社會にまで送り出した自己の運命、運命としてはまだくしくかたがない——其責を考へずにはゐられない時又しても私は憤慨のあとのやる方ない涙が全心を溺らせやうとする。

十月十四日 晴

今日は此頃でない好晴で、昔の人がよくいつた裸蟲の洗濯とでもいふやうにおだやかな日和だ。

久しぶりなので、それ、これも洗濯、これも洗濯といふ様に、臺所總出で洗ひものさわぎだ。しかも私はこの好晴の陽光を仰ぎながら、中心から起つて來る閻々のやる方なさをどうしやうもなかつた。

昨日あつた百合子の印象——それは決して私を安心させる事が出來なかつた。落着きのない彼女——感情の尖つてゐる彼女——どうかしてゆつくりと、安易な心持ちにしたい、そして久しぶりに、長い外國生活のあわたしきから歸つた彼女に、昔の様な朗らかさと柔らかさとの中に陰翳のないほく笑みを見たいと希ふ母の心には、あまり彼女はいら立たしかつた。自己のあまりに辛く悲しかつた幼い過去——その苦しみをしりつくした私は、このいとほしい我子らに、自らうけた苦難の數々のその一つだに味はせたくなかつた。

自然に亨け得たるその才能を十分に發揮させ、寛やかに、大きく、此乏しい日本文壇に炬火を掲げるものにさせ

たい——炬火——それはたとへ疊の如き光りであつても、汚れなく濁りない輝きであつてほしい——嘗てはこの事に言及した時、彼女も泣きつゝその高く、しかも淋しい生活を考へつゝ泣きながらも同感し、肯定して、淋しくしかも正しく生きやうとちかつて、母子相抱いて涙を流したではないか——

あゝこの感激をいつまでも／＼永續すべきものと思ひ、安んじて露國にまで彼女をおくつて更に憂慮せず、心を安んじてゐた母は何といふ愚か者であつたらうか。寸刻も働いてやまず、進んでやまない彼女であり、文筆にたづさわるものゝ致命的な「行きづまり」、その打開に汲々たる彼女が、病後の腦力充實しない間にかなり長い病院生活——彼女の通信に安心してその肉身の誰でもが彼女の看護に馳せつけなかつた——そんな事があまりにも自由に育てすぎたわれ／＼——特にこの母のあやまつた養育——教育方針の誤りではなかつたか——

十月十六日 晴

めづらしく晴れた——病室の南面をからりと開け放してソーファアによつて見る。——長雨にしつとりしてゐる地上に雑草がのび切つてゐる——達者な私ならすぐ箒を手にしたい様な氣持ちがする。

椽先に足をむき出して、この強い直射光線にあたつて見る——晩秋の日ざしは中々のあつきを病後の爪先に感じて來た。見ると、椽先に日頃はきなれた、私の紫色のかなりあせたフェルト草履がある。誘はれるやうに私は足先に氣をつけながらとう／＼庭に下り立つた。もう此頃ではかなり歩いて來た私も降りつゞく長雨と、寒暖のはげしい陽氣に、障りはしないかとの懸念から久しく降り立たなかつたこの庭上には、處々に雑草が叢のやうにのびきつてゐる。

今日は、いつも隣家に若い夫婦の楽しむレコードのジャズの音もしない——そとろに向島の父上が「花落春色靜曳節歩閑庭、雲過半池白、山晴一窓青」の句を想ひ起さずにゐられない

十月二十日 晴

夕方大阪ビル内レインボーグリルでソヴェイト友の會婦人部といふのがあつた、百合子から切符をよこしたので咲枝、壽江子二人して行つた。この會はソヴェイト友の會といふので、何等政治的色彩を帯びてゐないのださうだつた。野上彌生、三宅やす子、平井みな子、平林たい子、吉屋信子等の諸氏、司會者は河崎夏子女史、百合子は友の會の説明をした、湯淺さんも同じやうな話をしたとの事だ。

十月廿八日 快晴

今日はどうしても百合子の宅を訪問して見たいといふ氣持ちにかられた。幸ひ昨夜は安眠したせいか氣分がいゝあるじが出かけるすぐ、何か彼女が好きさうなものをあれやこれやと物色する——丁度昨日ついたばかりのお餅松茸やら庭の柿、葡萄も有賀が昨日くれたのは流石本場だけに甘いのであるも入れる——外に何か好きなものを買つても——と金二十圓を手提袋に入れる——その袋も彼女が好きさうな古代模様に入れて——

百合子はいつもより着衣も淡紅色のやゝ柔らかな感じのものを着てゐ、眼差しもおちついてゐる事は何より私の心をおちつかせた。彼女は私の疲れをきつして、椅子よりは——と床をしいてくれた。私は早速その上に足をのばし、彼女も亦傍らに横たはつて、のび／＼した氣持ちは親子ならでは——と思はずにゐられなかつた。かうしてゐる

る中にも案内の聲がおこつて、二三人の客が玄關に來た。一々百合子は出て應接した。

三時過ぎるとすしをととり、菓子をとつてくれた。總てが二人前づゝ別にわけて取つておく。一人は湯淺さんにきまつてゐるが一人はたしかに男子らしい。きつき見た椽先の踏石におかれた新らしい桐の下駄——私は聞かうともしなかつた。

やがて又案内の聲があると、すぐ百合子は立つて行つた。何しろ總て私を憚かつてか手傳ひの女は決して聞える程度の聲を出さない。それは男性の聲だつた。——何かいふと、すぐ百合子が玄關に行き、やがていかにも無遠慮に且つ粗野な風貌らしい動作を想像するやうな雑音が次の間の——應接——に起つた。何といふ従順らしい言動を彼女から聞く事だらう——それは實に娘らしく無邪氣に——盲從的なだらう——湯淺さんの分も私がかくからどうか少し待つてちやうだい——「今までは私馬鹿に理屈つほしいものばかりかいたの、けれど今度つからはもつと肩のこらないやうなものを書くら」

「ウン、それがいゝんだ。むやみに理屈つほしいよか——」

何といふ威張つた、兄貴めいた詞だらう。おまけに私が折角百合子がすきだからと、庭の柿までもいでもつて來たそれを、ムシャ／＼ほ／＼ばるらしい。

「僕初めてだ、こんな柿は——」甲州葡萄の本場だといつて有賀のもつて來たのをわけて來た。それさへ頼ばるらしい。無作法にベツ／＼と種を出す音さへする——かうかかげで聞く百合子の言動は、接する人によつて著しく變つてゐる——「デモクラシー」平等を絶叫する彼女に、かくの如き断面を見る——否聞いたのだ——

私は徒らに自己の神經の疲勞する愚かさを思つた。しかし又彼女の生活のある一部を見た事も無益でもなかつた

十一月八日 快晴 暖 72

庭前に咲き残つてゐるコスモス——ダリアが又ふしぎに一輪咲き残つてゐる——涙ぐましい目にまづ彼の面影が浮ぶ——噫。この偉大なる靈の力によつて生き得たこの母——正しさに則せんがため、彼女と意見を異にし、かの罵倒して餘裕なきまでにいためた彼女——しかも母としての私は尙彼女の將來の幸福と安全を計らんがため、病軀を押して彼のF氏を參謀本部に訪問したのだつた。しかもF氏は意外にも亦彼女にすこぶる好感を持ち、

「つまりあなたの御心配に成る——世の中を、よい世の中にして平等の生活にあらせたい——といふ持論——それは即ち百合子さんの理想と同様——たゞその方法のちがふばかり——何しろあの人——百合子——は、一寸私が一言いへばもう腹の底まで見透してしまふ人——かういふ人にいろ／＼いひきかせたり諭したりしたつて何になりませう。畢竟あなたが貧民たちに同情する——そして樂にしてやりたい——といふ御希望も、百合子さんが平等に彼等を暮らせてやりたいといふのもつまり一つ目的であつて、たゞその方法が外科的であるのと、内科的であるともいふ風にちがふばかり、私も近日是非百合子さんを尋ねてどんな様子か聞いて見たい——彼女が國家——といふ事を忘れさへしなければ、何もあなたが御心配なさる事も何もない——」

かういひつゝ約一時間にわたる彼のはなしによつて、私は我國の武士道——大和魂に疑義を持たざるを得なくなつた——しかもあゝ母としての私——日本國民としての私、更に人道的に考へ、彼が靈に對して恥ぢざる私——この一時の安堵は果して正しさに安んじたる我心か——

私は私の覺悟——正否、曲直を熟慮推考すべき一大事の秋が來た様に感じた。

十一月十四日 雨

昨夜久しぶりで東京へ泊つたあるじは例刻より少し早目に、その一汽車前に歸つて来た。

折角この國府津の二三日おだやかに落ちついた彼の氣持ちは、このわずかの東京行ですつかりそこなわれて、又もとの氣ぜわしさにかへつた事はいかほど私を失望させた事だらう——いつもの癖だ——かうあきらめてゐられない私の敏感さがあつた。話しによると、百合子から手紙が来て——事務所へあて——モネーの必要を訴へて来たさうだ——その手紙も持つて来てあるが——丁度私が彼女のため小切手に署名しておいて来たものがあつたので、直ちにそれに金三百圓を記入してあとで事務所へ来た百合子に手交したとの事だつた。

どうも此頃來とかくいろ／＼の事があつて私の安眠を妨げる——「今更に何か驚く生も死もたゞ我神に仕せてあるを」全くこの通り——何を聞へ、何を騒ぐぞ——考へ去り、考へ來りて私の心境活然たるを覺へる——かうして私の心境更に拓けて大なる安らかさを覺へる——まして今日は英男神靈の制服姿の寫眞がインラージされたといつて、あるじが無斷で棚の上に安置しておいた。ふと見た私の心は打たれた。

十一月廿一日 曇 冷 59

今朝は又温度が低くなつた。

ラヂオでは滿洲問題が松平大使の努力で大變善轉し、もう近く休戰條約が實施されさうだとの事だ。

此頃來の寒氣凜烈滿蒙の野に轉戦する我將士の苦闘察するに餘りある次第だ。願はくば天候その烈しさをゆるめて我皇軍を助けよ——

十一月廿四日 曇

今日はいよ／＼あるじが北海道へ出立するといふので不相變せわしい事だ。昨夜風呂上りにウト／＼した爲風聲に成つたあるじが、老體を北海道に運ぶ事は同情に堪へない氣がする——どうかキニーネを連用して重らせたくないとくれ／＼注意する——

十二月二日 曇 47

昨日の新聞紙で英京の日本大使館が共産黨の襲撃をうけた事を報じてゐる——何とかしなくてはなるまい——

昨日松岡亮氏が學資請求の爲來るといふ報があり、あるじは徳岡を介してはなした方が確實でいゝといふ事になつたので事務所へ電話する——徳岡氏生憎來ず。

何だか昨夜から急に口のまわりが變にこわばつた感じがする——夕方四時過の事だつた。午前中のいろ／＼の用事でつかれた私は、一寸の間を休息にとベットに横になる間もなく又候いろ／＼の用事でウト／＼しかけるところを驚かされてしまつた——こんな時は「そおきてしまへ——かうおもつて二階の書齋へ上つて机に向つた。古い懐中の化粧鏡がある——何氣なくそれに面した私は何に驚かされたらうか？ それは全く私自身の口元に驚いたのだ——さうだ、老婆の口付だ——口元だ。元來頬の肉付きがかなりよかつた私はいつ此頃まで——病後ではあつてもそれはやはり若い時のまゝの豊頬を保ち得てゐたのだつた。それがどうした事か今——何とも名狀しがたい寂寥の感が私の心をしめつけた。年老いて老婆に成る——それはもう人生必然の事なのだ——面影の變らで年の積れかし——かう詠じた彼女の心境が今更ながらあり／＼と私の心に映する。噫——無理な願ひとしりつゝもかう訴願せず

にみられなかつた彼女——我も亦——か。しかしかういふ必然の事に囚はれて兼ての覺悟を動搖させる事はあまり
く——いづちがない——。

十二月三日 晴後曇

はなれのしづが暮参したいといつて午後五時頃出かけた。

佐藤功一氏令息新婚の夫人同伴來訪。疲労した私は咲枝を出して應接せしめた。大層美しい方だと咲枝はいつた
玄關だけで歸られた。

戸田利兵衛夫人が來訪、見事なメロン入のくだもの一籠到來した。此間の芝居の切符代を持参した。

立岩震作夫人中風症で病床にあり、久一の息子大怪我をしたとの報關氏より來る。由て久一の方へは五圓、立岩
さんの方へはチョコレートの箱入りを送る。

今夜あるじは講談社長野間氏の夕食に招かれた。勿論それは最近建てらるべき同社新築工事についての相談會を
も含まれてゐたのだつた。夜十二時すぎても歸らないあるじに壽江子が心配して電話をかけたといふ事は翌朝にな
つて聞くほど私は睡魔に襲はれてしまつたのだつた。しかもこんな深更まで宴に列した同社長は更に疲労の態なく
宴果てゝのち更に又社員を集めて相談するのだといふ事は實にあるじを驚かせた。めづらしく歸宅した翌朝この事
をしきりに感嘆しつゝ私に話した。

十二月八日 快晴

めづらしく好晴の日だ。カラリと晴れた空はひどく赤みを帯びて眩いばかりの陽光が南の廊下に溢れた。

昨日から少々不快であつたあるじは、丁度事務所もひまだし此際一つ養生をしようと思つて、もつてこいの此
日を、ゆつくり日向ぼつこをしたり、書見をしたりしてゐた。

そこで、此間中から子供らの間で計畫されてゐた私の全快祝ひと誕生日をかねた集りが丁度この暖かい日和と私
の工合のいゝのを幸ひと、來合せた直行さん、本田道之氏をまじへて、にぎやかにはじめられる事になつた。飾り
ものはかねて用意してあつたので、食堂は見ちがへる位に裝飾される。壽江子のかいた人形など實に上手に出來て
動き出しさうだ。かういふ目出度い日に百合子の來られないのがひどく私を不満にも考へさせた。

十二月十日 曇 暖

兩三日來むやみに暖氣だ。此時を利用して所々を訪問しやうと思ひ立つた。

先づ入澤博士邸を訪ひ、全快の謝意を表したいと出かける。博士邸は私の考へたとちがつて日本式の一寸洒落
た構へだ。自働車が止ると出て來たのは制服姿の青年、中々物馴れてゐる——生憎今日はお休みの日で——月水金
でないといふ方は御出張になりません。かういひつゝもの馴れたこの青年は丁寧な門外まで送つて出た——

それから兼て行きたいと思つてゐた水野夫人へ行く——丁度康子夫人が歸らうと玄關へ出た所——一寸の間によ
けて何だか世帯じみて見へる——紫つほいコートに襟巻のない襟元が寒さうだ。引つかけてゐたコートをぬがうと
する康子さんに「そんな事しないでもいゝよ」かう制しながらます子夫人は大島のふだん着で出て來た。不相變元
氣さうにせわしさうだつた。常磐會の慰問袋の相談をする——何でもあの帽子が一つで十二三圓するといふ事だつ

たので——それちや十五圓にしませうといふ事になり、私はそれだけを水野夫人に託した。夫人は書生に託して早速發送を命じてゐた。

かうして、やはり何處やら心やすい友の家の居心地よく、一時間半位かたり合つた。それから眞向ふの黒井氏邸に行つた。もう夕ぐれの色や、濃くなつた家の門に長居は憚られて取次の女中によく御主人御全快のよろこびをのべて辭去した。

市次郎から澤庵大根が届いた。今年は大變出来が、らしい。おけさからはがきが来たが、かあいさうに彼女も亦よる年浪には争へず、此間申から足腰がいたんで、ろくに野良へも出られず難儀をしてゐるとの事、しかし此頃やつと樂になり、そろ／＼孫の守り位をしてゐる様になつたとの事だつた——

あるじは一寸した事で齒を缺いたので、文部省の齒科治療所へ行つて治療を受ける事になつた。大變清潔でもあり氣もちが、といつてゐた。しかし、服藥をするのがどうも面白くないなるべくまないやうにと注意する——日頃丈夫なあるじは、齒の治療にもかなり刺戟をうけたと見へ、夜中ねむれないので臭那劑を服用した。

十二月十四日 快晴

弘道會の軍隊慰問の寄附金は中々集まらない——自分の力を試みるべく私は懸命に所々へ頼んだ。食堂へ居据りの電話での交渉だ。中々じれつたが、しかし又現金をたてかへて承諾だけ得るといふ事は一寸人々に一時的の安易さを覺へさせると見へてなかく話がかどる——とう／＼百圓を突破して百三十九圓五十七錢の寄附金を得た——私にしては大出来だ。しかしふなれの事に頭をつかつた、めだらういやに頭がいたむ——しかしそれも一寸横

になるとちきなほつてしまふ——これだけが何よりありがたい——

十二月十九日 晴

午後から又三越に行つた。いろ／＼所々へやる歳暮品を考へると、此間だけではまだなかく足りない。今日は少しだるいやうにも感じられてわれながら少し危ぶまれたが、今日を外すと又困るだらうといふ氣がしたのでとう／＼奮發して出かける——お供は例のしづだつた。ところが今日は此間とちがひ大入満員の店内はおすな／＼の大混雑、いきれる様な空氣の中でヒステリツクなおかみさんたちが目を光らしてわれがちに澤山の反物をかへて群る人たちをおしのけつきのけ——といふ形で大童の買物姿は、私のやうな病上りの者を僻易させる——何といつてもこのきものといふものはいかなる魅力を婦人連に持つてゐるのか——かういふ私さへ又彼女らと五十歩百歩の差のみではないか——

十二月廿一日 晴 寒

今日はゆり子が來るといふ電話だつたが、例の通り又どうかかわからない——又例の通りさしつかへかな——かう思つて少しがつかかりしてゐると電話室でいきなり彼女らしい聲を聞いた。——姉妹といふものは争へないものでよくスエ子の聲と間ちがへる事があるので——或は——と聞き耳を立てゝゐると、ツイと音もなくこたつ部屋に彼女の顔のぞいてゐる——オヤ——といふ聲も出ない様に彼女はスル／＼と私のそばに來てゐた。

「どう？ おかあさま！」かういふ聲は不相變やさしく親しさがあつた。嬉しさや、いろ／＼の感で一寸私は詞

が出なかつた。

「さあ——もうすぐ御飯だよ、食堂に行かう——」かういつて私は彼女を食堂へ誘つた。歓迎の氣もちでたつぷり火を焚いた室内には湯氣も立つ様に暖かさが満ちてゐた。

「おかあさまが××さんに會ひなんぞするつて連も大まちがひ——すぐ私の處へ變な人間が二人も来て——」しかし私はこの詞を信じ得なかつた。

十二月廿三日 晴

夜に入り基さんが來たいとの事だ。明日は或は國府津へ行くかもしれないので來るやうにと電話する——夕飯すざやつて來た。今日はかのエンゲージの報告なのだ、新調の黒い服——モーニングかもしれない——に、彼の黄金時代ともいへよう喜悅に輝く面貌は急に彼を大人びさせたやうに思はれた。——

昭和七年

正月元旦

もうとう／＼昭和も七年を數へる——際行く駒の足早み——など、古くからいつた通り、いつの元旦にも驚かすのは一年といふ月日が全く夢のやうに過るそのあはたゞしさだ——しかし國府津の年頭は東京のそれとはちがひ

同じ一日も大變長くのびやかに感ぜらるゝだけは有りがたい——何しろ東京のやうに朝から忙殺されるやうな來客もなし、誠に長閑な感がする——

村長、小學校長、村會議員六人、青年團長等多勢して年賀に見へた。あるじと二人して玄關に出てあいさつする引續いて坂下のおまわりさん、思ひがけず塚本さんまで來訪された。丁度あるじも居たので久瀧の辭が交される。私も久しぶりで出て見た。初対面からあまり變らない彼は、少し白髪が殖へたばかり、大して變つたところも見へなかつた。何しろ私も二三回かおひしたばかり——それでも流石洋行までした人だけあつて、私を見るとすぐさま外套をぬがれたのは氣持ちがよかつた。

正月三日 快晴

國府津館へでも行つてみやうと鼻の先だが自動車で行つた。あるじが電話をかけておいたので門のところにな將らしいのと——あとで聞くとこの女中頭だつたのださうだ——出むかへて手を引いてもらつた。何しろ大へんな石段なのでかなりいやになつた、例の通りあるじはすつかり殿様然とすましてゐる——毛皮のコートが荷厄介だ。やつと通つたはなれは新しいので氣持ちはよかつた。——欄間に西園寺公の書が額にされてある——おそらく此店唯一の寶物なのだらう——

久しぶりの夕食にあるじは大きげんだつた。ハシヤギ切つて思はず周圍をかへり見る位だつた。

正月十五日 晴

今日は十五日で小豆粥だ。それでもふしぎに女中たちが覺へてゐてもかく無滞それが出來た。久しぶりでたつぷり砂糖をかけてたべる。甘い事く、二つ入りのを三杯平げた。晝飯にはパンにかんづめの肉のまぎつたのに鮑のかすゞけ——そのかすをつけてたべて見た。何ともいへない美味さだ。私も病後大分好物がかわつたらしい。梅津醫師から見事な平目一尾到來する。生魚を買つたところなので中村をよび刺身や何かに造つてもらひ、半分わけてやる。

内村さんの女中が年頭をのべに来る。平目を二切にわけてやる。

A女がそろくお生ちゃんを出しかけて來た。とかく才走つたものゝ通弊だ。人に對する態度の謹嚴——謙讓——西村の父上の如きものは滅多に見られない——婦人はとかく局器が狭いので生意氣になりたがる——是はA女のみではない、慎しむべきことだ。

母上の生家鈴木氏は皆倨傲の癖があつたようだ。自分などもどうかするとその傾向に陥り易い——注意すべき事だ——

正月十七日 晴 稍寒

今日の放送で「ガンヂー」の事をはなした。あれほどの人でありながら印度人であるがためにさまざまの迫害を受けたいろくの事實を聞いた。何しろガンヂーも六十四歳——今度の投獄については同氏は莞爾として縛についたさうだが夫人は非常に悲しんで泣いたといふ事だ——實に氣の毒に思はれる——しかし私は彼について巨細の事を知らない。一つこれはもつとくわしくその真相をしたりたい——

正月二十日 曇 冷

昨日からの断水ですつかりつまらなくなつた私たちも、今朝になつて少しづつ水が出はじめたのですつかり元氣回復した。なるほどこの位の事でさへこんな悲觀する。戦地などでは——と滿洲の軍人に同情せざるを得ない。

今日は三宅やす子さんの記事があちこちに見へる——彼女の主人恒方氏をよく知つてゐ、特に彼が文學愛好の人であり、過去十幾年か前、百合子がはじめて文名を誌上に駛せた當時、國民美術の特別講演があり、その時同氏が出演し、丁度聴衆た混つて百合子がゐるのを見て盛んに稱揚し且「文學者でも是非科學を研究してほしい、こゝにも目下文名を馳せてゐる御婦人もゐられるやうだが——」とまでいはれた。私も共に傍聴しつゝ此文學愛好の若い博士が總ての聴衆を超越して百合子のために説かれたその風貌さへ唳驚する——今、又茲に更に報せらるゝ未亡人の訃——自分より若き事十幾歳、感慨更に深からざるを得ない——

あるじが事務所へ出るのに託して金百圓に和歌一首をそへて百合子に送る。

百合子來といふより早く我胸は躍りて次の日曜を繰る

我ながらいとほしまれつ幾度か待ちほうけつゝ待つ親こゝろ

流石に彼女も心を動かしたと見へ事務所へ來てあるじに、おすし、ボンカンに手紙をつけてよこした。手紙の末文にデハ又と書いてあるのはひどく幼稚な感じがした。しかしこのおくりものによつて彼女がよろこんだ面影さへ目に浮んで今宵の夢は安らかであらう——

おくられしすしにくだもの前におきてこよひの夢の安けさをおもふ

正月二十九日 晴

今日はやつとの思ひで百合子にあふ事が出来た。所信を異にする親と子——しかも離れる事の出来ない親と子の愛着はいかに私を苦しめるか——それでも彼女の言動は大變柔らげられて、久しぶりでその本来のやさしさが感ぜられた。服装や何かも此前見たやうな粗末な労働服めいたものではなく白い絹のブラウズに茶色の服——外套も中々立派な毛皮のをつけてゐた。

「おかあさまといふ人は愛してゐてもそれを表現する事をしないで心で思つてゐる——といふ人ね」
かういふ事を今初めて彼女はしつたのだらうか——

正月三十一日 晴 稍暖

坪内博士から非常に丁寧な手紙が来た。「坪内雄蔵」としるされたのも物々しく感ずる——文面も非常に丁寧親切を極めて——此間訪問の折の不備な接待を謝し、この次は是非櫻、梅、桃李一時に咲く陽春三月頃改めて來訪されたい、熱海ホテルへでも御案内しやうといふ文意は、あまり鄭重さを極めて私には意外の感じさへしたのだ——

二月一日 快晴 暖

昨夜いろ／＼のはなしから、うちの自動車が非常に老朽してブレーキが利かず危険な状態になつた。しかし何しろ大金なのでどうかして安易に買へる工夫をしたいが、お父さんと相談中だといふ事を聞いて私はおどろいてしまつた。

「儉約といふにも方圖がある——大事なお父さん——私だとしてやつと助けられた命——それを托す乗ものがそんな不完全では大變だ。早速新しいものに取かへなくてはいけない——」

かういつて私は自動車はどの位で買へるかといふ事を聞き、それが私の買へる範圍である事を喜んだ。そして早速あるじにもその事を話し、一刻も早くその事の實現をたのんで同意を得た——

電報が来て、あるじはおそくなるから食事をすませるようにとの事だつた。私はこの寒い夜、暗い道を歸つて來るあるじの苦勞を考へずにはゐられないが、しかし又一面にはかういふ事を好む彼が、折々の變化は寒さ位物の數ではないらしい——まあこれもいゝだらう——

二月三日 快晴 暖

二月もとう／＼三日を數へるやうになつた。今更ながら月日の立つのがあまりに早いのに驚ろかさされる——坪内さんからいたゞいて來たるはがき——双柿園の——先生御夫婦の載つてゐるのを二枚、百合子にあてゝかきおくつた。一枚は御夫婦で炭がまか何かに火を焚いてゐられる處、一枚はかのすばらしい柿の大樹をうつしたものだ。

滿洲事變いよく擴大して、今日は又もや例の三國關係が大びらになり、憤慨の極自及した將校さへ出來た。今日の新聞で、百合子がこの附近へ來て演説を試みてゐることが報導されてゐる。

二月五日 晴後曇

今日はどうしても湯河原行の荷物をまとめてしまひたいと朝から先に立つていろ／＼さしづをする。今日は病氣前のやうに、否それよりも一層明晰に物事がはかどれる——嬉しくてたまらない——荷物の世話がすむと今度は庭へ散歩に出る——大變しづかな日だ——立春といふだけでこんなにもなごやかに浪も風も立たないのかと感心する——あんまりおだやかだから海へ行つて見やうぢやないの——かういひながら有賀と共に海へ下りて見る——おだやかだが陽光が生憎にも影をひそめてそろ／＼寒くなりさうだ。病後ぢきに鼻聲になる私は又胃されさうなのでサツサと砂坂を上つて歸路に向つた。ふしぎに今日は自働車の砂煙が私を襲ふ事が少なかつた。——この少しの散歩は非常に私を愉快にし、又食欲をそ／＼つた。晝飯は大變美味く、二椀半をかへた。少々圖にのつた私は晝飯後處々へ手紙をかいた、壽江子にもいろ／＼細やかに——この間はお母さまが疳癩を起したが、しかし壽江子も決してあたり前でなかつた——と、反省する事のいかに己れをよくするものである事等についてかいた——

二月六日 快晴

私たちはとう／＼湯河原へ行つた。不相變かなりの荷物が一臺の自働車には納まりきれなかつた。あるじを勞しまいと焦慮しながらも有賀の手ではどうにもならず、宿——伊藤屋——の番頭がはる／＼迎へに來たのにも任せられなかつた。やつぱり私に気がしながらも、あるじの手を煩して自働車二臺を雇つて伊藤屋についた。富士屋の敏腕な事は、こゝにも亦此ホテルの車が一番優勢で安心が出來た。往年西村の父上從妹のお琴さん、義次郎がお供をして一夏をこゝに過した事のある湯河原——伊藤屋——思ひ出は又しても私の胸によみがへつて懐舊の念にたへない——間もなく車はその伊藤屋へついた。當時玄關であつたそこは中の口でもいふべきものになつて、中々の玄

關がまへが私の目の前にあつた。當時表玄關であつたところは舊館ともいふべきものになつて、その方に私たちは案内された。湯の性質は誠にくせのない透明な氣持ちのいゝものだつた。あるじは非常に入浴をよろこんで朝夕二回も入つた。しかしいつもとちがひ非常に自己の健康を氣にし出したあるじは、平生が平生だけ、氣になる位そのため焦慮した。どうか私のやうに絶対に彼の死後の力を信じて任せきつた氣持ちに、安らかさを持たせたいと思つても、なか／＼さうなり難い彼を私は怪しまずにさへるられないのだ——こんなにもおの／＼の持つ特質は異つてゐるのだらうか。未知の人の墓にさへ跪き得る彼でありながら、偉大なる我子の靈に信仰を起し得ないといふ事は——こゝにも又各自のもつ天質の大なる差を考へずにはゐられない——

さてかうして此宿に東京から運んだ大行李——夜具の數々は——大變私に安心と快よさを與へた。到來の毛布二枚つゞき二組を持つて來たのが大變快いたちのもので、ふつくり私からだが埋まるやうに保温される——有りがたいにつけ例の私の目は又あつくなるのだ——噫勿體ない、父上よ！ 母上よ！ 涙は又この紙面におちんとする——

東京へ電話して安着のむねを報する——何といふ便利な世の中になつたものだらう。一寸してこの宿から我家に電話する事がごく簡單に出来るのだもの——

二月七日 曇後晴

午前からあるじは熱海の依國一氏の別荘へ行く約束だからといつて出かけた。あるじの出たあと庭へ出て見たが極せまいのと不案内とですぐ引込んでしまふ。

偶然部屋の北側の障子を明けた。するとそこにはかの歌舞伎座で見た事のある修禪寺ものがたりの書割りにでもあるやうな——窓のすぐ目の前に朱の鳥居神社——それが高い——石段を上つて参拜するやうに出来てゐる——物さびた——劇的な景趣はひどく私をよろこばせた。お天気になつて、私の足もよくなつたら是非上つて見ませうね——かう私は有賀に云つた。

今朝めづらしく鶯の谷わたる聲を聞いた。

山さひし心地こそすれ鶯の谷わたりするこの初聲に

二月九日 曇

昨日一泊したあるじは夕飯前に戻つた。そしてそのはなしでは、百合子がいよいよYさんと別れる時が来たらしくある青年紳士——法學士で秀才だといふ——それと意氣相投合し、そのため湯淺さんがひどく嫉妬して打擲さへもしたといふ。どうかその相手の紳士が相當の人格者であればいゝが。あるじのはなしによるとこの葛藤の爲百合子と湯淺さんはなれに夜半——徹宵で相争ひ、壽江子はその空腹を案じてたゞ一人おきて寒夜にはなれに食物を運んだといふ——このはなしを聞いて私はたへられない不びんきに瀧のやうな涙を流した。平生は誠に粗野な不人情のやうに見へる彼女——それがまあたゞ一人夜半にそんな事をしたのか——老年になつてからの子供を持つ事は全く不慈に近い事になるのだ——どんな不孝な言動があらうとも、そを救ひ得べきもの——將來について深く慮るものわれらをおいて他にあらうか。噫——

二月十三日 朝霞後晴

今日は拂曉からはげしい風の音に交つて霞の音がした。おだやかでない天候だ。しかし私は昨夜から歸京の事を決心してゐたので大抵の事では思ひ止まるまいと考へた。このあられの音もしばらくで止んで、今度はすさまじい風が吹いて松の嵐ものすごいやうになつた。しかし晝頃からむやみに生暖かい南風と共に温度も非常に上りそろ／＼風も静まりさうな天候になつた。朝からはほとんど用意の出来た私は、有賀や何かを督促していよいよ出かける事にきめた。

出立前、三土、俵、白河、水野夫人、有賀、開成山佐藤、辻村氏等へ、東京出立前あいさつしておくべきのを忘れたので、みかん、きびもち等それ／＼適當に送つた。

水野夫人へも電話をかけ、更にもみかんをも送り、はがきを出した。

二月二十五日 大雪

大雪なのであちこちから雪かきの人夫をよこしてくれた。石井、有光——高山組のはすんだので歸した。

百合子にあひたいと思つて使したが又來れないといつて來ない。もう新聞紙上に結婚の事が出たので、大分人の耳目に觸れてゐるのだ。私は暗然として徒らに彼女の上に思ひを馳するのみだ——

二月二十七日 快晴

壽江子の食慾は依然として不振だ、しかし元氣はよし昨夜はかなり安眠したので追々食氣づく事とは思ふが安心

出来ない気持ちがする。殊にこの二三日は百合子の結婚問題で私の頭はかなり悩まされる。おまけに昨夜あるじのはなしでは百合子からアナウンスしたと見へ、曾禰さんや何か、ら盛んに祝辞をいはれたとの事。

今日は久しぶりで夕飯に百合子が来るといふ事なので或は二人でかと思つたがやはり一人きりだつた。

二月二十九日 晴

關氏が夜おそく来た。百合子の事については熱心な讚美者である事が幾分偏見であると思ひながら悪い気持ちがないのも親心の無據愛情からだとは思ふ——しかも彼女の味方である事が私には何より嬉しい気がする——憫むべき親心だ——しかし私はこの姑息の愛の中に陶醉してはゐられないのだ。正しき道に則すべく私は固い覺悟と決死の必要があるのだ——あゝ。

三月三日 晴

今日は雛の節句だ。心許りの雛菓子でも百合子のところへ届けたいと俊造を使にいろ／＼のものを送つた。不相變一べんの禮状もよこさない——民衆のために善行を成さんとするものが親を——肉親の親を閑却しなければならぬといふ事は同意出来ない事の一つだ。

三月四日 晴

百合子がふいにやつて来た。大變に肥つていかにも満足らしい顔を輝やかしてゐる。自己のみの満足？ あゝ。

今日は昨日のお菓子や何かのお禮に来たとの事だつた。

大瀧基さんから電話で、中耳炎の心配でねてゐるので退屈してゐる——いたゞいたモーニング地をいよく三越へ注文したとの御禮だつた。

三月五日 快晴 暖

壽江子がいよく全快、しづも起きた。いかにも春らしい陽光が庭に輝いて快い朝だつた。この自然の和らいだ天地に何事ぞ號外はけた、ましく飛んで團男射殺の惨事を報じた——何といふ世の中だらう——

今日は久しぶりの暖かな日でもあり、久しくよそで夕飯をとらなかつた私はあるじに電話して壽江子と共に花の茶屋で夕食をとつた。久しぶりに通された座敷は小さい部屋で、竹内栖鳳の一軸が光つてゐた。茶色の花瓶に眞白いバラの一輪が鮮やかに、暗い床の間を明るくしてゐた。

三月七日 曇

今朝は大分暖かいが曇つてしまつた。もうそろ／＼花ぐもりとでもいふやうな仄かな暖かみを感じるのは争へないものだ。

百合子へ俊造をやつて、是非来てもらはふとしたがやはり不相變はつきりしない。あとで歸宅したあるじから、彼女が何か演壇に立つて演説を試みやうとする刹那その發言もしないのに禁止された——カフェーの女給などは今度もし選挙でもあつたら一番に百合子さんを推選しようといつて大變な人氣だ——……………

四月一日 快晴

春光に恵まれた朝だ。

昨日はかなり活動したが有難い事にさのみ疲れない。久しぶりで裏の方へ廻つて見る。俊造が感心に水をやるので温室の植木も枯れずに芽を生々と出している。たゞおしい葉牡丹の枯れてかさ／＼になつてゐるのが残念だ——黒豆といつて壽江子の愛撫した牝犬がいつの間にか物凄くほど成長して、その子の赤とぶちが當時の黒豆位の大きさに成長してゐる——人間なら孫の代——いつか大瀧の基ちやんが——この犬はきつと大きくなる——といつた通り、實に凄くほど大きくなつた。そして一番感情の發育してゐる彼女は丸で人間のもつ愛情の如き表現さで——私になぞは甘つたれるような態度で憚り氣もなく足の爪先をなめるように——庭へ降り立つ私の足先にまつわりつく——

四月四日

滔々と天に沖らんとする濁流に逆ひて清き流れこそこれ

四月八日 雨

昨夜は一昨夜に引きかへめづらしく不眠状態がつゞいた。夢に見る場面はあまりに私の心を動揺させたのだ。彼女のため悲しみに打たれた私もう／＼安眠し得なかつた。病後初めて奥那の世話になつて漸く寝つく事が出来た今朝は早くおきて何處へか壽江子が行つた。あとで聞くとそれは百合子を案じて國府津まで行つたのだといふ事

だつた。しかし折角行つたそこにはもう百合子はゐなかつた。

四月九日

山は裂け海はあせなん世ありともかゝる思ひをすべしとおもへや

何故の天罰ぞそもかく重くかく大なる咎を下さる。

幽居せる我子おもへば春の日も輝けくもなし昨日も今日も

四月十日 晴

彼女を思ふ事切な私も絶へざる心の煩への中にいつの間にか嘘をとちたと見へ、めづらしく安眠して目が覺めたのはもう雨戸の白んだ朝の五時だつた。

「彼女如何に——」病の床に呻吟する彼女を考へて枕をぬらした宵々はまだよかつたのだ、今は——腸九廻といはんも尙ゆるさを覺へる位だ——

今日は池田氏邸の起工式があるといふので早朝からあるじは出かけた。その留守中途に新聞紙は筆を揃へて彼女等の事を報道した。警視總監、三土氏等を通じて事實の暴露（以下空白）

四月十一日 晴後曇

何といふ日が來たのだ——私の一生涯にとつて實に思ひがけない日が來たのだ——百合子の安否を氣遣つて署行

を思ひ立つた私は、丁度來合せた國君と國男と共に午前十時頃家を出た。幼ない時から、自分さへ正しく優秀でさへあれば——かういふ觀念は私を學校に於ける生徒としては優等をつとけさせ、小學校入學當時より首席を以て終始させた。遂に一級を飛びこす事にさへなつて、一番の席は貧乏ゆるぎもせず小學校を出た。更に華族女學校に入つてからも當時首席をつとけてゐた川田緑子さんと一二の席を争ひつとけた——かうした過去に自己の誇りを寸毫も傷けなかつた。私——それは今——如何なる事に直面しつゝあるか——

こはあまりつらきさだめぞかくはかり罪(一字不明)かましき我と思はず

四月十二日 雨

昨夜泊つたゆり子の處の女中やすが、いよく歸る事になつたのでせめては百合子にあつて暇乞ひをさせてやらうとそれ／＼問合せたりいろ／＼する——結局あつてもい／＼といふ事になつたので、一人でやるよりはと、咲枝、壽江子もついて行く事になつた。

兼て百合子のすきであつたお菓子やカステラ——かういふ處に無經驗なわれ／＼はいろ／＼のものを箱につめた。

スエ子の舉作がナースなので「あなたも姉さんのように成つてはいけませんよ——」かういはれたといふ事を聞いて、彼女にもそれをいひ聞けて、しみ／＼訓戒するところがあつた。

三土夫人を訪問した。折から中々大雨になつた中を漸く辿りついたが、皆さん——お子さんまで全部お留守だといふ事なので折角持つて行つたメロンの一籠を氣の利いた女中がかへしてよこした。私は下りて彼女にあひ、いろ

／＼のお禮を傳言した。玄關からかけて澤山の花弁——ほとんど數へきれないほど並んでゐるのを見て、私は往年の貧しい生活を考へた——徳岡の借家に住んでゐて、子供さんか亂暴で障子の紙が残らず破れてなかつた——あんな亂暴な借家人には閉口だ——と道三さんがこぼしきつてゐた——當年の窮乏さ——まのあたり見る豪奢な生活——先夫人の薄倖さを考へて撫然たらざるを得なかつた。

百合子がすぐ出る——といふ事を聞いて來たといふやす女のはなしはひどく私をよろこばせた。しかもそれは單に慰藉の詞であつたらしく更に私を失望させた。

四月十四日 晴

今日は○○○博士を訪問すべくその用意をする。到來の紅茶やいろ／＼なもの、一箱を持つてゆく事にした。何しろ連日の心勞で神経性に聲がかれる位敏感な自分なのだ。かうした例の通り午前七時におきられるのがふしぎな位だ。博士邸へ行つて見ると先づ夫人が出て來られた。一寸も以前と變つては見へないが、肝腎の博士は電話のまちがひで夫人で用はすむ積りで、もう一寸前に出かけられたとの事がつかりはしたが、それでは電話で聞いて見ませう——學校はお休みなのでございますから——

學者の家庭から出たゞけに更に悪氣をもたない——温良な彼女の言動はすっかり私の失望を救つた——

「すぐ入らつしやつてもい／＼と申しますから——」
かういはれて私は厚く御禮をのべながら、折からもう正午近いのを氣にしたが、ともかく行かうと暇乞ひもそこ／＼に、自動車のあるところまでいそいだ——

「奥様大變櫻のいゝのが見へます、参りませうか」かういふ江井の顔を眺めて、彼等の心境の香氣を羨やましくさへ思つた。

「歸りにしようよ」簡單にかういひつゝ私は車をかけさせた。以前は屢々往來した事のある——當時よりつと周囲は改造され、大建築物が私の視界を遮つた。——病中の一年間面目を新たにした此校舎の中には更に可驚思想上の大變化があつたのだ。

博士に、彼女の目下の境遇——刑法に觸れんとして檢束され、留置既に數日に及ぶ——を縷々説明して、弘道會に對する自己の立場と社會に對する立場——名譽——責任——等について意見をきいた。

「それはもう御心配は萬々おさつしゝます。しかし現在のありさまでは御はなしの〇〇位な事はもうザラにある事で、現にそんな事を咎めた日にはこの大學の學生の大半以上は皆その仲間で、かういふ大勢ではどうしようもありません、勿論その〇〇とするものは單に惡事と排斥すべき事ではないので——」

愕然として私は黙してしまつた。しかもこれに反抗すべき何事を私は云ひ得るだらうか——毅然として正義を主張すべくそれは餘りに私は彼女の缺陷を考へすぎた。たとへそれが妥協に近いものであつても尙私は折角頼りんとしてゐる一條のワラをさへ放擲する事が出来ようか——

四月十九日 晴

今朝はあるじも早く警視廳に取調主任中川氏を訪問すべく、九時すぎ出かける事になつた。私も亦水野氏を訪ふべく電話をかけると、夫人はまだ歸京されないが、御主人が午前中はおられるといふので一しよに出かけた。

四月二十日 晴後雨

昨夜食にバウンドケーキ(エスキモー)のをたべたのがさわつたと見へて、めづらしくおくびが出て食慾が減退した。

兼てから氣にしてゐた奥座敷の戸棚を片づける。さまざまの古着の中から、百合子が生れたばかりで北海道で自分があんではかせたかわゆい毛足袋の片つほ——あるじにはかせた手編みの靴下——曰く何々——と、彼女の檢束された今——目前に展開する彼女のかわゆかつた——いたいな——發明すぎるほど發明であつた彼女の過去のさまざま——やさしすぎるほどやさしく繊細だつたその情操——美なるものに對する彼女のすぐれた情操——それは今どこへ行つたのだ——噫、天質の美はつひに今荒廢しつくしたのか——痛ましく惨まじきに母の心は寸斷せんとしてゐる。俊造を百合子のところへやる——カステラ一箱みかん等を届ける。カステラは大きなのを

四月二十一日 晴稍寒し

昨夜水野氏の電話で、彼女の釋放はもう時日の問題のみとなつて殘されてあるのみで、何等の罪名をも附せらるゝことなく白紙のまゝ歸還し得る事を聞いて、安堵すると同時に手足もぬけるような倦怠さを覺へ、例の如くまた下痢がはじまつた。

四月二十三日 曇

昨夜はどうかして安眠を妨げられ明方近くまでねつかれなかつた。

古田中のおたかさんが不相變重さうなからだをしかも軽々と朝早くからやつて来た——

百合子の友人だといふ一婦人が尋ねて来てあつて見た——年頃は三十位かしら、特徴は著しく背聲の低く太い事だ。百合子の安否と「いつ頃出られるか」別條ないか——など、しきりに安否を氣遣つてゐる。

開成山建碑の機運がいよ／＼熟したと見へてとう／＼疏水組合が奮起して建設の事に當る様になつた。丁度今夜行で歸國する市次郎に託して事務所の懸賞に當選した數枚の圖面を持たせて、あるじの手紙を添付してやつた。中村順平氏も應募してゐる——彼のおもしろい所はかういふ時に、些細の事でも事務所のためにつくさうとする努力だ。私は彼のいかにも藝術家らしい稚氣と純粹さを愛する。

建碑の文章について、めづらしく今日はあるじもいろ／＼の書類を調べて参考にしようと、土藏やら二階やらに上下してゐたが「こりや不思議だ、丁度今月今日の日附で平田伯が碑文に署名を承諾の御返事が出た——ふしぎだなあ」と、よみながらいふ。

「それはほんとうに幸先がいゝ——」かつぎやでない私も思はずかういつた。

四月廿四日 雨冷

昨夜から降つた雨は今日もやまない。陰鬱な空を眺めて私は幽居する彼女と病臥する彼——の二人の上に心を憐れまきすにゐられない——しかし、こんな日には彼女もどんなにか鬱陶しく陰氣に暮さねばならぬだらう——かう思ふと私の心も闇に、頭がぐらく／＼するように思はれる——何心なく私はすぐ彼女に會ふための用意をしようと思ふと同時に、聞いて見なければ會へるかどうか分らないのだ——かう氣がつくと私の目の前には眞黒い戸が閉ぢ

られたような氣持ちがしてそのまゝ座つてしまつた。あゝさうなのか？ 母が我子に逢ひに行く——それを聞かなければならぬのか——何といふ氣持ちだらう？ 不取敢横田氏に電話をかけて頼んだ。彼は例の何處となく重々しいやうな、勿體ぶるやうな口調で、すぐ聞いて見るといふ事だつた。程なく彼から返事があつて、それには差支へがないから、午後二時から三時までの間で——との事ではつと一息ついた。丁寧に禮をのべて電話を切ると共に彼女のためいろ／＼のものを用意した。——關さんもつれて三人づれ、國男ももう以前行つたので様子もしてゐるし、階段の上下に足元が危いので今日も一しよだ——前以て横田氏を通じておいたのですぐ當番の役人が心得て自分の部屋へ通してくれた。

「あすこに来てゐますよ」かういつて彼が指す隣室からすぐそこにもう彼女はあつた。——不相變血色もよく、元氣さうにこ／＼しながら

「どうしてこの降るのに来たの？」

「あたしは降るから来たの、さぞ百合ちゃんクサク／＼して退屈してゐるかと思つて——」
さすがに彼女の感情も動いたらしかつた。

四月廿七日 曇

咲枝を百合子のところへやつて見る。百合子からもいろ／＼頼みものをし、又様子もかなり知れた事は嬉しかつた。「駒込の家をたゞんでしまふといふ事を聞いたが、おかあさまにそれはあんまりひどい、是非あのみ／＼おいて、——」どいつたとの事だ。誰がそんな事を彼女につけたか——彼女の今の心境はなるべく平和にあらせたいのが私

の願ひだ、それなのに——關でもよけいな事をしやべつたか。

五月一日 晴 暖

今日はどうしても彼女にあつて、今までのやうな妥協的な態度でないはつきりした信念のもとに彼女を訪ねようと、昨夜から覺悟してゐた。——今日は殊更生温い風に汗ばむ位なのに、彼女は大好きな入浴さへ出來ずにゐる、かう考へたゞけでも目の中はうるむ。

五月二日 晴

T氏が來た。百合子にあつた事について報告がてら來たのだが、その話の要點は「中々自分如き者のお齒の立たないほど堅固な決心と信念を持つてゐられる——なるほどかういふ信念あつてこそかく女流として傑出もしてゐるのだ——私はとても私の及ぶところでない事をして恥かしく思つた——」といふ様な事をいつた。

私がかういふ事を話す時、彼の態度のいかにも眞實で、感動させられた

百合子の事件を頼むため更に水野夫人を訪問した。兼て頼まれてゐた慈善會の切符も四枚買つた。夫人は、なか／＼世間的には私よりはるか如才なく聰明だつた。

野上彌生さんを訪問しようと思つて電話をかけると、先方から來たいとの事だ。「午後五時から約束がございますが、四時から一時間のひまが御座いますから參上いたします」取次がかういつた。成程あの人は不相變かしこい。かういつて一時間の話しを限定した事は流石だと思つた。

「私が伺つたのは、百合ちゃんが是から筆を捨てるか、主義を捨てるかの確實な考へをしりたいと思つたので」來たな！ と私は思つた。かねてから私もこの事についてタンカを切りたい質義を持つてゐたのだ。夜になり氣ばらしにと國男の運轉で上野公園をドライブする。あるじはめづらしく留守番してゐる。

五月九日 曇

五月雨もよひとでもいふやうに毎日々やな日がつゞく——今日も又その通り今にも泣き出しさうな天気だ——噓全くそれは空ばかりではない——泣いてすむ事だらうか——怒つてすむ事だらうか。骨を刺すやうな苦惱が身も心も刻む。しかし、常に考へる通り全く人間は適應性に富んでゐる——こんな苦惱の中心にあつて慣れたとでもいへようか、追々其當時よりも彼女に對する憂慮も薄らひで、おかしい事には笑顔さへ示すやうになつた。

「オヤ」自分で驚くやうな笑聲さへ立てられるのだ——しかしこれもよく考へて見ると彼女が割合優遇され、氣榮に目を暮してゐる事がはつきりわかつたためだともいへよう。もしさもなく彼女が外の人々のやうに鞭られたり、迫害されたりしてゐたら私の心もどんなにか惱みぬくだらう——私は専門家に聞けば、かく彼女を抑留する事がいかに違法であつても希くばこのまゝ、彼等の厚意に背かせたくない。そして一日も早く釋放せられるのばかり願はしいのだ——噓、在天の神、私をしてかく健全ならしめた如く、彼女の上に幸ひあらしめ給へ、それはかく復活した私の上に更に健康をますものでなくてはならない。譬へ生前には主義主張を異にした姉弟であつても、どうか廣大無邊の慈悲心によつて彼女をして正しさに歸らしめるやうに——

五月十二日 雨 暖

此頃はめつたに百合子にも會ふ事が出来なくなつた。せめてはと思つて歌などもかいておくるが一向に返事もない——激情に燃える様な彼女には、遠く去つた夫の事のみが今心の總てを領しつくして何を考へる餘裕もないのだらう——何といふ家庭に恵まれない彼女だらう——私はかう考へたゞけでも一面に於て薄倅とも云ひ得る彼女の運命を考へていたまじさにかき抱きたいような氣持ちにさへなるのだ。此頃になりや、警戒を嚴にしたようにさへ思はれる。

あいにくの雨天なのでふだん着の上に雨外套を着て、江井さへ今日は電話の遅延した爲來ないので闕男に操縦させて出かける。みち／＼考へる事はどうかして彼女に私の親心の切ない事、彼女に代つてもやりたい切ない親心——そしてどうかしておだやかな——彼女の天質のやさしさを取戻したい——それにはあゝもいはう、かうも——

かう思ひ悩みながら逢つた彼女はやはり又その硬直さでひどく私をまごつかせた。宿直部屋か何かの一室——片すみに汚ないテーブルが置いてあるぎり、疊はもうすつかり切れて座るのも氣味のわるいよう、薄茶色に汚れてゐる。眞中に申わけばかりのテーブルが置いてある——敷物もないそこに私は座つた——彼女はもうとくから來てゐたのだ。外觀はいかにも明るく、事もなげにふるまつてゐる彼女に對して私はたゞ涙ぐんだ。しかも彼女は何等願慮するところもないように、かなり高聲にいろ／＼の事を話した。室外には若い男が監視してゐる。しかし今日のはほんの申わけばかりとでもいふ風な温和な容子で丁寧だつた。普通なら久しぶりに相逢ふ母と子——手をとり合つてもよろこび且悲しみたひのに彼女は不相變硬直して私に何も聞かせなかつた。兼てから私のもつてゐた疑問は更に頭をもたげた——彼女は幾分精神に異状を來したのではないか——痛まじさに私は彼女に代つて獄裡の人たる

をも辭すまいと思つた——しかもかく相對して感ずるものは何だ——あまりに冷やかな彼女の言動だ——しかもその底に流るゝ熱を感じ得ないではゐられないのだ——

五月十四日 曇

今日はとう／＼あるじに百合子とあひ——折角皆さんの厚意に對し、素直に——もうこれから決して致しません（以下空白）

五月十六日 曇 稍冷

昨日の大變事のため（首相射撃）皆おそくまでラヂオを聴取した。そのためやはり私は疲労して眩暈を感じ、例の通り心悸亢進を感じた。

五月二十一日 晴 暖

空は晴れたが又風だ。もうこれで幾日吹きつゞく風だらう——政界の雲行暗澹たるものゝ如く天界も又騒がしい——ほんとうに大動亂を極めたこの頃の政界は實に開闢以來の大變事がしきりに突發して人々の心膽を寒からしめるものがある。何しろ我等の家庭の中から百合子が出て、今尙幽居しつゝゐる位だもの——思想界の大革命——今やそれも實行にうつらんとしてゐる——おそろしい時期だ。

かうしてゐてさへ尙汗ばむ額をおさへて又しても私の心は彼女の陰鬱な部屋にとぶ——

「あやまれ出してやる——もうこれから決してしませんといふ一札を入れれば——」

この壓倒的命令に屈辱を感じるのが彼女だその根底的主義に共鳴し得ない我子に對しても尙母としての慈愛と保護をなさねばならないのだ。噫人生——はかくまで忍苦の道程でなければならぬのか——

百合子の爲に近づき易いのはTだ——そこで更に彼とあつていろく彼女のため最善を計らうとするのだ。いつでも時間通りに來ないのが習慣になつてゐる彼は、今日も亦十一時といふのを三十分も過ぎてやつて來た。後女の事をはなして話題がいよ／＼本論に入ると、意外にも彼は「私もそりやあ百合子さんには同感なのだ。それですから私はたゞ御両親の御心を察して一日も早く出して上げたいと思ふのみで、主義に對してはあくまで強硬に自己を主張されるのに敬意を表しこそすれ反對は出來ないのです」

かういふ彼の詞は明らかに紅を帯びてゐるのだ。この人まで！流石の私も意外の詞を耳にして啞然たらざるを得なかつた。恐るべき人心の變動——聰明な西村の父上もこゝまでの大變を豫知されたらうか——噫。かうして話はめづらしく打ちとけて、彼の眞面目が遺憾なく私の心に映じた。

Tが歸るとすぐ私は木下夫人を訪問すべく葡萄酒三本入をもつて出かけた。途中弘道會に立ちよつて金二百五十圓の寄附金と心血を注いだ、弘道館新築の祝文を——長歌を鳥の子全紙に書いたのをもつて行つた。

五月三十日（國府津にて）

青々と一目果てなき稻の波に夕日茜さして今入らんとす。

あたらこゝも都ひたりな赤き瓦青き柱と色異にして

六月一日

ひろ子の死の前に

秋の來てほろ／＼と散る花に似て清く淋しく逝けるひろ子かな

あまりにも／＼むごきこの人のさだめ思へば涙しと／＼なり。

時しもあれ五月雨るゝ空は今朝も亦空暗くして雲軒にかゝる。

六月三日 雨

拂曉からの豪雨は夜が明けると共にやゝ小降りになつた。

郡山へたつたあるじの動靜はかなり私の心にかゝつてゐた。夕方あるじから電報があつて、五十名の組員招待を終つた——といふしらせがあつた。此の不況時代は大した盛宴だつたらう。

六月四日 雨

今朝午前兼ての約によりN氏を警視廳に訪問した。何しろまだ足もとが不十分なので、他人に手をかける事はいやだつたので國男を同行せしめた。兼てから一度は是非面接しやうと思つてゐたが、どうもうまく時日が打合はなかつた。處が今朝、午前中ならばといふ先方のしらせなので、生憎あるじは出張不在中ではあつたが氏を觀察するためには却つてこれもいゝ機會かとも思ひ、案内役をT氏に頼んだ。

我一生の中にかゝる處に我子を見やうとは思ひがけない事であつた。ましてそれが一々ゆるしを得なければ容易

にあへない——何といふ事だらう——此間の事變後警戒を益々嚴にしたことには、物々しい警戒が今も尙續いてゐた。エレベーターで上つたのは三階らしかつた。

N氏がその應接室に入つて來ても私は私の期待した如き年配でもなく、又更に陰險さもない一ヶ瘦身にしてしかも些の奸キツさのない——極質素な服装の其人を見た時、私はホツとした氣がせざるを得なかつた。それは全く豫期に反して眞面目らしい、しかも最も私を安堵せしめたのはその眞摯な面ざし、一味純情の輝きさへ見へる面貌だつた——

六月五日 雨

梅雨の名に背かずとう／＼雨が又ふり出した。陰氣な空だ——かう思ふともうそこには幽閉された彼女の面影が浮ぶ——しかし私は彼女のもつ思想が絶對皇室中心主義に向つて叛旗を翻すもの——ましてそれは猶太人の世界に向つての報復の意味に於ての苦肉の策である——といふさま／＼の例證を實見された——と云ふ事を聞いて私は彼女らの夢想する理想境——それは全く野獸化せんとするものである事を聞いて、全世界人を欺瞞し、蹂躪し去らんとする彼らの企圖に驚きて憤りを感じないではゐられない——全身全靈乃至は全家族をさへ一蹴して主義のために盡瘁せんとする彼及彼女ら——それは實に純白玉の如き理想の下にまい進しつゝ、扱その最後に獲得せる至寶——それは玉の如くしてしかも掴む手に露と化したのみが最後に其核たるや彼ら及彼女らの掌をさして遂に死に導くべく毒蟲の恐ろしきものを含有する——悟らずや彼及彼女ら——しかもこの恐怖を先覺しつゝ尙その手を堅くして此毒素に觸れんとするを目撃しつゝ止め得ざる我ら母——噫そは實に煉獄の苦しみより更に／＼苦しく、辛き體驗なら

すや——

六月十四日 陰晴不定

國男が夕方やつて來た。大變おだやかな舉止はひどく私をよろこばした。百合子に關するいろ／＼の用件を頼む事にして泊つた。その第一用件は、百合子は到底病氣になぞなれないらしいから、是は一つお母さんの病氣が重い——といふ事にして出してしまふ、勿論本人の同意を得て——といふ事だ。私はこれにたゞ喜んでゐられない氣がして水野氏にその可否をたづね、虚置しやうと思つた。——私は頃日来しきりに百合子のもつ思想について考へつゞけてゐる——

六月十六日 雨

流石は梅雨期だ。あんなに明るく見へた空は又曇つてしと／＼と春雨がふつてゐる——建碑の成立に活氣づいたあるじは例になく穩やかな言動であつた事が何よりよろこばしい、全く今度の百合子の出來事は我家に於ける一大事でなければならぬ——恐しい——苦しい——こんな詞で形容出來やうか——この苦惱のドン底から僅かに光明を認め得るものはこの建碑問題でなければならぬ。しかもこの意外の事態の進捗と成功を目前に見るやうな皆の意氣ごみはどうだ——これが奇蹟でなくて何だらうか——蕭然として私は涙さへさしぐみつゝ——

午後七時過あるじは歸つて來た。半分食事をすませたといつて——話は例の友成問題と此間中から百合子がこのお醫者に頼みたいといつてゐる——その人物について容子を探究すべくあるじ自身その本人を訪ねたさうだ。處が

今度の百合子さんの事件は樞密院が關係してゐても彈壓を加へてしまへといふ事でこんな事になつたんだ。しかしもう程なく出られるでせう、なまじひ此際そんなお醫者に頼むのは不得策です。何しろ百合子さんの頼みたいといふ醫者は左傾の爲共產黨に連座して死刑に成つた人の親戚ですから——慄然として私は此はなしを聞いた。そして此醫者がいかにもはやらぬ醫者らしく、中々聰明に見へるが——その不況の際尙彼女のためを思つて診療を肯じない處にある善良さを認めずにはゐられなかつた。

尙あるじは水野邸に行き彼の所望の歌留多を贈呈し、友成のいふ、母が病氣になつて釋放される——といふ事についてその意見を聞いた。ところが主人は丁度何處かへ出立するといふ處で來客が來てゐる、夫人が面會して、「そんな事は主人に相談するまでの事はない——折角お母さんが今まで一點のやましい處がないのにそんな偽りをいふ事はおかしい事だ。あくまで清淨潔白のまゝを通した方が立派だ」といふ事で自分も勿論それがいゝと思つて歸つて來たといふ事だ。私はかういふ一大事の時折角在宅されてゐる主人に一寸でもあはせてくれ、ばい、のに、と思つた。

山岡女史より新島六之助氏重態の報あり。依孫一氏はほんとうに(不明)とちがひ眞面目に心配してくれられる事が何より有りがたい。今日もあるじ御禮に邸へ行くといろいろ親切に配慮されてゐる様子が分つて、他の物質的なに比してある尊さをさへ感ぜざるを得ない——素朴な生活は眞個に國士の風ありとさへ思はれた——

六月二十五日 晴

どうやら晴れたがまたつゆつほい天氣だ。

この頃のあるじはいろ／＼の方面に多忙を極めるためかいよく忘れつほくいよくせわしい——しかもその中に没頭しておのれを省みる餘裕のない事がひどく、私の心を焦燥に追ひ込ませる——必竟は彼女の問題が當面のわれらの難問題なのだ。しかも、うほとんど解決が付かうとしてひつかかつてゐる——本人が主義を變じない——といふ事なのだ——噫蝕ばまれたる彼女の主義——觀念よ——どうせ命を賭してかゝるものであるならどうしてもつと／＼光輝あるものに全心全靈を傾倒しないのか——

六月二十六日 晴

昨夜は久しぶりで親子兄弟珍らしく一室に寝やうと二階の二間を開放してにぎやかにねた——何といふ感じが私の胸の中を領しつくした事だらう——私の傍にねた百合子も流石にねつかれないらしく幾度も／＼ねかへりした。身じろぎの音をほのかに耳にしつゝ、とう／＼私の方が一足先にねついたらと見へて目の覺めたのがもう欄間に曉の光りがほの白くなつた頃だつた。私が起きるとすぐ皆もおきた。ねる時からいひたいと思つた事がすぐ私の頭にいはになつてとう／＼いはすにゐられなくなつた。

六月二十七日 晴後曇

今日は快晴に更まれた日だ。

百合子はいろ／＼のあとかたづけの用事のため昨夜もおそくまで一人でおきてゐた。

「さあ、もうこれでやつと大體すんだ」

かういつて嬉しさうに書類を片づけるのを見て安心した私は連日の苦勞が一度に片づいた嬉しさにホツとなつてもう座にもたへられないやうにグタク／＼になつてしまつた。かうして百合子も機嫌よく入浴したり、いろ／＼してねこんだまゝ快く昨夜はすんだが、扱今朝は又何といふ意外の騒擾が私を苦しめた事だらう——何しろ朝からもう——以下餘白

七月三日

父のみの父の御靈もうへなはん汝が力には及び難しと
不肖の子父の名によりいたすらに其席をのみ充たすべきやは
神いませはみそなはずらんよし江にはあまりに重く大なる苦しみと
いつしかに涙は落ちて目の前に慈眼また／＼心地さへする
母よ今そ此時にこそ我いひし死後の力を汝が胸に生かせ

七月十日 曇

大下未亡人が不相變シヤキ／＼した態度でやつて來た。聞くところによるとこの夫人の實弟がやはり主義者の一人で獄に下り、更に情死さわざまでしたとの事、宮といふ方でその後更に佛門に入り大著述を近々完成するとの事だつた——やはり天才的人らしい。大下夫人は絶対に家の出入を禁じ、嚴重な制裁を加へたとの事だつた。考へられる事だ。

夕飯前百合子がやつて來た。不相變香氣さうに、何處を風が吹く——といふ風、案じるものは本人より親たちばかり——

今日は百合子の家へ行き必要はなしをすべく試みた。しかもそれはつひに果されず、途中から引かへしたら表門を出て少し行つた處で私はもう何といつても歩けなくなつた。

ほんとうに夕立の雨が降つた。今夜のは本當にそれらしく涼味が快く、今日の暑熱を洗つた。

七月十五日 雨

又入梅が來たやうにやたら雨がふる——今日も又例によつてその通り——土藏の窓を明けては又閉める——何といふうつとうしい事だらう。しかしもう盆も數日になつたので、そんな事をいつてゐられない。

昨日から百合子の姿が見へない。まづ彼女の親友窪川さんの處へとは思ふが心にかゝる——

七月十七日 雨

百合子の事件——それはまだはつきり私の心から取りさられないのだ。

周圍の形勢たゞならず心をいためてゐる處へ夜に入り百合子が突然入つて來た。大變興奮したやうな面ざしで、「もう／＼おかあさまには何にも話さない——あゝさうか——身命を賭しても尙救はんとするもの、母をおいて他にあらうか、いたましましきものよ——彼女の純情は遂に他の乗ずる處となつていかに多くの苦惱をうけつゝあるか——あゝ。」

七月十八日 雨

又今日も雨だ。しとくと軒につたふ玉水の音——かう故人もいつたその——五月雨もとうにすんだ筈なのに又これではお百姓がさぞ困るだらう。

龍太郎が来た。大變いゝ様子だ。落つきが出来、目つきもおちつき、ほんとうに復活の曙光が彼の面貌を明るくした。

「ほんとうに今度からは機嫌をよくしてあつて下さい」

物慾を超越した彼のこの詞はとうとう私を涙ぐましくさへした。三十圓の金を與へて彼が更生の爲準備のたしなへに與へた。——あゝどうかこれで文字通りの更生をせしめたい。

七月十九日 晴

今日は廣子の七七日の法要が麟祥院にある日だ。蕪悖そのものゝやうな生涯を終つた彼女の事を考へると、どうしても列席しないではゐられない氣持ちになつて、むりにもその時に間にあふやうにと努力した。私一人では又不便もあるので咲枝をつれて行つた。

七月二十四日 晴

めづらしくからりと晴れた空は、あついながらすがくしい。

K氏夫妻、T氏夫妻を錦水に招いた。彼女の件に付心配して貰つた禮心だ。しかも席上最も私を驚かしたものは

K氏も亦その賛成者であつて、かの——以下餘白——

七月二十五日 晴 83

朝からあつ——きつと九十度だと思つて見ると此温度だ。東京はしかしきつともう九十度以上を起してゐるのだらう——

昨夜から考へてゐる事だが、壽江子が東京にゐる事は決して彼女自身のためではないのだ。しかし又百合子のためを思ふと唯一人の妹——その味方を離す事は忍びないやうな氣持ちがして、つひいひ出しかねる様なのも、一面にいへば姑息の愛ともいへようが、さりとていかにせば彼女から壽江子を引離し得ようか——あゝ。

八月一日 晴 稍涼

今朝はどこか雨でも降つたか曉方から涼を感じる——爽やかなこの風の色にめづらしく背中もぬれてゐない。

今日はあるじは事務所を休んでこゝに泊つてゐる。めづらしい休みに休養をする様にと希つてゐるが、今日ばかりは全くめづらしく文字通り寝たり起きたりの有様だ。私も今日はゆつくり此處で休息しやうと思つてゐたが、考へると丁度英男の御命日に當るので、例の通りろくにかまはないであらう彼等の事を考へると、とてもちつとしてゐられないやうな氣になりて、とうとう午後七時頃の汽車で上京するに事に決意した。

夕汽車は案外すいてゐる、又涼風に送られて行くので氣持ちがいい。東京へ着くとめづらしく國男が迎へに出てゐた。久しぶりにあふ彼は非常に機嫌がよかつた。日本服の俗衣がけのまゝ青山に行つた。瀬戸女は驛前から別に

林町へ直ちに歸つた。青山は今日晝間咲枝と壽江子が行つてもうお掃除もし、花も供へたといふので直ちに墓前に禮拜する事が出来た。何しろ今日は闇夜で眞暗、懐中電燈でやつと道を照すのだつた。噫感無量！

今夜は久しぶりで壽江子と一しよに二階に寝る。流石に我子だ。いろ／＼細やかに話したりする——特に此頃彼女は學校の音楽教師の紹介で大きな／＼アコーディオンを父から買つて貰ひ、夢中に修業中だといつてその大きな樂器を見せた。なるほど私にとつては初めてのもので、中々精巧を極め、「これをすつかり覺へると自分の職業として立派に暮して行けるの、それでお父さまに相談して買つたの。」

八月五日 晴 暴風雨

俗に土用浪ともいふ——此頃のさう／＼しさ。特に昨今は烈しい。

お隣りの佐藤さんもゐられると見へしきりに水を打つ音がする——

私の健康もどういふのかこつちへ来てからむやみに眠い——足の先の麻痺もまだとれない。こわばつて動かないやうにさへ感ずる——自分独自のマツサージをやると一寸の間はいゝ工合になるが、これは一つ本式にやつて見なければなるまいと考へる。

今日はめづらしく亞米利加に於けるオリンピック競技の放送が明白に聞へる。走り高跳で——跳んだ／＼實に十五米七二、といふ新記録をつつた——大變な高跳なのだ——しかし東洋流に育てられた私にはその速度——高度がいかなるものであるか分らない——従つて感激も幾分減殺されるのは遺憾のだが、しかし大洋の浪をこへてまざ／＼と聞へる南部君の聲——群集のどよめき、いつか涙は眼頭を壓したのだ——あゝ勝つた／＼——かくして生

類争闘の本能的慾求からこの競技に克ち得た南部君——その將來や如何に——

八月六日 快晴 85

今曉一寸小雨がふつてから殊に氣温が低下した。

彼女の事が又盛んに私の頭に往來する——改造にかいた小品を更によく讀ませて見ると決して平穩な文字ではない——挑戦的な感じさへする——どうしてかういふつまらない言動を敢てするのか。恐らくそれは彼宮本に對する聲とほか思はれない——

私は彼女の事を考へると、どうしても上京の必要を感じずにはゐられなくなつた。それで、急に思ひ立つて午後七時着の汽車に乗るべくあはたゞしく仕度をした。

早めの夕飯に用意をとゝのへて、夜に入り東京へつく。めづらしく百合子が出迎へてゐる。白地の絹に赤い裝飾をつけた洋装はいつもとちがつてかなり彼女を若々しく、又久しぶりに和らぎを見せた。けれど不相變落ち付かない言動と、何か一寸した私の詞が氣に入らなかつたと見へ、やさしげに手をつないでゐた私の手をふりはなした。考へて見ると總ては充されない愛情が彼女を兇暴にするのだと思ふと憎む事は出来ない——けれど彼女は明らかに私に好意と憎惡の混同した擧作をしつゝある事は私の心にも亦一種の昏迷さを感じずにはゐられない——私は彼女が〇〇した當時の事を聞くべく遂に口外し得なかつた程私も昏迷を感じた。

八月八日 曇 又晴

やつとの思ひで會つた百合子——それからかういふ詞を聞かうと誰が思ひがけようか。全く暴言とも何とも、私は彼女の頭腦の健否を疑ふのだつた——考へると彼女も又薄倖な人だ——憎悪し切るにはあまりに恵まれざる彼女の結婚生活を考へて、私は一時の激怒からさめると親らしい涙が私の心境を壓する——しかし彼女は公然と私を、「敵と見る」——かうさへ云ひ切るのだ。「おかあさまは大義親を滅すといふ氣持ちだらうとか、或は又ほんとうに油断も何も出来やしない、あぶなくてくしかたがない、とか。更に甚だしいのに至つては「親だつて敵と見る外ない」と云ふ詞が興奮し切つた彼女の唇から、當然であるかの如く迸り出る——あゝ、此口から嘗ては人道的に進展すべくいかなる困難にもたへ、光輝ある道を目標として進まふ——かう云ひつゝ母子相擁して潔らかな涙に浸つた一夜さへあつたのだ——その口、その唇から今かゝる恐るべき背人道的の詞を聞く——あゝ涙、涙——いかなる涙も彼女の心を洗ふべき一滴となり得ようか——

八月十一日 暴風 小雨

國府津にて

何故に生き得しわれそと思ふ時たゞ一瞬の時さへおしき

おしみつゝも身の苦しさに今日もまた山の端赤く日は入らんとす。

ねむらんと薬をのめどくまぶたはかたく涙さへにじむ

八月二十三日 不定

日和ぐせになつた空は又今日もはつきりしない。今日はいよく安積行を斷行する爲昨夜の睡眠は十分取らうと努力した。しかも亦いろくの故障で思ふ様にならなかつたので、病後初めてのこのかなりの長い旅行にさわりがなければよいがと、心中に氣遣はれる。しかし口外する事は、壽江子等にも不安な感じを抱かせる事になるので、たゞさりげなくふるまつた。ところが生憎にも駒込署の千葉氏が二人の下役と共にやつて來た。生憎だな、と心中には思つたが、しかし私の留守中よりはむしろいゝと觀念して西洋間で會つて見た。不相變中々しやれた風をして若い二人も見覚えのある面貌だつた。一體何しにこんな二人まで引率して來たのだらうか。注意しなくては——と私の心が騒いだ。私は至極平易に、冷靜に、しかも親しげに彼等と應接した。あるじが先に出た。いろく接待の用意を命じて後、私が出た。これまでにない程親切らしく、且同情ありげの千葉氏の言動は、かなり私にある安らかさを與へた。要點はあの「働く婦人」といふ雑誌に、百合子さんが是からも尙以前に倍して働かうといふ詞——これからモリくやる——といふ風なのはどうもあまり感心出来ない。出るとすぐ發禁々々では仕方がありますまい。何とか一つおだやかな——あの方の天分を發揮する様な方法はないものか、勿論さう急に離れるといふ事は出來まいが——と云ふ風に話はすゝめられた。私は彼女があれだけの聲望をかち得てゐながら、尙この偏した信仰に邁進する事がいかに痛ましく、忍びがたい事を話した。

午後二時過の急行で立つた。關千秋氏、壽江子、俊造、江井も送りに來てゐた。國府津ではあんなに涼しかったのに——かう云つて愚知をこぼすほど今日は暑い——チカくした陽光が目を射、襟元をやいた。しかし、以前のやうに眩しさに涙をこぼす程ではなかつた。

車中にて

このベンのいかなる汽車のゆるぎにもゆるかぬをわれ自ら驚きぬ。
シベリアの長き旅路にならひたるベンの運びの今もゆかまぬ。

八月二十六日 雨

今朝は早く碑石が着く筈だとの事で、國男を初め關君、市次郎など早くから待つてゐる。國男も六時におきてめづらしく寫眞器持参でそれ／＼準備にかゝつてゐる。しかし九時になり、十時になつても着かない。東京へ電話で——といったが、途中の故障は分りやうもないなど、云つて、とう／＼この日記をかく午後二時まで着かない。久しく來なかつた此家の樹木はもうのび放題のびて、ほんとうに秋の野良に成りはてしまつた。今度の建碑式で或は大久保侯御夫婦其他の多勢來客がある事を考へて、早速市次郎に命じ庭木の手入れをさせる事にした。宮川といふ植木屋、カン太といふ植木屋も、一は失脚して轉業して東京行、一は既に死亡してゐない。無據その一番弟子ともいふか是まで手入れになど來た事のある男を頼んで見る事にした。三人で早朝から來たが、午後二時頃から無暗に大降りになつた。

東京からの書信、咲枝からの手紙、あるじからはがきとレターペーパー二冊、人蔘錠もついた。私が碑石不着の事で騒ぎ立てると皆が不安にかられると思つて落ちついてはゐるが、さてかうなるとちつとしてもゐられない。とう／＼東京から問合せの電報が來た。あるじからだ。定めしあのだゞさへ性急な人がどんなにかいら／＼して——と思つたが、まだ着かぬかといふ電報に偽りもない。無據まだつかないあいさつをした。すると間もなく、忠一や關氏市次郎等を先頭に、ついた、ついた、と吉報をつたへる。すぐ又東京へその吉報を電報

で——忽然として今迄沈滞した空氣を揺がして盛んなかけ聲が聞へる。——オヤ、この降るのに仕事をやつてゐるのかな——

「全くたまげてしまいました。あんな大きな／＼石をどうして扱ふかと思つてゐると、何の雜作なくスイツと立つてしまつて、何の事はない、丸で木か何かのようで——」

かうしてさしもの大石も難なく据へられたとの事、全く／＼大安心した。そこでとにかく大骨を折らせた連中に何等か心ばかりの祝ひをしてやりたいと思つて、關氏や何かと相談の上金二十圓を持たせて現場へやつた。源平に宿をとつてゐるさうだ——丁度行くと皆一休みして是からといふところだつたのだ、大喜びだつたとの事であつた。それから引つゞいていつもの夜のお客來だつた。

銀行利子引下げの報が來た。

八月二十八日 曇

東京からはがきが來たが一々かくのをはぶく。——とにかく壽江子が近日來るといふ事だつた。

鈴木のごけさんが三郎のよめと一しよに來た。久しぶりにあつた彼女は以前よりは肉もつき、しつかりしてゐるが、實子のない後家さんとなつた／＼めか愛嬌がなくなり、何處となく粗野にさへ感ずるようになった。鈴木氏が存命中は幾分甘へる氣味が多かつたのだらう——中々物やさしく行儀よく見へたが——人は境遇によつていろ／＼の變化をその心境に持ち來すものと見へる——鈴木三郎といへばサブチャン／＼といつて此邊ではしらないものゝない位利口で啞の男——見た處もこの邊の百姓とちがひ色白の細面、金縁眼鏡などかけた處は誰が啞などゝは思ひ

がけようか。今は女子一人の父にまでなつて何もかも世話をやいて愛してゐるといふ——女房は、これも少し人並でない智能の持主だが、母となるとひどいもので一人前に近くなつてゐる。水瓜の大きいのもつてたづねて来たのだ。

今日は疏水の管理者が来られるとの事、何でもこの人は月に一回か二回福島から出張するので中々あひがたい人だとの事。宮本氏が同行するといふので急に身仕度をして一しよに自働車で行く。いつもの室に通され、初めてその管理者にあつた。意外にも此人はまだ壯年の人だつた。そして、尙意外とするところは非常に頭腦の新しい、明快な、しかも現代式でない——剛骨さをも持つやり手らしい人だつた。福島縣地方課長、官房主事兼秘書課長、地方事務官の官職をもつ——引田重夫氏——何しろ見たところまた四十にもならなく見へる人——中々如才もなく、思想的にもかなり考へてゐる人らしく見へた。

九月五日 晴又曇

いよ／＼秋風らしいざわめきが落葉をちらしてゐる——今日は一週間ばかり滞在してゐた縁郎さんが歸るといふので枝豆だの唐もろこしだの、田舎みやげを持たしてやらうとそれ／＼その用意をさせる。本人は東京人のくせで荷物の嵩むのは難有迷惑らしいが素手では歸せない——なるべく小さくと枝豆ももいで豆ばかりにし、とうもろこしも上皮を皆削いでしまふ

九月六日 雨後曇

今日も亦道路工事に三人が来た。砂利も運ばれた。

あるじからはがき二枚、一枚は北村西望氏の彫刻出来上るに間もないといふ事、一枚には共同火災落成式、銀製小花瓶の贈り物を貰つた等々、尙明七日午前九時三十分あるじ着の報があつた。咲枝からはがきで——

九月七日 曇

今夕はいよ／＼着くといふので關さん、宮本氏などが見へる——めづらしくもお出むかへをしたいと思つて、それには少し早目に家を出て少し散歩でもしようと思つて早目に自働車を命じる。市次郎、正一、三郎までが来る。

久しぶりであつたあるじは大變いつもより落ちついて見へた。健康がいゝのだらう——何よりだと思つた。汽車中で何とかいふ人の夫人が常盤會々員で私の旅日記をよんでゐたとの事だつた。同時に百合子の話も出たとの事、その娘さんの小さいのが大變恰憫でかわゆかつたとの事。

ともかく久しぶりの父親を迎へた我家は、流石に賑やかに楽しく寝についた。

九月八日 曇後雨

雨の降る秋の朝は冷やかだ。朝からあるじはいろ／＼建碑のための寄附金等に忙しい。そのため早朝宮本氏を訪問するやら、開成山太神宮境内の建碑現場を見るやらして、植木屋にもあひ打合せをする。

おけさがぼた餅をもつて来る

植木屋が碑側へ植へる植木の相談に来たりする。

九月十一日 小雨

昨夕にんにく多量だつた爲か下痢はげしく今日歸京のつもりだつたが覺えないような氣がした。しかしいゝあんなばいに昨夜一回も上厠しなかつたので安眠を得られて、これなら或は歸京も不可能ではあるまいとそろ／＼荷物の用意などをしてゐるところへ電報が来て、「ユリコのコトニツキシウオカヘリヲマツ」といふ電報が来た。さあ、又とう／＼やられたか——これまでの私ならすぐ早がねのように波打つであらう私の胸は、あまりに／＼はげしい苦惱の道程をへて氷のやうな冷やかさがこんな時にでも尙、私に己れを失ふような熱を起させなくなつた——是非か——たとへそれが非なりとしても生きぬくべき人間にとつては是も亦やむを得ない事であらう——午後三時頃の準急で立つ事に返電してからのこの家は又更に多忙を極めた。外界の多忙——それはしれたものだつた——須賀氏が寫眞屋をつれて来た。生憎あるしが不在だといふとすぐ又出かけて行つた。あとで聞くと墓所と出磬山をうつしたとの事だつた——かうしてゐる中例のおけさの連中がやつて来た。晝飯を食べるやら食べさせるで一しきり喧燥を極めた。

秋雨蕭々の文字通りよく降りつゞく雨だ——胸にあまる憂ひをのせて定刻に東京驛に着いた私は、出迎への關君の顔を見るとすぐ彼女の様子が聞きたかつた。けれど人目も多し、すきをねらつてゐたがやがて近づく彼の顔を見ると一寸の間にその事を聞いた。しかし彼は「御心配になるだらうと心配してゐましたが別に大した事はありませぬ」簡單にかういふ彼の詞に疑ひを挟まなかつた。

「あゝよかつた」

最初に彼女が留置された駒込署はその所管内でもあり、又署長が非常に寛容に規定を絶して好遇をさへ敢てして

くれたのだつた。彼女も亦その好意をよろこんで大分温和に導かれて行つた。しかも不幸にして彼宮本の事あるに及んでは狂的とも思はれるまで反抗的な言動をさへ敢てするようになったのだ。いたましいのは彼女の結婚生活の破局であり又今度の如き結婚の成立だ。いづれにしても母としてはたへがたくいたましい事のきわみだ——昨日咲枝は彼女を留置所になづねた。最初は澁谷署だとの事でそつちへ行つたが、上富士の方へ轉じたとの事で更に又そこへ行つたさうだ。

山崎氏より電話、百合子の事につき、いろ／＼心配せらるゝ旨の話があり、且明日は土方伯のためにも警視廳總監に面談の次手もあり、かた／＼お嬢さんの事もしらべるといふ事なので、宅の自動車を使用せらるゝようにと電話を切つた。

九月十七日 雨

今日は例の友成氏が昨夜のあるじの訪問に對して今日は非警視廳に同行、彼女の健康に對し十分の注意を拂はしたい旨をのべた。

「私たちはもうお願ひする顔はない、たゞ彼女が病氣をもつてゐるのでその用心だけのお願ひをするのだ」といつた——

かうしてあとのかゝりの人二人にあつたが、とんだよさ相な人に見へたが何だか是もわからない。

九月廿二日 雨 66

又雨だ——今年程雨量の多い天候はあるまい——

昨日窪川さんが来るといふので一同待つてゐたがとう／＼来ない——それなら断りの手紙でも何でも来そうなもの——主義に共鳴しない母親であるためある反感を持つのかも知れない。この狭量さが私は嫌ひだ——そこで今日は返信付の電報で今日午後四時頃来られるか聞き合せる——

窪川さんが約束通り来た。不相變子供を抱いて——しばらく見ない中にこの赤ちやんのかわゆくなつた事——こんな子供にさへ心を引かされずその主義に邁進する彼ら夫妻——私は痛ましさをさへ感ずる——しかもその奉ずるところのものそれが全く正しく尊いものであらうか——私はもつと／＼深くしりたいとも思ふ。「宗教を信するは自由なりといへども本國の害となるべき宗教は——」かう教へられた西村の父上の國民の上に叫れた——その私は娘であり彼女は孫であるのだ——噓

窪川さんの子を抱いてゐる姿態はたしかに誰の同情でもひき得る——

「私がかうして子供を抱いてゐると決してひどい事はされないんです」にこ／＼しながらかういつて平然としてゐる彼女は私の前には一種ふしぎな存在とさへ思はしめる——六時近くなつて彼女は歸つた——

九月廿四日

安積疏水組合の人々の依頼によりて

真心の象徴と見ん此石ふみ三十年をへて今此舉ありとは

みちのくの安積の沼といひふりし此高原も遂に市となりぬ

もろ人のあつき心に築き上しこのいしぶみや千代も變らじ

九月三十日 雨

いよ／＼明日は除幕式の當日になつた。明日はきつと晴れるだらうといふ古老の詞を信するべくあまり曇つてゐる空だ。上段の間には當日のす江子の振袖や、われ／＼の衣類を並べて、白襟をかけるやら何のかのと目まぐるしいまでいそがしい。丸井呉服店に命じて不足の夜具、蒲團、座ぶとん、瀬戸もの類を持ちこませる。何といつても田舎だ、出来合ひのものは何一つないので大急ぎで作らせる騒ぎつたらない——

す江子は何しろ當日の立役者だ。いくら大膽でも初めての事、除幕に支障あつてはと振袖を着せて見るやら、洋服を着せて見るやらかなり心をつかふ。明日除幕式の光景を活動のフィルムに入れるため東京から来る。石井、齋藤も一しよだ。いよ／＼となると手洗ひ場の不備や何か、やはり私より外世話のしてがない。ブリキ屋が来る、何が来る、どうやらやつと整つたのが午後六時頃——

大久保侯御夫婦も夕方着、直ちに熱海に向はれる。あるじ出むかへ——

十月一日 快晴

昨夜来氣遣つた天氣も、フツキリ、テツキリの諺通り、山村をこめた霧漸く晴れてもう六時頃にはそろ／＼明るくなつて来た。

流石に今朝はす江子も元氣よく起きて、顔を洗ふもの、衣類を着かへるもの、食事するもの、狭い家の中は混雑

を極める

昨日の豫行が効を奏して、す江子の着附がかなりよく、しつかり出来た。

十月十五日 雨

百合子歸宅の報あり。午後五時頃無事歸宅。窪川さん來訪。

十月廿一日 雨

又今朝は雨になつた。よくふる年だと思ふ——めづらしく一夜を平安に過ぎた百合子は、起きるとす江子と相談したと見へしよに學校にゆき、音楽の教師にあひ、いゝ人だと大變喜んで、とう／＼歸るのもす江子としよに午後四時頃までゐた。

國男夫婦もいよ／＼轉居と決心して、今日はとう／＼西野博士の令息夫婦がすまつてゐるその隣りの貸家に目星をつけて夕方歸つて來た。

(百合子のらくがき。)

たべてゐる、その音ビシヤ、ビシヤ。——誰かふみつぶした栗の菓子に「ホントだね」といひながらおふくろ。けふ特筆すべき事あり。それはうちの百合子がめづらしくおふくろのひざにころがつてあまつたれ、おふくろまた娘にあまつたれて娘のおでこにバカとインクで書いた。あしたはどんな天氣になるやら。アナ、オソロシ!

十月廿七日 晴

今朝最も私を驚ろかしたのは、前の交番からおまわりさんが來て「あるじにすぐ來るように、或は代人でもいゝが——」といふ意味の書つけを渡した事だつた。丁度石井が昨日の事で來てゐたのですぐさま代つてその用事を聞かせる事にし、彼はすぐそのかきつけを持つてその指定通りに行つた。電車賃を渡さうとしたが受けない——歸るまで心にかゝつてゐたが、やがて十一時過になつて歸つてからの報告を聞くと、それは意外にもサイドカーの番號がやはり一八四だつたので聞き合せたものと判明した。

十月三十日 曇

今日は朝からいろ／＼働かうと心がまへをしてゐると、思ひがけず駒込署の人、川崎嘉夫が來て私の心を又平靜さから追ひ出さうとした。しかし會つて見るのも必要かと思ひ直して應接間へ通し出て見ると、年頃は四十にはならないらしい——最初はごく百合子に同情してゐるようにも見へたが、しかしこれも亦一つのトリックかと思ふと油断出來ない氣もしたが、しかし、私は例の赤心を人の腹中におく底の寛大さをも持ちたいと希つて、隔意なくいろ／＼の話をした。約一時間足らずも話して歸つて行つた。

大瀧の若夫婦が來て國男ら轉居の喜びをのべた。何だか見當ちがひの氣がして妙だつた。

今日はいよ／＼百合子が國男の家へ同居する事になり、それ／＼荷物も運び終つた。ほつとして私はそこいら中ちらばつた荷物や衣類を始末したり、おみやさん母子も今夜は又金澤へ立つといふ——その事や何かについて話をつゞけてゐると、電話があつて「百合子さんに今夜の會には出ないやうに——」といふ事だ。そらといふさわざで

しづ女をすぐハイヤーでかけさせる——午後六時半からだとの事なので充分間にあふだらうと思ひながらも落ちつかない氣であると、流石に氣の利いてゐる彼女は安着の電話をかけてよこしたのでほつとする。——噫。

十一月十一日 曇

昨夜おそく来て泊つた百合子に午前十時過にあふ。不相變元氣で活氣があふれて見へる——たゞ情けない事は例の思想上の並行線な事だ。

此頃しきりに腰痛を患へるあるじは、今日も大分難儀らしい。氣の毒に思ふが代る事も出來ず、たゞ疝癩のしきりに頻發するには閉口する——

十一月十三日 曇

午前十時頃橋本とりの娘靜江が突然やつて來た。山鳥一羽を持つて——

百合子が來た。不相變忙しきうで、しかし案じたやうにもなく、いかにも吞氣らしくにこ／＼してゐる——これだけがせめては母たる私にある安心を感じしめる。

十一月十七日 晴

快晴だ。かの古人が「空さりげなくすめる月かな」と詠じた——その通りほんとにさり氣なく晴れ渡つた今日だ。あんなに曇れに曇れた同じ空とは思はれない程陽光に輝やいた今朝だ——偉大なる天地——偉大なる力——廣く大

きく胸を開いて大きく呼吸したい様な朝だ。

十一月廿日 曇

今朝あるじは大磯に池田氏邸を訪ふべく出かけた。いゝあんばいに風氣も殆んど全快して、昨夜は入浴さへした。が何ともないのだ。どうか今日も何より寒くなく、さわりのないのを祈つてゐる——

今朝はす江子も亦例の樂器の練習があるといつて、私が洗面所にある中江井の車で出て行つてしまつた。ついで百合子も出かけ、寂寞たる室内に、他から考へるとは反對のある安らさと静けさを感じた。

此頃百合子は又以前のある時のやうにある親しみとなごやかさを見せる——今朝も亦その通り——私はかういふやうな彼女の心相を見る時、譬へない愛憎が一層私を苦しめるのだ。絶對並行線である彼女の思想——憎惡に満ちてゐればそこに愛憎の苦しみは薄い——しかし、かういふやさしさに接する時、母としての私はいかに處すべきか

十一月廿六日 雨

曇つた空はとう／＼午後から雨になつた。

今夕はかの下田女史の喜壽の祝宴が雅緻園に開かれるので、午前中からやれ衣類を揃へるの、何のかの中々用が多い——

下田女史喜壽を祝して

喜の壽をも麓には見て百歳の坂もやすけくごゆへきや君

昭和八年

一月廿六日 雨

梅雨のやうな天気だ。百合子が忙しい中を泊る——といふ事はどんなに私を喜ばせ、安心させるか知れない。同時にどうかして少しでも安らかさと楽しさの中に此夜を過ぎたいと努力してまで歓迎裡に迎へてやりたいと思ふ——しかし今朝彼女は何の爲か大變不機嫌で、人身攻撃的に過去の私の事について刺すような言辭を弄する時——以前ならどんなに立腹に身をふるはすであらう——あゝしかたがない——遂に平行線なのか——暗然としてかく僅かに嘆ずる外一矢酬ゆべき事さへも出来得ない——私は彼女の言動について綿密な注意を拂つて見ると、全くそれは一種の時代病——誇大妄想に類したものでないかと考へられる節々が顯著で、此の時代が生んだこれら學者型の變態で、痛ましくてたまらない氣がする——特にかく此難局に當面して苦しみぬいてゐる私にとつては、安樂を求めず——寒き夜火もなく——粗服で街路を歩む彼女らを思ひやつては腸九廻しないではゐられない——噫。

一月廿七日 快晴

寒いが實に文字通りの快晴だ。紺碧の海上に一艘の漁船も見へないのは、大方沖の方は魚が集まらないと見へる——此數年來名物の鮭が此濱へ集まらないのはどういふわけか——これを以て殆ど生活の全部としてゐるような濱邊にとつて、此不漁は實に盛衰の分れるところ——寂莫たる漁村の一帶は初春らしい氣色も見へないのは實に氣の毒だ——

二月三日 快晴

春たつといふばかりにや三芳野の山も霞みて——といふ語の一節がある。こゝは海邊であるだけに、霞でない、水面から盛んに湯氣が上るのだ——それはきつと暖流が通るその爲なのだらう。あたゝかいこの雰圍氣につままれるこの漁村の黎明——それはほんとうに呼吸する人々にとつて大なる天恵とも云ひ得るだらう——これによつて大抵の病人も醫藥以上に救はれるのだ——眞個に。

二月十八日 晴

今日は西村父上の御命日だ——いろ／＼の意味に於て是非お墓参りをしたい。是非——と思ひ立つたが稀有の大雪でかなり道はわるいだらう。その用意をしてと、思つて出かける——

養源寺の門前へつく——思つたよりもつと／＼ひどいぬかるみだ——江井と寺男に助けられてほんとうにやつとこせとお墓前に辿りつく——何しろ人足まれないので一寸も踏みつけられない雪は足袋をぬらし、足駄の齒に充ちさうだ。折々樹木からおちる雪どけの水に襟元をゾツとさせながら漸くお墓参りをすませる——花やから届けさせたお花が特に目立つて見へる——

三月三日 曇

又曇つて寒い日だ

定刻より一時間ばかり早くあるじは出かけた。昨夜お隣りの佐藤氏が來られたらしい聲がしたが、果して私がお

き窓をあけると、丁度出あひ頭に外から聲をかけられた。不相變一人きりで來られたさうだが、もう植木やが來てゐて盛んにさしづしてゐる——

私もこの閑寂な地にゐると、日に／＼快方に向いて、手先のしびれや、特に嬉しいのは頭腦が明晰になるやうな氣がする事だ。

右翼の熱血兒二人上奏文をもつて割腹した。しかしそれは未遂に了つたといふ新聞があつた。あるじはそれを聞いて嘲笑した。「ナンダツマラナイ、又か？」と。私は激怒せざるを得なかつた。

今日は雛の節句だ。だゞ一人残つてゐる壽江子のため何の催しも出來なかつた事がいたましくさへ感じる——そこで簡單ではあるが手紙をあるじに托す。——返事があつて大變細やかに、やさしくいろ／＼の事が報道され、安心した。

三月四日 晴

昨夜の震災は意外の慘禍を與へられた。三陸の被害甚大

三月五日 雨後晴

今朝は鶴見祐輔氏が佐藤功一氏と一しよに來られるといふので、あるじも共に早くから起きて用意にかゝる——天氣もどうやら今日は晴れさうだ。

三月九日 晴

今日は晴れたが寒い——

朝から例の通り用事が利到する——まづ第一に水野夫人から電話があるじにかゝり、丘夫人重態だとの事だつたとの事をあとで聞いた。

百合子が、宮本の「レーニン主義文學闘争への道」と云ふ本が出版され、それは實に／＼いゝ、立派なものだと喜んでゐる。私は彼女のこの喜びには滿腔の同情を表する。がしかし絶対共鳴出來ない事がふびんにさへ思はれる。

三月廿七日 雨

漸く晴れたかと喜ぶ間もなく又降り出した。花開いて風雨多しの感を更に新たにせざるを得ない——

私は此方へ來てから著しい氣分の爽快さを覺へる。

三月廿九日 晴

昨日東京は大變な暴風で物凄しい程であつたと、昨日かへつたあるじから聞いた。しかし此方は今日も又おだやかに明けたが、しかしどんよりした空工合だ。

今朝はめづらしくあるじは木鉢みをもち出して、ちよい／＼植木に手入れた後上京、あとから佐藤氏も行ったらしい。玉だれの残り三つもらふ——變なおくりものだ。

三月三十一日 雨夕晴
春雨らしい雨がしきりに降る此頃だ。

四月一日 晴

ゆめ秘めて人に聞かすなかくる事誠なりとは誰か思はん。
偽りとおもはれる事そあなかしこ人にないひそまことゝは思はし。
いたずらに神を汚さんそら言をいふとのみ人は思ふべければ
われながらわれをあやしみぬかゝることかゝる奇蹟を目のあたり見ては

四月三日 晴 神武天皇祭

薄曇りだが暖かにおだやかな日だった。

石井柏亭氏が門口まで来られたが、私は気分が悪くお目にかゝらなかつた。

十二時過——一時一寸前——國男が思ひがけず来た。本當に思ひがけず——それではといふので一寸門前まで運動に出かける積りでとう／＼久しぶりに海邊まで出てしまつた。ほんとうに久しぶりで親子水入らずの散歩は、たとへそれがわずかの間であつても私の心を慰められる事は多大であつた。これまでは海岸は何處やら風寒く感じられたのが、一寸の間にもうすつかり春風と變つてむしろ爽快に感じられる様になつてゐた——

四月三日 國府津にて

赤々と漁火かゝやきて此濱に久しぶりなる大りようを見し

足を空に人はひしめくこの濱に鱒一萬五千上がると

和田の原こぎ出る舟のおのも／＼山と積みたる鱒の大幸

血と脂に濱邊を吹く風生臭く我都人その肉を忌む

かくいはゞ罵られんと思ふにそもくしておりぬ濱の一時

四月十三日 曇

朝十一時頃國男より電話、信濃町へ行く事を打合す。

四月十五日 雨

庭前のごぶしが満開だ。引きつゞいて梅の花が、満目唯花ばかりだ。昨夕も九段から道々の花を賞玩して春の風光に浸つた。しかし

四月十八日 曇後晴

今年の花はとかく天氣がぐづついでる爲かはかくしく咲き揃はず、従つて色も淡くそのくせ散るのも亦急ではない。何といつても花はやはりぱつと咲きはつと散るのに華やかさがあるのだらう。

四月三十日 風曇

日記をかくといふ事にかなり關心を持つてゐても、とかく用事に邪魔をされて毎日は中々書きにくい——私は断然今日から書けるだけ書くといふところにある心の餘裕を持ちたいと思ふ——即ちこゝに書く通り、かなりぬけてしまつてはゐるが、あまり心を勞するの馬鹿々々しいと思つてかういふ事にしたのだ。

五月一日 晴

いよ／＼春の花も雪と散つて、五月の鯉のぼり空に翻へる五月となつた。この勇ましい雰圍氣の中に、更に／＼私をして歡喜おく所をしらないのは、今夕放送の松岡代表の故國に向つて呼びかける大きな聲であつた。期待した通り——否々それ以上に偉なる此人の態度、主張——實に世界的であつて日本魂を遺憾なく發揮せるもので、感激に私の胸は迫り、目頭を壓する涙を打ち揮ふ事さへなし得ず、その人類全般によびかくる大きな聲に聞き入つた。

五月三日 暴風雨

夜來の風雨拂曉にいたり益々その度を加へ物すさまじき天候となつた。

五月七日 快晴 65

急に暖かさを覺へる。

五月十日 雷雨

所々雹降りたるよし

五月廿三日 晴

朝あるじは電話、會福益氏の結婚祝ひ物をかひとゝのへる打合せを成し、午後二時過同行、銀のスプーン及フォークを高島屋にて購入、それより更に三越に行き高子さん卒業の祝品を買ひ求む。

六月一日 日

今日は又英男の御命日に當るのだ。しかも大瀧ようちやんの御命日、特に祥月にも當るので、どうかしてつとめてやりたいと昨夜から心がけてゐたおかげでどうやら今日はお出かけられ——朝から空は不相變ふりみ、ふらさみの空模様——いゝあんばいに歸るまで降らなければよいがと思ひながら、仕度もそこ／＼出かける——

六月九日 快晴

今朝あるじは輕井澤に地震観測所を見るべく出立した。

六月十一日

鶯の谷わたりする聲に夜は明けて世はなれたる我家をありがたしとおもふ

何事の不自由さも此一聲に救はるゝ如き心地する朝。

六月十四日 朝雨後晴

午前、女子學習院より西村父上の寫眞をかへしてよこす。

六月十五日 雨

朝の中町會の人たち多勢来る。長田氏を先頭に私は、——玄關へ出て應待した。何でも空防？の爲制服を作る寄附金の相談だ。私はあるじが留守の旨をのべて後日返事をする旨を約した。同時に泊翁傳を送る事も約した。左右田、林兩夫人同行、玄關にて應接す。何といつても上られない——兩夫人は私がまだ病氣全快しないといふのを聞き、不審の面持ちをされる。

めしめともならん我ともしらざれば人はたゝへていひきしあはせよしと、

六月十九日 晴

今日は父上の——西村——御命日だ。遙かに禮拜する外ない——

昨夕あるじは單衣一枚着流しのまゝ庭に水撒き機械をもつて撒水して大變面白がつてゐた。

六月廿四日 晴

古田中さんへ電話で芝居の事を聞く、お孝さん鐵治さんをつれて来る。あるじは下痢の爲やめて、大瀧の若夫人と、古田中母子と共に行く。

六月廿六日 晴

あるじ事務所行、未だ全快せずと見へ氣分わるゝ、國府津へ行く。

六月廿七日 九十度近し

此日の暑氣最も甚だしくたへがたき心地す。

六月廿九日 曇後晴

今朝はやゝ涼味を覺へる——

同級會に朝早く赴くとて（豊島園に行く途上）

すこやかに日のかゝやける道を行く幸ありと思ふ朝かな

七月三日 小雨後晴

一夜の裡に暑熱は去つた。寒暖計十度の降下を示してしとく降る細雨に前庭の芝生も青色をました。

大磯の池田邸の新築落成を祝ひて

此御家千代に八千代に榮へなん大磯の浪の色とはかはらぬ如く

七月四日 國府津にて

萬こくの涙を胸にたへつゝさりげなく語りさりげなく笑む。
おほけなく神の御心をたのむかな我偽らず我おこたらずと

七月五日 晴稍涼

昨夜は犬の鳴聲に夢を破られて眠れがたかつた。今夜こそは——と思つても亦犬の聲が午前二時頃けたましく耳につく——よく聞いてゐるとそれは急に我子を失なつた悲しさの爲らしい。私はしみくふびんさを感じずにもられなかつた。情においてはいくらでも忘れられる私であつても、しかも亦抱いたりなめられたりする事にはがまん出来なかつた自己の天質の矛盾は何ものにも現はれる事をどうする事も出来ない——

七月十五日

秋氣既に動くと見へて庭の面の桐の一葉二葉ばさとして落ちぬ。
漁村今靜かに明けて朝もやの立ちこむる底は只浪の音ばかり。

七月廿五日 晴

東京へ電話して便りなき事をたゞす。

七月廿六日 曇後雨

原稿の校正を出す。

昭和九年

三月三日

是こそと頼みし帆網今切れて世の波高し我いかにせん。
思ふことなくて祭りし雛の夜なつかしみつゝ夜はしらみゆく。

三月三日

天も地も眞白にこめてもや深き我家のあたりたゞ海の如し。
此寒き圍圍の中やいかならんおもひやる時我胸は氷る。
天地たゞ眞白にこめし霧の奥に物凄きふくらうの聲。
子と思ふ母の思ひを空にこめてなごやかにふけ此寒き風も
久方の神もあはれめ晝も夜も母の思ひは我子の上に立迷ふ

三月廿七日

雪のふれる朝

庭の隅に昨日見出し福壽草いたまし今日は雪しとふれば

雪の影

昭和三年十一月廿九日の夜、英男の傳記をかくにのぞみて

玉の緒の命をかけてかく文ぞ神よ憐れみて完からしめ給へ

英男の生れたのは七月五日、例ならば中々もう暑い頃なのに此日にはどうかして前日あたりからひどく涼しかった。丁度あるじが滯英五年の後備けた子なので久しぶりではあり、又永い間の留守番の苦勞に報ゆるつもりで産室だけでもせめてゆつくりさせて——ともうかなり大きくなつてゐた子供らの望みもあつて、あの西洋間とよびなれてゐる。そこが急造された。こゝにはあるじが外國で苦しい生活の中から例の物好きに買ひ集めた古畫、古陶等が雜然とおかれてあつた。その中で一番大きいマドンナとキリストの——名づけて母子の愛と勝手につけた——油畫がピアノの上に高く掲げられてあつた。このマリアの容貌はあまり私は崇高さを感じなかつた。それはあまり首が長く鼻が高すぎてゐた。却つて私はその反對の相間にかげられた、ラファエルの聖母の模寫ではあるが、その母も子もいかにも尊嚴と叡智に充ちてゐる様な容貌がすきであつた。

昔していふ胎教、あゝいふ靈的な考へ方、それは兼て西村の母から聞いた事であつた。

「お前の兄さんの源之助といふ子はそれはく子供のうちから人並ではなかつた。それはお父様が初めての子ではあり、男か女かは分らないが昔孔子様のおつしやつた胎教といふ事——それはお前にはわかるまいがかういふ事だ、それをお前が守れるなら守つてくれ、きつと偉い子が出来ると信するから——かうおつしやるから、何も知らないあたしでもお父様は學者だものその位守らないではすまないと思つて、一生懸命おつしやる通りを守つただよ。そして生れたのがあの源之助、總領ではあるし、慧しくてく誰も彼も——あゝよく生んでくれた——とおつしやるのだもの、もうく日頃の苦勞も忘れて嬉し涙にくれたのさ。するとお前あの子は誠に幼いから別人だつた。

十四で開成所の世話役取締に成つた位だもの、一度などはあの子がまだ十位の時だらう、丁度上野の戦争で藩中の人はチリ／＼バラ／＼逃げてしまひ、私はお父様が殿様の御用で京都へ二心のない事を申上げて決して佐幕の志がない事を申上げて御家の安泰を計るため御上洛に成り、私たちがにげてしまへば、お父様が折角お歸りになつても家がなくては申譯ない——かう思つて今の九段坂上に屋根瓦だけ残つてゐるあの構もつこのの、あのお屋敷の中にあたしだけ残つてゐた。するとある時源之助がうつかり外へ出て中々歸つて来ない。心配で／＼居たり立つたりしてゐるとやがて若黨が「坊ちゃんが大變です、大勢の官軍に圍まれて今こつちへいらつしやる——」と指す向ふには本當に大勢の赤い毛や白い毛をかぶつた官軍が小さい源之助を中大變な偉い人でゝもある様に可哀さうにピツシリ取かこんで来るのだもの、ハツと思つてあたしは氣が遠くなりさうになつた。けれど近くなつてよく見るとどうだらう、當人は一向平氣らしいのさ。いつものようにニコ／＼してまわりの人達と何か云つてゐる様な様子なのさ。あたしもホツとしたがこの先どうなる事かと胸をついてゐると、やがて源之助だけ一人その列からぬけて「こゝがあたしの家です、伯父さん違ありがたう」といふなり何の事もない風であたしのそばへ飛び込んで来たのさ。お連れの人達とは見ると皆もうゾロ／＼歸つて行く様に「ママよかつた、お母さまはどんなに心配した事だらう、一體どうした事なのだい」かうあたしが息せききつて聞いても「ナニニお母様心配する事ありません、初めは一寸こわかつたけれどだん／＼話をしたら、かわいさうだなお前の家だけお父様の爲残つてゐるのは、歸してやれ／＼と一人が云ふと皆してあゝして送つて来てくれたの、こんな子供、何もしないのは分つてゐるのだもの」かう云つて御飯を澤山食べて餘念なく寝てしまつた。幼いうちからかういふ風に大膽で惻口であつたものだから、お父様が、源之助は跡とりにするのはかわいさうだ、勘當してやらう——とおつしやつた位だつた——これさへ生きて

ゐてくれ、ば今頃は——」

かういつてその胎教のいかに偉大な影響を受けるかをしみて聞かされてゐた。當時私は偶然あるじが持ち歸つた此數々の油畫を見てふと往年の母の詞がヒシと胸に蘇つた。さうだ、物は試しといふ事がある、毎日こゝへ来てつとめて心を清らかに持ち、邪念を去つて靜かにこの母子を見てゐよう、食べ物はなか／＼普通りには行かないでも——かう思ひついた私は暇さへあるとそのみもつた十月の間此部屋に入つては其畫像に對した。そして心にはその胎兒の聖ならん事同時に己れの心も清からん事を念じては其日の行爲を省みた。幸ひ私の妊娠中は皆人の惱みがちな悪阻といふものは全然なかつた。食欲は三食だけでは足りない位旺盛で、四度目は夜に入り人を勞す事が憚かられてパンの様なものを買ひ求めて其用にあてた。かうしてたゞ起居の幾分不便を感じるのと、神経が過敏になる外大した苦痛もなくその十月を過したのだ。初産が非常に難産で百合子は死産して更に蘇生した位だつたのでそれにこりたので、二度目から早く産科の醫者を頼む事にしてゐた。この時は小林八十七といふ、三十三だつた私と同年の醫學士だつた。一體女の三十三は大厄なので此時のお産はそれに勝つ——子供はきつとすぐれたい、人かわるい人になる——かう云ひ慣はされてゐるさうで、私の心の中にも、亦周囲にも大變な心づかひをかけてゐたのだ。それでい／＼専門家の考へも聞いて、お頼みしたこの小林學士は期待通り誠に善良で且快活な人であつた。何でも口のあたりに大きな黒子があつたやうに覺へてゐる。私が永年の糖尿病があるので是非入院して産をする様にとの注意も私は斥けた。しかし此時の産は非常に輕かつた。例によりお七夜には兼て男子ならばと考へておいた通りあるじが滯英後に儲けたので英男と命名した。産婆はたしか根岸かなと云ふ其道にかけては仲々腕利きの婦人であつた。

赤子は順調に育つた。その赤々と太つた顔、目もと口付き、何處となく私の毎日眺めては似るようにと冀つたマ
リヤの抱く赤子に髣髴してゐる様に思へた。初産が難産だったため乳の出のすつかり止つてしまつた私は此時も殘
念ながら牛乳で育てるより外なかつた。しかし壯健に、且體內で充分に營養をとつた此子はスク／＼と何の障りも
なく發育した。

漸く二つ位の時、此子附の女中が母の病氣で國へ歸つた。すると此子はいつも食べるおちやの茶碗をかへたま
ゝ家中をたづね歩いた。そして誰にもその御飯を食へさせてもらふ事を肯んじなかつた。かうして一日を泣き通し
た彼に泣かされた自分は、もう此子には外のもの——他人をつけてはだめだ、もう外の子は大きいのだし何でも自
分自身で世話をしよう、かう思ひきめた私は何もかも——おむつのとりかへまではほとんど人手を借りなかつた。

三歳の時生れて始めての大患は生死の境にまで陥れた。それは丁度七月三十一日の事だつた。前晩彼の父はバナ
、の一連を食後に皆に分けた。幼い英男も喜んでそれを食べた。翌日の午前十時頃だつた。いつも元氣にとび起き
る此子がなかく／＼起き出さない。見ると、何處となくだるさうに吐く息もせわしなかつた。いそいで挟んだ検温器は
三十九度六七分を示してゐる。驚いた自分はすぐいつもか／＼りつけの細井義方氏に電話をかけた。醫者の來ない中
便意があり、やがて通じたのはあまり悪くない消化した便だつた。しかし又すぐ二回目があつた。それは粘液が混
つてゐた。同時に少し嘔氣さへある様に思へた。直ちに心臓部、頭部に氷をあて、ヒマシ油を飲ませようとしてゐ
る處へ細井氏は來診され、スポイトの灌腸を行つた。その中とう／＼一回目の痙攣が襲つた。これは早く入院して
十分の治療をしなければならぬ——すぐ大學病院の小兒科隔離室に入れて貰ふ事にした。丁度午後七時頃にもな
つたらうか、いくら夏の最中でも、もうそろ／＼暮れかゝるたそがれ時、一臺の車には病兒を抱へて氷袋のまゝ、

一臺にはばあや——細井醫師は痙攣の用心に徒歩のまゝ注射器を片手に持ち私の車の傍に引き添ふて歩いた。最後
の車には早急の事でも何もかもと／＼のひかねるのを應急に、たゞ早く／＼とのみ雜然と引包んだ病兒の衣類や、われ
／＼の寝衣などの大風呂敷が従つた。家の門を出るとすぐ右に折れてさしかゝつた小路で再度の痙攣を起さうとし
た。直ぐ細井氏は注射した。スヤ／＼と眠り初めた兒を抱きながら絶へ間ない不安で私の目は寸時も彼の顔から離
れなかつた。

疫痢！ この病名はいか程子を持つ母の心を脅した魔の響きであらうか。今この抱いてゐるとほしい英男の上
にも此の恐ろしい詞を聞かねばならないのか。夕闇の外に更に逼つて來る陰鬱な感じに胸を押されながら高等學校
の前まで來た。又第三の發作！ 例の如く注射した。すぐ眠る。かうして漸く大學の小兒科隔離室へ運ばれた。ま
あよかつた、こゝまで無事に來ればあとは大勢のお醫者様——上手なお醫者様がいらつしやる、夜だから弘田先生
は入らつしやらないでも——かう思つてホツとした私は抱きづめにしてゐた我子の重さに初めてしびれを感じつゝ、
導かれた病室の寢臺の上にそつと我子を下ろした。程經て若い醫者が看護婦を従へて入つて來た。看護婦は細かに
われ／＼の宿所氏名職業等をきき、醫者は無雜作に病兒の顔を一寸のぞきこみ、頭部や胸の氷嚢をとつたまゝ黙つ
て出て行つた。すぐ來る事としきりに入口の方を見守つてゐた私の視野の中に、いつまでも待ち侘びる醫師の姿も
なかつた。病兒の頭はすん／＼あつくなり、同時に顔も赤くなつて來た。一時間——三十分——二時間——何の手
當もなく病兒はベッドに閉却されてゐる。

「これでは困りますなあ」と安否を氣遣つてまだここにゐた細井氏は云つた。

「ほんとうにどうしたのをごさいますせう」これ位ならあの氷嚢や何かまたとけすにおりましたもの、のせておけば

よかつたのに、かまわずこのまゝ何時間もおかれるのでは病院へ来た甲斐がございませんわ」
「これだから大學は官僚式だと非難されるんです、私一寸行つて聞いて見ませう」

かう云つて細井氏は扉を排した。幾十分——又此人も来ない。病児の顔ばかり見つめてゐた私の心はもう燃へる様になつた。しきりに鈴を押してやつと来た看護婦に、早く細井氏を呼ぶ事を頼んだ。やつと来た細井氏は「誰も彼もろくすつほ聞く氣にもなつてゐません、何のかのと云つて——是は私が町醫者だといふ反感もあるのかしれません、奥さん一寸行つていらつしやいませんか——」此詞の終るか終らぬ中私の踵はもう戸の外にあつた。醫務室とか何とかいふ醫者の溜りには當番の夜勤の醫師が二人位はかゝつた。いきなり駈けこむ様に入つた私をけんさうに、又侮蔑したように見ながら云つた。

「一體あなたは何です、いきなり此部屋へ飛び込んで——？」

「え、子供が疫痢で大急ぎで今こゝへつれて来たのです。早く手當をして下さい、でないと死んでしまひます、頭の氷も、胸の氷も皆とつて、さうしてかまひつけないで誰一人見てくれない、私の兒は死んでしまひます」

涙ぐんだ私の目はキツと醫者を睨んだ。

「フン、奥さんそんな權幕であなたは氣がちがひますよ、あなただけの子供が此病院にゐるのではありません、おちついていらつしやい、今に見るから——」

「エ、私は氣がちがふかもしれませんが、あなたはまた子供といふものを持つた事のない方なのでせう。子の爲には母親はいつでも氣がちがひます、一人の命ではすまない、どうか早くみてやつて下さい」
しらすく、聲涙共に下つてゐた。流石にもう一人の醫者は見かねてしまつた。「さあ、僕が行つて見てあげませ

う」かう云つてサツサと先に立つた。喜んだ私は駈足に此人に従つた。「……號ですわ」かう云ひつゝ更に此人も亦歩調を早めた。かうして此人の手當によつて直ちに腸洗滌が行はれた。そしてその後は案外スヤ／＼と眠りつゝけた。安眠してゐる間は決して引きつける心配はないといふ事、及び明日醫師の命令のない間は決して乳を飲ませてはならないと云ひ残して醫師は去つた。返す／＼禮をのべてその人を送り出した後、さて私たちは何處へ寝ようかといふ事になつた。何しろ眞夏の事で蚊帳がなくてはしのげさうもないのに、病室は一等と云つても其時分の小兒科——殊にこの隔離室は一番虐待されて建物も古し、又手狭だつた。一室が十疊位と四疊位の附添及び物を置く部屋だつた外に病室に二脚の椅子と一臺のソーファーがおかれて、藥瓶や何かをのせる爲の一寸した用筆筒とでもいふ様なものが据へられてあつた。勿論その夜は特別に見舞人や何か夜半過ぎまで人の出入りが多かつた。ドアの開け立ての音にも病児の方を顧みがちに不安の半夜は忽ち過ぎた。十二時頃看護婦が檢温した。無雜作に胸をあげようとするにさへ胸をいためてソツと自分で檢温器を挟んだ。よくねてゐる位だから熱は下つたのだらうと、ソツと額に手を當てながら考へてゐた通り既に三十七度臺に下つた。傍に打案じ顔の父も姉も喜皆びの眉を開いた。期せずして皆は、あゝ助かつた、といふ心持を感じた。父を初め見舞客はこれをしほに皆辭去した。いよ／＼寝る事となつた。ばあやは附添の部屋に、私は病児の寢臺の傍にソーファーを引張り出し、手と足のはみ出しをふせぐ爲椅子二脚をあてがつた。苦心の寢床は出来て漸くそこに心と共に疲れ果てた身を横たへた。しかし是さへ長い休息は與へられなかつた。病児は二時間おき位に便意を催し、そして同時にしきりに「バイ／＼」とねだつた。「アーチヤンバイ／＼」と、しまひには寢床を蹴つてねだりつゞける。だます、泣く、幾度かくり返しくり返す中に東の窓は白んだ。夜中過からの便は血液を混じた。其度に昇氷水に手をつけて消毒した。病児は熱の下つた快さに頻

々と催す便意に目さめる外、拂曉になつては疲れたと見へもうあまり乳もねだらず安らかな寢息をつまげた。かくして丸一日絶食の苦しみを受けつゝ、牛乳嚙を抱へ、泣いて時間を待つてゐる母と、是も流石に他人ながらかなり長く手がけた子供に愛着を感じて貰ひ泣きする乳母、一食も攝らずに下痢し續けて空腹に泣く病児——三ツ巴に擾亂の裡にも漸く一晝夜を過した。初めて許されて牛乳を與へ得た時のわれ／＼の喜び、それは恐らく本人以上のものであつたらう。

かくして丸一月も過してゐた病院生活の中にはいろ／＼の出来事があつた。隣室に入つてゐた何處か下町の町家の女の子——それはやはり疫痢らしい、かなり重症と見へて元氣にだゞをこねる聲さへしない。何でも七八ツの女の子らしい。年頃五十位の少し腰の曲つた實體さうなばあやが附添つてゐる様子だつたが、或晩めづらしくその女の子の聲でしきりに、かあちゃん／＼と呼んだ。何かと／＼聞かす聲がしたが靜かになつた。間もなく又同じ聲すかす聲、たゞさへねがめがちの私はすっかり弱つてまつた。翌朝看護婦の話に何でもこの女の子は重症でしきりに母に會ひたがるのだが、傳染病だといふので一寸も顔を見せない。處が病氣が急變して此一兩日が大切だと先生が云はれる、病児もそれを子心に豫感してかしきりに母を呼ぶのださうだ。

「かあいさうにばあやまでが貰ひ泣きしながらすかしてゐます。本當にかあいさうで聞いてゐられません、すい分思ひ切りのいゝお母さんもあるもの、聞いて見ると本當のなさうですが——」

かう聞いて私はどうしてさうさつぱりしてゐられる親心かと思つた。すると偶然にもその明方、五時過だつたらうかまだうと／＼する私の枕元に何だか物音がした。見るとその隣室のばあやが何か持つて入つて来て、いきなり病児の枕元に行かうとしてゐる。驚いた私は飛び起きた。

「あらまあとんだ粗忽をいたしました、私間違へたのでございます。何しろこの一晩二晩ろくにねられませんので目がかすんでお隣りとまちがへました。どうかごめん下さいまし」

かう云ふなりまだ何とも云ひかねてゐる私をあとにサツサと行つてしまつた。その翌晩隣室の病人は死去した。とう／＼待ちわびた母にも會はずに——

こんな出来事のあつたあとは殊に病人の容體が氣遣はれた。何しろ子供にとつては生死の境を彷徨する大患だつたので、ある時は發熱したり、便通が頻發したりして胸を轟かす事は一再でなかつた。その中にあつて一番心強かつたのは小兒科院長弘田博士の來診される事であつた。何しろ時は生憎暑中休暇で先生方は皆それ／＼海に山に靜養せらるゝ時、此病院は始めお留守番式のお弟子達のみが當直してゐた。病人にとつて一番力になるべきお醫者がこの有様なので、英男が入院當時のやうな行届かない失態もあつたりしたのだ。處が幸ひ弘田博士はあるじが滯歐中御案内役で骨を折つたとかで、看護婦から子供の入院を聞かれて特に診察される事になつたのださうだ。

「弘田先生御診察」かういふ看護婦の聲は有難い福音だつた。すぐ病室の外に洗面器が用意され、數多の弟子や看護婦を従へてかの長身瘦軀の博士の姿が現はれた。嬉しさに胸を踊らせながら私はねんごろに請じ入れた。まづ難關は經過した、しかしあとか尙更大事だから尙よく注意するように——といふような簡單な詞を残して博士は歸られた。ドアの外に送り出しながら私は驚いた。それは折角此暑中休みに診察の爲來られたながら、診察されたのは私の兒只一人で、定めし此隔離室全部の人たちがいかほど熱望するであらうこの博士の靈腕も、この情實を排して衆に及ぶ事がなかつた事だ。

サツサと過ぎて行く博士はふり向きさへしなかつた。そして玄關に向ふ大勢の靴音が聞へた。「あゝ私の所へ来て

下さつたのだからいゝようなものゝ、もし是が外の病人の處へ行かれ、そして私の處だけ取残されたらどうだつたらう？あゝ無慘だ——」暗然として私はしばしそこに立ちつくした。とにかくこの大きな背景のある事を知つて看護婦も何もその態度を一變した。けれど其又看護婦の助手といふのが實に——雜物だつた。かりそめにも大學病院とも云はれる處でその助手が驚く勿れ皆急普請の手間とり——といふ様に實に無智識千萬の者たちが、手が足りなくなる——看護婦服を着て流し元から駈けつける——かういふ風なのだ。私たちの病室へ來たのは年頃五十一寸出た位、黒あばたの瘦せぎすの女房で、何しろおはぐるをつけ丸髻にゆつてゐる始末、脈のとり方、検温器の扱ひ方さへ知らない様な手つき、おかしいと思つて引取つて見るとろくに下りてもゐない検温器を平氣であてがはふとする始末だ。「これではいけないわ、すつかり下して六度以下にならないでは——」かう云つて私が下ろす手元を不平さうに見ながら「一體奥さんこの病院は傳染病ばかり入つてますので、どんなかわいゝお子さん達でも御身分のいゝ奥さん方は看護婦にまかせて決して出入りはしませんの、それは——思ひ切りがいゝんですよ、その方が又患者さん甘へないでなほりが早いですよ」かう云ひつゝ、餘計なお世話をやく——と云はないばかりの白い目を向けるのだ。「いゝえ、よその奥さんはどうでも私は決して離れません。これがきつとなほるときまつてゐるならとにかく、この大病で若しなほらなかつたらどうします。母親がついてゐたら——とどんなに口惜しく心残りだか知れません。私はうつても何でも決して此處はどきません」と、例の激情のまゝ私は何の會釋もなく云ひまくつたしかし後になるとそのたゞりが考へられた。果して翌日からその女房は來なくなり、今忙しいので一寸代りもございませぬ——かういふ看護婦の斷りであつた。きつとそんな事位はあるだらうと思つた。なまじ付いてゐて變な事をされるよりはいつそ其方がいゝかもしれない、百合ちゃんに來てもらはふ——かう考へて夜おきる事の度々ある

この看護は少し無理かとも考へながら彼女をよんだ。幸ひ暑中休暇だつたので彼女は何の顧慮する處もなく直ちにかけつけた。勝氣の彼女は年に合はせては誠に甲斐々々しかつた。夜中に氷をかきに地下室に行つたり、何もかも大人並みに役に立つた。たゞ夜になると彼女はたあいなく眠つて起しても目がさめない無理もない。十二だもの——ふびんに思つて起されない。寸刻も母を離さない我子に後髪をひかれながら、看護婦室の鈴を鳴らしても——やはり誰も來ない。仕方がなく行つて見ると當直部屋は大賑はひだ。當番のお医者様達の顔さへ見へて建てめぐらした屏風の中ではランプでもしてゐるのであらう時々あがるとよめきの聲はこゝのみ春が來たようだ。——

こんな風に晝夜も分かぬ心づかひの病院生活の中にも、何より嬉しかつたのは病兒がおひ／＼よくなりつゝある事であつた。快くなるにつれかわきがはげしくなつた英男は、時間が來なければどうしても飲まされない乳をほしがつて、おんぶしてゐる背の上で姉の髪をむしり／＼して彼女を苦しめた。丁度丸三十日間をへてとう／＼全快のゆるしを得て歸宅する事になつた。牢獄を出る時、それに比べられるような歡喜に其前の晩は眠れない程だつた。「英男ちゃんとう／＼御病氣がなほつておうちへ、かへれるようになったの、嬉しいでせう、お母さまも嬉しくて——」

自然にうるむ目頭を押へてかう彼に云つた。まだ片言ほか云へなかつた彼も「あちやんばんも——」と嬉しさうに云つた。あちやんばんとは彼の僕の代名詞だつたのだ。いよ／＼歸るといふ九月一日の朝は初秋の空も晴れやかに日の光さへ輝やかしかつた。入院してゐる時こそいろ／＼行届かぬがちで不平だらけだつた看護婦や手傳ひにも相對する顔はにこやかだつた。「長々ありがとうございました。色々御めんどうに成つて——」「どういたしまして行届きませんで、まあ／＼御運がよう御座いました事」送る者送らるゝ者、人情の有難さはこゝにしばしの名残り

をむしむ氣持さへした。全快したとはいへまだ中々歩く事も出来ない程やせおとろへた英男を抱いて——しかしかうして全快して歸る車上の心持ち、それはまあ来る時とは何といふ變り方だらう。あゝ嬉しい、そんな事で此時の氣持ちが云ひ現はせるだらうか。丸一月の間安らかな寢床さへなかつた。この暑かつた夏中お風呂にさへ入らず、或時は血便に汚れたまゝの手であはたゞしくかき込んだ御飯茶碗に、洗ふ時氣がついて、ばあやに「まあ奥様は——」と呆れられた事さへあつた。思ひ出は果しなく續いて車が家の門に着くのさへ知らなかつた。「まあよかつたね！お目出度う」かういふ聲はまづ私の實家の母であつた。目は涙にぬれて——私はもう何も云へなかつた。めづらしく一家團欒して和氣あい／＼の裡に夕飯をしたゝめた嬉しさ——英男も、う此時は鳥のスープと野菜スープをまぜて煮たおかゆを食べた。かうして一家には又一陽來復した。その夜の寢床ののんびりした氣持ち、すぐ傍に引添ふて寝てゐる英男——何といふ安らかさだつたらう。疊の上のありがたさがしみ／＼考へられた。しかしあと一年間英男は歩行に困難だつた。朝起きるとすぐ「あゝちゃんおんぶ」かういつて私が上臑する外は寸刻も私の背を離れなかつた。

それから後私ははげしい肝臓の痛みに悩んだ。醫者は膽石ではなからうかといつた。それは／＼もう何といつていゝか、舌もつり聲も出す事が出来なかつた。丁度あの胃瘵瘵の様で、もつとひどかつた。かゝりつけの細井さんが「これはひどい、注射しませう」といつた。しかし私は注射のはげしい反應を心配した。そして苦しい息の下から「まあ少し待つて下さい、こらへられるだけは——」としばし容子を見てゐた。又一しきりはげしい痛みと共にすぐ脈をとつた。そしていきなり患部をアルコールで拭くなりすぐ注射した。數分間——私は追々輕快を覺へた。これまで不絶脈をとつてゐた醫者は「やつと安心しました。奥さん、あなたもいくら辛棒するたつてもう少しの事

で心臓麻痺が起る處でした。私の手にやつと脈がふれるかふれないまでに微弱になつてしまつて——全く驚きました」かう云つてはつとした様子の此老醫は全く職業的でない安心を覺へたらしかつた。私は心から此老醫に感謝せずにはゐられなかつた。そしてこの必死の痛みもこの一本の注射で夢の様に樂になつた。しかし此病氣には便通が必要だつたさうで下劑を用ひるためかなりからだが疲れた。

此はげしい痛みを目のあたり見てからの英男は、母が顔をしかめる——發作の初期と見ると部屋の隅につゝ伏してだまつて泣いてゐた。このいとほしさに出来るだけこらへてゐても醫者を迎へるまでの苦痛は中々輕くなかつた。しかしこの發作も漸く遠く遠のくやうになり、すゝめられて小田原の養生館に行つた。その頃から英男もそろ／＼歩行が出来るやうになり、従つて健康も増進して普通食をとる事が出来た。それで此子の養生にもよからうと、女中一人を供に三人づれで約一ヶ月滞在してゐた。海邊の此宿屋住ひ——それは自分の家とはちがひ不自由であつたとはいへ、英男にとつては實に／＼物めづらしく、愉快さうであつた。たゞ折々は兄弟の居ない淋しさと、遊び道具の足りないのや、お馬になつてもはしやぎ廻る相手のないのが可哀想に思へた。しかし遠く眼の前にひろがる渺たる海の色、絶間なく寄せては返す渚の波、けたゝましい音を立てゝ往きつ戻りつするモーターボート、地引網等々殊に彼を喜ばせたのは海岸に座つて砂を掘つたり、山に積む事だつた。しかしそれも折々起る母の痛みに永く女中をつけておけず、従つて彼も歸る事を餘儀なくされた。しかしかういふ場合決して彼はもつと遊びたい等とは云はなかつた。それはもうころがるやうに駈けては歸つた。しまひにはもう決して母を残して遊びに出る事さへしなくなつた。或朝の事だつた。私は何氣なく洗面所へと廊下に下りた。するとけたゝましい叫び聲が私を逐ひかけた。

「奥さま！英男さまが——」

かう云ふと驚いてふり返る私の後ろに附いてゐた下女の姿が滑る様に、かなりの音を立て、私の背後に落ちかゝつた。

「どうしたの？」

かう問ひかける詞と同時に私はもう階段を二三歩かけ上つた。そして部屋の障子のあいだでゐた處へとび込むと、英男は彼の床の上に両手を握つてそりかへつてゐた。目を宙に釣りあげたまゝ――

しかしこの時の發作は直ちに止み、脈膊も呼吸もおだやかにすやくと眠りに落ちて行つた。體温も大して上つてゐない。まあよかつた。とほつとする時兼て頼んでおいた土地の江良さんと云ふ醫者の訪れる聲が聞へ、やがて細やかに診察された。

「どうもこれは便秘しておられるやうです。外には何の異状も見えません、早速瀉腸して見ませう」

この診断は的中して一回の便通と共に、僅か上つた體温も夜に入つては三十六度臺に下つた。しかし私の異常な心配に由つて看護婦が江良氏の手で雇はれその夜から専門的に彼を世話した。これまではどうしても、あゝちやんでなければだめだつた彼も、不思議にこの質ばくな田舎者らしい看護婦にはなつた。「又御體温？」かう云つて素直に熱を計らせた。夜に入つて東京から招いた細井醫師も來られ、やはりあまり心配する事はないやうだ。便秘のせいですと云はれてやつと本當の安心を得た氣がした。看護婦を頼むやうな病氣――大患だと思つて來た看護婦には氣の毒な位スラ――英男はなほつた。案じた頭の方も何の障りさへ見へず、否むしろ此病後彼の頭腦はいろいろの進歩を示した。

小さいスケッチブックをほしがつて一冊々々それにかき集めた圖案風の畫はそれ／＼特色があつた――今も一部は残つてゐる――

「おかあさま！ 僕ねてゐて夢のやうに美しい色彩を見る。喜んですぐかいて見るともうその畫になつた色は夢のとひどく見劣りががつかりする」かう云つたのはこの病後からかなり月日がたつてゐたやうに覺へる。しかしかう云つてかいた畫を見た私の目には中々凡ならざるものが感じられた。これは一そ思ひ切つて畫家にして見やうか、そして私の兼て考へてゐた繪畫に對する理想――現實には我々の見る事の出來ない美しい世界、一見自ら頭の下るやうな崇高な人の、超人間的な、肖像畫――かう云ふものに接したなら眞に人は美化される――美術の眞髓だらう――藝術の聖化――人格養成――これによつてこそ初めて藝術家の大なる使命をも自他共に感じ得て、高い道徳の眞骨子をも體得するであらう。かう考へてあるじにも相談した。けれど此頃の資格萬能の世間に對してまたなか／＼斷行する決意は起らなかつた。私とても果して此思ひ切つた教育方針が、果して我子に最善の結果をもたらし得るものかどうかも確信する事が出來なかつた。ましてそれが病弱でもあつて、繪畫に志す外途なければとにかく年を逐ふて健康に、且つかなり聰明らしく見へる彼に對しては親心の期待は大きかつた――遂にこの畫家本位の問題は中止した。今にしても考へればやはり此道こそ彼をして大ならしむる途ではなかつたらうか。物慾を超越し自然に憧憬する事深かつた彼の、靜かに人格を完成し得た――大成せしめた道ではなかつたらうか――この時分彼は畫絹をわくに張つて田舎の生活を綿密に描いた事があつた。それは稻の一本々々丹精にかいたものだつた。元來彼は非常に前進的であり、創意的であつた。そして最も臆面ない事がしば／＼、此母をほ／＼笑ました。電車に乗る停電する――彼はその窓枠を一生懸命押へた。そして「ホラ、僕が動かして見せや、ホラ／＼」といふ中動き

出す。「ネー動いたらう」暫時の停電た退屈してゐた電内の客はどつと笑つた。其外諧謔百出乗るから降りるまで同車の者の腮を解かしめた。

長男が病弱であつた爲自然温和に人前にはとかく遠慮勝であるのをひどく私は物足りなく思つてゐた私にとつて活潑そのもの、如き彼の言動は一脈の活氣をさへ與へ得るように思へた。しかし何かの工合でお腹でも痛むとか、或は齒が痛むとか自身に異常のある時はきつと彼は母に云つた。「おかあま——」この言葉は短かい彼の生涯私に向つて云ふお母様の略語だつた。「だつこして、おかあさまはお薬だ、きつとなほるんだもの」これを一例として彼の母に對する信頼は信仰に近いものであつた。後年彼が小學校に入るに及んで、しばしば父兄會があり、それに私が出席する——歸宅してから彼の云ふ詞はいつでも「おかあまはよく僕のおかあまに成つてくれた！」かう云つては誰しも子として感ずる母に對する敬愛のもつともはげしいものを彼の性情から特に感ずると見へて私の頬に接吻したり、嚙みついたりさへした。かの三歳の時の大患後暫くの間は——漸く腰がたち、歩けるやうになつても天質の活潑さは勢力を殺がれ、午後になると疲勞を覺へると見へ、自分でやつと蒲團を引つぱり出しては床を引いてゴロツと横になり／＼した。英ちやん何故ばあやに云はないの？ と兄共が云ふと、僕一人で出来るんだもの。と云つて何事をも人手を煩はすのを好まなかつた。書生等が夕方彼の供をして何處へか行く様な事がある。すると驚くやうに早くその遊び先から歸つた。「どうしたの？ 折角行つてもう歸つたの？」かう聞くと「おかあま、書生は學校があるんだもの、僕のためおそくなるとかわいさうだ」かう云はれて氣がつくと、成程もう書生の夜學時間は切迫してゐた。「あ、ほんとうによく氣が付いた事、おかあさまはうっかりしてゐたのだよ」——かう云つて教へられる母だつた。當時彼はまた學齡にさへ達しない時であつた。

かくて學齡に近づくにつれ彼の學究的態度はそろ／＼その萌芽を現はした。其頃丁度女學校に通つてゐた長姉を筆頭に、小學校ももう卒業に近くなつた國男、三つちがひの道男、と云ふ様に彼の周圍には學ぶべきものが多かつた。ローマ字は先づ第一に彼の好奇心を動かした。兄たちの學ぶそれらの本をかりては自分でふりがなをつけ、とう／＼小さい單語や、ローマ字で手紙をさへ書く様になつた。

「英男ちやんイロハもろくに書けないでローマ字をかくつて變だナ」かう云つて兄達は笑つた。後年彼が學校から持つて歸る宿題でも、まづ難解なものを先にしたのもこゝに端を發してゐた。「僕初めに樂なものをやつてしまふとあとのはいやになつちまふ、面倒な方を先にすればあとはひとりで出來てしまふもの」

「本當に英男さんの云ふ通り誰でも一等樂な方に手をつけたのが人情だが、初めから後に來る自分の氣持ちを考へるのは偉い」かう云つて私は彼を賞讃した。このやうに、何事にも近眼でなかつた彼——母はこの追々進展しつゝある我兒の性情に深き望みを屬すると共に、彼を入るべき學舎について深く考へざるを得なかつた。兄と姉とは誠之に入り、小兄の道男は丁度學齡に達する頃父の洋行留守の極端な經濟關係から最も近く失費少ない千駄木小學校へ入れた——しかし幸ひ今は父も歸り、家政の爲にのみ學校を考へる必要は僅かに免れた。當時大塚の高等師範附屬小學校が最も進歩的で定評のある學舎であつた。と共に入學試験がなかり難關である事を聞いた。私は長女の時もある一種の信念とも云ふべき——或は冒險的な——此一校にのみ願書を出した。そして英男にもその事を云ひ聞けた。かなり多い番號順で入學試験に出席すべき通知が來た。母も子も抽籤に外れなかつた事を喜んだ。「試験だと云つて何も怖がつたり心配したりしないで、よくゆつくり先生のおつしやる事や、若し書いたものが出たら見落さないように落ちついて——」「ウン僕、何でもおかあまのいふ通りにする」かう云つて私に伴はれて元氣よく校

門を漕げた。受験のために集った幼い児童達は皆それ／＼附添人に伴はれて多勢集つてゐた。「オヤあなたも——」
「オヤあなたも——」と待合室に頭を下げる知己の夫人は意外に多かつた。殊に私の感慨に堪へなかつのは華族女
學校當時同級で私と一二を争つた川田剛先生——有名な漢學の大家——の長女綾子さんが、丁度英男と同年の長男
を伴はれた事だつた。華族女學校時代にお母さんと一二を争つた、その子同志が又この同じ學窓に學ばんとするか
それにつけても益々今日の試験を無事に通過させたい。ありし日の競争心！それは異つたものながら私はある感
じを感ぜずにおられなかつた。

定刻通り試験は開始され、幼いながら緊張して別室に各自の試験は終つた。「どんなだつたの？」振鈴と共に吐
き出される教室の入口に我子を擁して聞いた。こんな幼い者にまで入學といふ文字と共に試験といふ苦い感じを味
はせなければならぬ學業の階梯にある憐憫を感じながらかう聞かないではおられなかつた。

「オカアマ、何でもなかつたの、ちつとも六ヶしくなかつた、僕こわがらないでドン／＼返事したら先生笑つて
聞いてゐたの」

案じた程でなく彼はニコ／＼してかう答へた。最後の體格試験の時は最も彼の特色を發揮した。多勢の幼い受験
者や附添人の前に順次呼び出して、校醫はいろ／＼の質問をし、診察をした。いよ／＼彼の番になつた。母に伴は
れた彼はその一室に入るとすぐ大きな聲で校醫に云つた。「先生この部屋は馬鹿に暑いなあ、少し開けた方が
よかない？」臆面のないこの一言は其静寂を破つた。私は靜かに彼にさゝやいた。

「英ちゃん、こゝは皆さんが薄着になつてあんなに見ていた／＼の、それであつたためであるんですよ」
やがて型の如き診察がすんで「サア君着物をぬいで、部屋のはじからはじまでかけて見給へ」と校醫がいつた。

「ウン、ヨシ、ソラ駈けるぞ」かういふと同時に彼はシャツ一枚の身輕げに隅から隅まで勢よくかけた。

「君すい分元氣だな」かういふ校醫の詞に私は思はずは、笑んだ。及落の通知はかなり私を待ち遠がらせた。無關
心に不相變元氣な我兒を見つゝ、私はこの事について一言も彼の心を煩はせなかつた。もし自分で氣が付いて
聞けば仕方がないがそれまでは——しかしもう入學するものときめたらしく彼はつひに及第の通知が母の胸を躍ら
すまで一言もその事に言及しなかつた。

一年の先生はK先生と云つた。細心で行届く事は稀に見る程の人であつたが、その代りひどく神経質で無邪氣な
兒童の心をおびへさせる様な峻烈さもあつた。それはある正月休みのあとの事であつた。久しぶりで彼の大好きな
お友達にあつて定めし喜んで歸るであらう彼を待ちながら、自分もほ／＼笑みつゝ其歸りを迎へた。「只今」もそこ
／＼彼はかう云つた。「おかあま！僕今日お友達がかわいさうだつたの、おかあまはどう思ふ——」

「それは何なの？」

「あのね、K先生が、『僕によこした年賀状の中に川といふ字が曲つてかいてゐるのがあつたが初めの字を曲げて
かき、それがお目出度かるべき年賀状であるだけ不快千萬だ、あんな年賀状なんぞよこさない方がいゝ』かう云は
れて泣き顔になつたお友だちを見ると氣の毒で——かわいさうでたまらなかつた——」

かう聞いた母は胸がつまつた——め／＼何となく事だらう、考しを何と云つて説明したる——考へながら私はかう
云つた。

「そのネ曲つたのはわざとではないのだから先生もそんなに本當に怒つておつしやつたのではないでせう。曲つて
かくよりは眞直ぐな方がいゝにはちがひないのだから——」

しかしこの辨解はどうしても彼にはのみこめない——その後も幾度かこの事についてはつきりした返事を求めて止まなかつた。ある父兄會の時だつた。

「奥さん！ あなたのお子さんはあんまりかたにはまらなすぎで——」

「あ、それはよけいお世話をやかせる様に成つてすみません、しかしどうかもう少しせめて小學校を卒業するまではあまり型にはめないで置いていたゞきとうございますが——」

丁度小學校もよほど

附記

本稿は未完成のものなれども病床にまでその遺骨と共にありし故人の意をくみてこゝに挿録す。

葭の影にそへて

昨年の六月母が逝いて後、私たちの念願は生前母が書きのこして居た様々の思ひ出や日記類を、一年祭までにとりまとめ一冊の本として記念したいと云ふ事であつた。

生前母は文筆を好んだ。若い頃にはよく讀書をもした。特に昭和三年、三男英男を失つてから、母は以前にもまして自身の情熱を文章として表現したいといふ熱望を抱くやうになつたとゞもに、既にその頃は糖尿病が重り、視力衰弱して讀書執筆については全く不如意な健康状態におかれてゐたのであつた。それにもかゝはらず、昭和四年五月から十一月まで凡そ七ヶ月に亘る一家の歐洲旅行にあつて、終始その旅日記を書きとほしたのは、ほかならぬ目の不自由な母であつた。多人數の落つかぬ外國旅行の刻々に印象された見聞、感想をこと細々とよくこのやうに書いたものと、今日讀みかへして母の體の内にかくされてゐた根氣と熱心とに打たれるのである。

書かれた感想の中に母の性格が全幅的に反映してゐる事はもとよりであるが、子として更に懐かしい一人の婦人としての母の或力は、雑多な困難と闘ひながら一つの旅日記にせよ、よく最後まで書きとほした一事にこもつてゐると思はれるのである。母は楽しんで毎月この旅日記の一部分づゝを雑誌「弘道」に掲載してゐた。別に書齋といふものを持たず、食堂の長テーブルの正面に座り、背あかりを受けつゝ一冊十五錢ぐらゐの帳面の上にかゞみこんでは、父からある年の誕生日のおくりものとして貰つた萬年筆を毛糸の袋からとり出して動かしてゐた母の姿こそ私

共に親愛な母の偉である。昨年五月發病當時も母は例の旅日記の下書きを整理中であつたが、遂にそれを自身の手で完結する事が出来ず長逝したのであつた。母が幼年及び少女時代を過した築地向島時代の思ひ出には、明治開化期前後の東京生活が髣髴として興味ふかく初霜（明治三十年の日記）には若かりし父母のつゞましい日常の姿が簡素な行文の間に愛らしく子等の前に輝いてゐる。

頁數その他の關係からこの一冊には母が書きのこしたものの、僅か五分の一を収録し得たに過ぎないのは残念である。

此家族的な雰圍氣に満ちた文集「霞の影」一卷は、私達子等をよろこばせ、盡きぬ感想の源泉となるばかりでなく、五ヶ月の相違で、母をその誕生によつて悦ばすことの出来なかつた太郎や未來のその弟妹たちにとつても、やがて、よき祖母からのおくりものとなるであらうことを確信する。この文集の完成にあたつて、私はこのことのかげに在つて表には語られてゐない父の亡き母に對する情愛の貞潔なる濃やかさに、娘として深き感動を抑へ難いのである。

よみ難かつた母の原稿の淨書から印刷に關する煩瑣な事務萬端について援助を惜しまれなかつた私の親友壺井榮夫人に感謝する次第である。

昭和十年五月

百合子

昭和十年七月十日印刷
昭和十年七月十五日發行

【非賣品】

著者	故中條霞江
編輯者	中條百合子
發行者	中條精一郎 東京市本郷區駒込林町二十一番地
印刷者	菊地嘉夫 東京市小石川區關口町六五番地

印刷所 精文社印刷所
東京市小石川區關口町六五番地
電話 五〇四九番

(飯塚製本)

終

